れよりも致命的であつたのは繁峙方面に受けた突破である。之も何れかと云へば陣地の險要に依頼し過ぎたのと、楊、傅兩軍の接續點の防備薄弱であつた爲めに外ならぬ。

共産第八路軍が陣地から八里離れた靈邱に在つたのは何の目的であつたか、陣地の右翼掩護であつたか或は又右翼方面に於ける前進哨の目的であつたか其の意を得ない。何れにしても殆んど何等の效果もなく却つて敵を誘致して本陣地の右翼を過早に突破せらるゝの因を作つたものである。之も畢竟共産軍が山西及び中央軍の統制下に入るを好まずして獨立行動を恣にせんとした我儘に外ならぬ。

騎兵をして朔縣に陣地を占領せしめたのは適當ではあるまい、騎兵は矢張此の際其の本來の捜索に任じ、又は機を見て奇襲し得る如く其の位置を占むべきである。されば地形上、大同に通ずる桑乾河谷の平地を選むより外あるまい。要するに此の騎兵は徒らに防禦の姿勢にあつた爲め、其の敗退は直ちに後方の寧武迄も其の敗渦の中に葬つてしまつた。つまり騎兵の用法を誤つたものである。

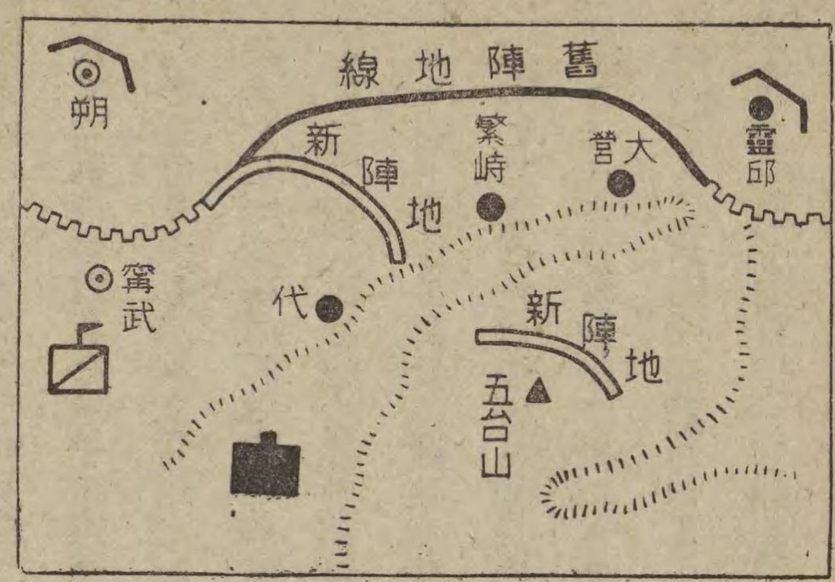
其二、 八萬の兵を四十里の正面に配布したから一萬の兵を以て五里の正面を擔任した譯である。如何に長城の鐵壁があり、雁門關、茹越口、平荆關等の險要があつても、斯く薄弱であつては、敗れざらんと欲するも出來ないのである。之が即ち備へざるなし敗れざるなしと云ふものだ。中央を突破分斷されたのは固より當然のことである。

長城の如き舊式築城並に其の附近の岩山石角の如きは古き兵器時代の戰に在りては、所謂金城鐵壁、難攻不落でもあつたが、現代の如く、迫擊砲、重砲、飛行爆彈、煙幕等が使はれる時代にありては以上の如き岩壁石角は

却つて味方の損傷を大ならしめ、爲めに一般の期待を裏切つて案外早く陷落してゐる。

其三、支那軍の八萬は楊軍、傅軍、共產軍、騎軍の四個の單位に分かれ、所謂支那流の他敗傍觀、勝利自收の筆法を直ちに戰場に用ひようとするから、八萬の兵を一統制の下に有利に用ふることが出來なかつた。

然らば此の際どうすれば、よいかと云へば、右軍を五臺山に、左軍を雁門關—代州附近に置き、騎兵を寧武に、共產軍を豫備として左軍方面の後方に置くを至當とせん。即ち右方平荆關方面を後方五臺山に引き下げ以て防禦正面を狹くして防禦力を大ならしめようと云ふのである。



陣地占領案
（昭和十二年十月）

其三　忻口鎭の戰（昭和十二年十、十一月）

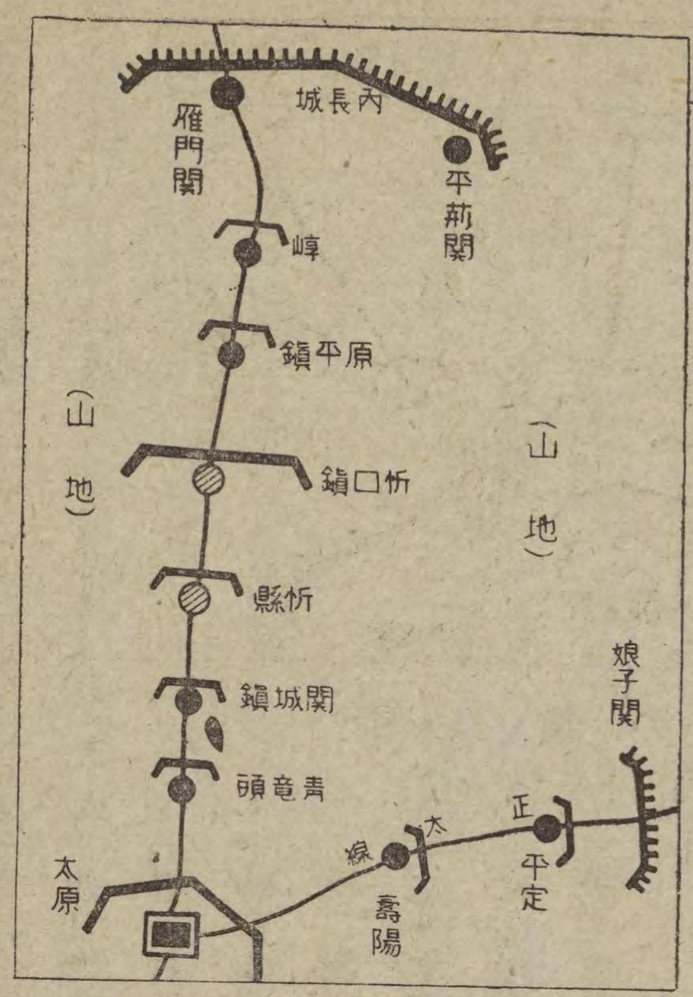
山西省の本據太原の北方防禦は、雁門關の在る內長城を第一線とし、忻口鎭を第二線としてあつた。勿論長城の南方崞縣、原平鎭、又忻口鎭の南方忻縣、關城鎭、青龍頭等の要地には相當堅固な防禦設備を施してあつた。太原から內長城の線までは約四十里、忻口鎭までは約二十五里である。此の間は所謂大行山脈の間を貫く隘路であつて歩々皆防禦陣地と云ふ有樣であつた。此の間を日本軍は濛々たる黃塵を侵し、日中は八十度、夜間は四十五度と云ふ氣溫激變の自然を克服しつゝ敵を追擊するのであつた。

る。此の間は所謂大行山脈の間を貫く隘路であつて歩々皆防禦陣地と云ふ有様であつた。此の間を日本軍は濛々たる黄塵を侵し、日中は八十度、夜間は四十五度と云ふ氣溫激變の自然を克服しつゝ敵を追擊するのであつた。

内長城の第一線陣地に敗れた支那軍は忻口鎭の堅固なる第二線陣地に退き、兵約十五萬を以て正面約八里に亙る防壘に據つた。

内長城線の戰に勝つた日本軍は不眠不休の勢を以て敵を追擊し、十月十三日より攻擊を開始し十七日には東方高地の一角を占領したが敵は其の大軍を頼み且つ督戰隊の强制の下に頑强に抵抗するので攻擊開始以來既に七日を經過するも未だ陷落の徵候を見ない。そこで日本軍は盛んに飛行爆擊を施すと共に、三方面より更に猛攻を續け二十一日には忻口鎭西方の高地を占領し此處に日章旗を飜して大いに志氣を振はしめた。

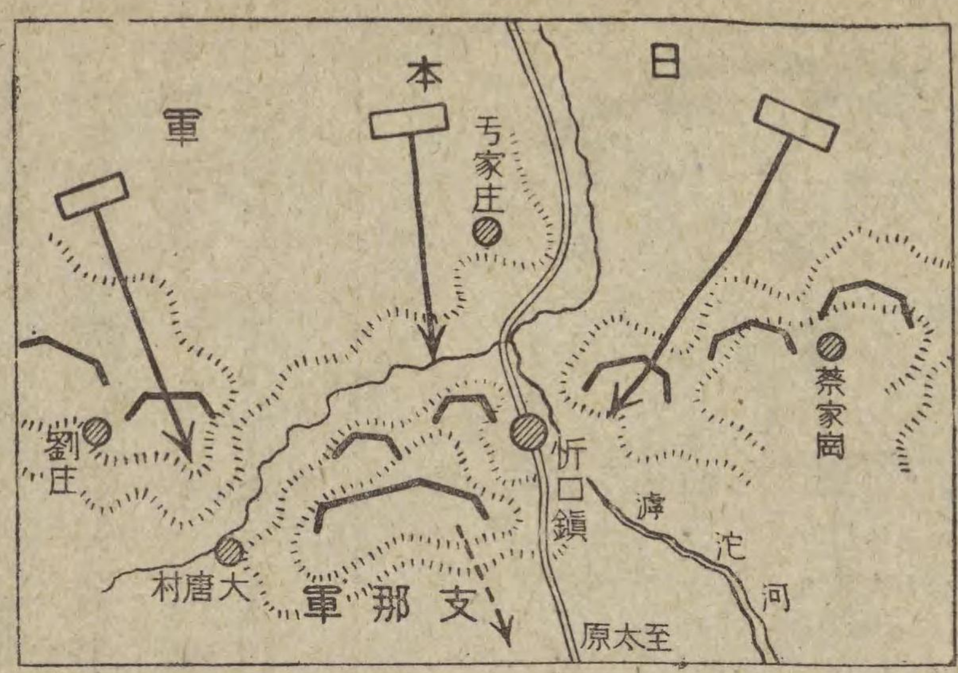
十一月二日夜日本工兵隊は決死隊を組織して敵陣地爆破を決行すると共に、全線に亙り一齊に總攻擊を開始した。第一線部隊は雨の如く注ぐ敵彈を冒して勇躍敵陣地に突擊、壯烈なる肉彈戰を展開し、雛壇の如く幾重にも重つてゐる敵陣地を片つ端から突擊を以て占據し、明治節の佳き日たる十一月三日午前



太原の防禦線
(昭和十二年)

零時全線八里强に亙り深さ一里に及ぶ天然、人巧の妙を盡した要害忻口鎭の陣地を占領し、山上高く日章旗を翻へした。全線戰場は累々たる死屍を以て掩はれ、無數の武器彈藥は散亂し敵の死傷約三萬と推定された。

日本軍は息をも繼がせず直ちに猛追擊に移り、其の日卽ち三日には忻縣城に肉薄し三面より包圍して之を陷れ四日には關城鎭に突入し、五日には太原北方四里の青龍頭を占領し六日には更に太原北側近くの小流の線まで進入した。此の時恰も東方京漢線を進擊中なる日本軍の一部は正太線に沿ひ西進し既に娘子關の險を突破し平定、壽陽を陷れ近く太原に迫らんとするの形勢にあつたので、敵の本據太原は正に挾擊の運命に陷つたのである。されば先づ此の正太線上娘子關方面の戰を說くであらう。



忻口鎭の戰
（昭和十二年十一日）

其四　娘子關方面の戰（昭和十二年十、十一月）

娘子關は居庸關、雁門關と共に天下三關の一と稱せられ山西省東門の鎖鑰である。今之が東方より來る日本軍によつて突破占領されたのである。其の由來を少しく述べる。

北京方面に在る日本軍は九月中旬から京漢線方面に在る敵に

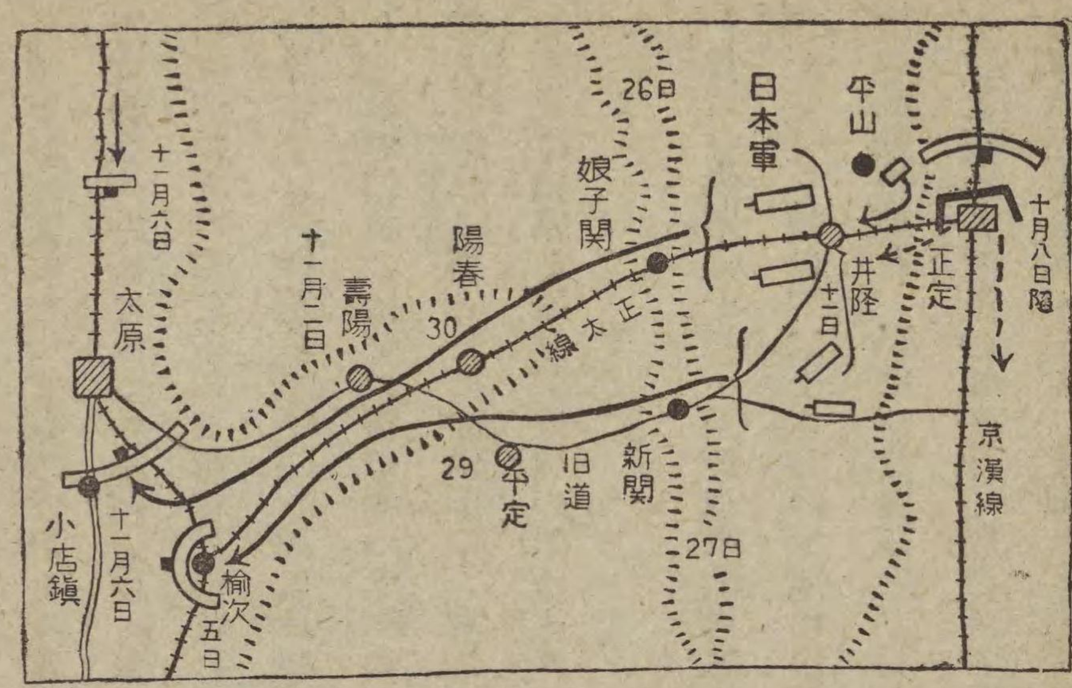
對し猛攻擊を開始し、涿州を陷れ保定を破り連戰連勝、十月八日には早や山西省への入口正定を陷れた。此の時

對し猛攻撃を開始し、涿州を陷れ保定を破り連戰連勝、十月八日には早や山西省への入口正定を陷れた。此の時日本軍の右翼に在つて敵の左翼を攻撃しつゝあつた鯉登部隊は敵を撃破しつゝ平山方面より前進して十月十一日正太線上の井陘に出て娘子關方面に退却したる敵を追撃した。之からして此の方面の戰が起るのである。井陘は韓信が背水の陣を布いて趙軍を撃破した古戰場である。

日本軍は井陘から娘子關方面に進撃するのであるが、井陘、娘子關約五里の間は省境の天險で山又山が重壘し、我が箱根の山を縱横に幾つも重ねたやうな天下の險である。頂上一帶は草も木も生えぬ峨々たる岩盤の禿山で人の通れる道としては僅かに正太線に沿ふ谷底の險路あるのみ、敵は此の天險の突角と云ふ突角を打ち拔いて洞窟式に要塞を築き、山腹の要所々々には岩盤を削つて望樓式の堡壘を築き、それが五里の間蜿蜒として續いてゐる。

故に日本軍は十月十五日以來數縱隊に分かれ山間を縫ふて惡戰苦鬪、朝に一高地を陷れ、夕に一溪谷を屠ると云ふ奮戰を續け、二十六日には遂に山西の關門難攻不落を誇つた天下の險娘子關を攻略し、二十七日には其の南方の新關を陷れ、勢に乘じ急追を强行した。此の際、山間を分進した日本軍は敵の背後に出でたので敵に多大の損傷を與へた。此の娘子關一帶の陣地に據つた敵は約十二個師にして孫連仲の部隊が其の多數を占めた。是等の敵軍は殆んど其の半數は潰滅し、戰場に遺棄された死體は總計一萬人を超え、武器彈藥等多數の鹵獲品があり之に對し日本軍の死傷は極めて僅少であつた。

娘子關の天險を突破し意氣軒昂たる日本軍は鐵道線路及び舊街道を猛進して敵を追擊し、二十九、三十日には平定並に陽泉を占領し、尙ほ手を弛めず急追し、十一月二日には此の方面の要地壽陽を攻略した。此の時飛行爆彈は敵の退路を猛擊して多大の損害を與へた。十一月五日先鋒部隊は榆次を占領して同蒲鐵道を遮斷して太原より南下する敵の退路を完全に封鎖し、六日他の一隊は小店鎭に進入し南方より太原に向ひ迫らんとした。



娘子關方面の戰
（昭和十二年十月・十一月）

以上の如く太原は北、東、南の三方面から包圍の形勢に陷りて決定的大打擊を蒙り、山西の大勢正に決せられんとするに至つた。

其五　太原の陷落（昭和十二年十一月九日）

愈々太原攻擊の幕となつた。

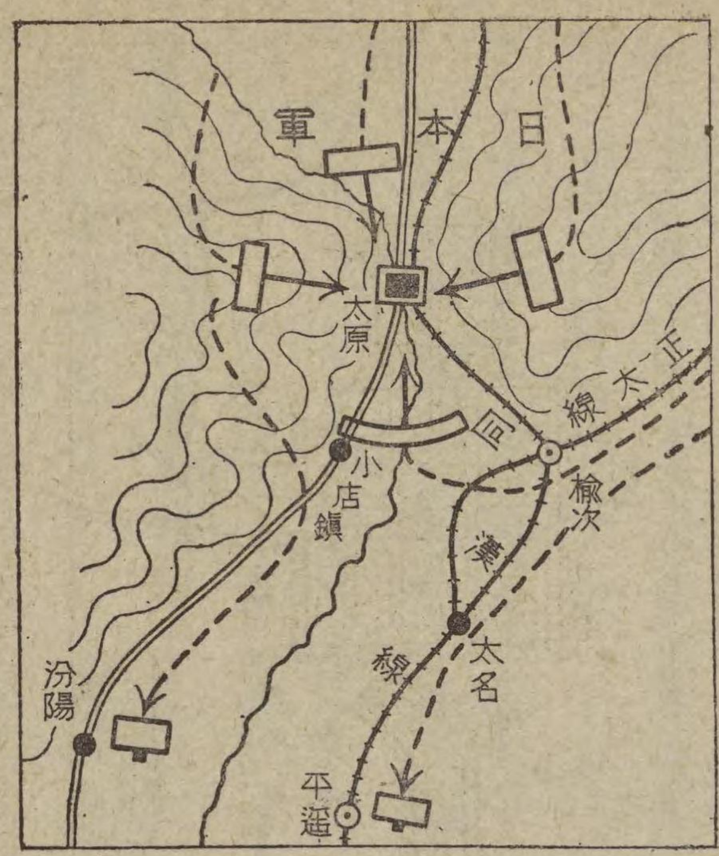
太原攻略は日本軍の分進合擊の作戰により同蒲線（大同―太原―蒲州）を南下した部隊と、正太線を西進した部隊との挾擊により閻錫山が三十萬を以て防備した敵陣最後の牙城も敢なく潰えることゝなつた。

北方より同蒲線を南下急追の日本軍は續々と太原城に迫り東、北、西の三方より包圍して其の死命を制した

により閻錫山が三十萬を以て防備した敵陣最後の牙城も敢なく潰えることゝなつた。

北方より同蒲線を南下急追の日本軍は續々と太原城に迫り東、北、西の三方より包圍して其の死命を制したが、無辜の市民に戰火を及ぼすに忍びず、飛行機による傳單、軍使派遣等により降伏勸告を行つたが、七日支那軍は不法にも軍使に對し突然射擊を加へ、抵抗の戰意を示したので、同日斷乎太原城攻擊を始め城兵殲滅の火蓋を切つた。殷々たる砲聲は山西の天地も裂けよとばかり轟き、集中する十字砲火は、城壁を刻一刻と崩し、恰も太原入城の勇壯なる前奏曲を奏するかに見えた。

翌十一月八日午前九時半頃城壁の東正面の一角先づ崩れ次いで北側正門の一角も破れたので、日本軍は此の破壞口より潮の如く城内に雪崩れ込み、隨所に市街戰を展開して殘敵を掃蕩した。斯くして太原城は九日午前八時半を以て全く陷落し翌十日日本軍は堂々たる入城式を行つた。

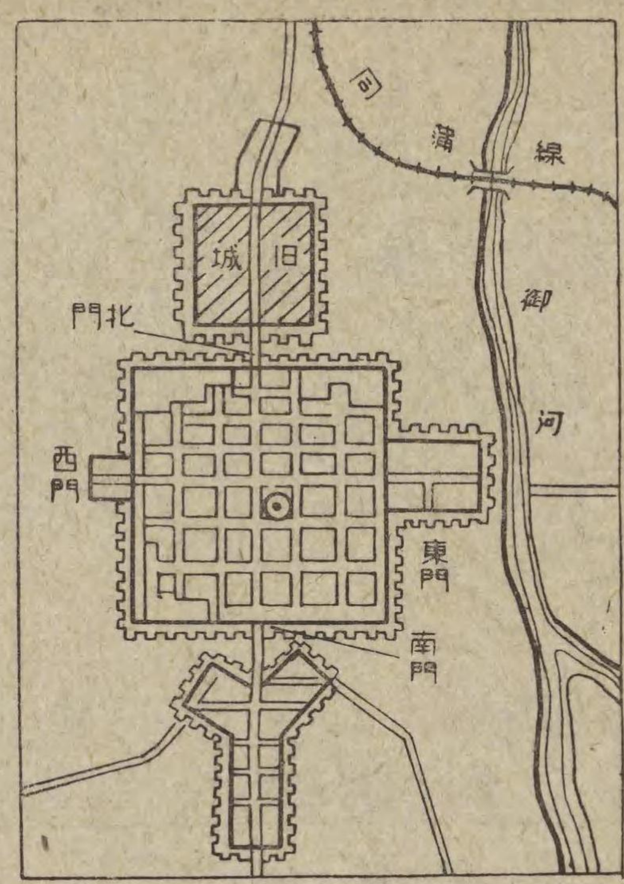


太原陷落
（昭和十二年十一月九日）

一方正太線方面から敵を追擊前進した日本軍は南方に向ひ追擊を續行し十一月九日には大谷を經て平遥に進入し、又太原より南下せる部隊は同日汾陽を占領して相連絡し、爾後主力を太原に集結し占領區域内の至嚴なる警備に任じ、來るべき掃匪戰を企圖した。十二月に入

るや正太線南方昔陽附近及び太原の西北方向陽鎭附近に蟠居せる賊匪に徹底的打擊を加へ以て越年するに至つた。

太原城を最後まで守備した支那軍は山西軍の四個聯隊らしく、其の多くは西方山地に遁入した。太原で日本軍の押收した主なるものは大砲八十門、迫擊砲四百門、米二萬俵、粟類四千俵、メリケン粉一萬袋、ガソリン二千罐、煙草二百五十萬本其の他防毒面、乾麵麭等多數であつた。



太原城

太原は山西省政府の所在地であり、政治、軍事、教育等の中心を占め人口約十萬人である。（經濟の中心は太原の東南の榆次、大谷地方である）、城壁は高さ約十米、厚さ約五米の方形で、北支最大の兵工廠を有し各種兵器彈藥を製造してゐる。

今や太原の陥落により支那軍は全く北支に於ける蠢動の據點を失ひたるのみならず、之により南京政府及び全軍の志氣を沮喪せしめ、北支、中支の作戰に惡影響を及ぼすに至つた。之に反し日本軍は太原を得たことにより、京漢、津浦兩方面の作戰を有利に發展せしむることが出來るやうになつた。

京漢、津浦兩方面の作戰を有利に發展せしむることが出來るやうになつた。

其六　評論

山西省作戰は研究の價値あるものであるが、餘りにも早く支那軍が破れた爲め動もすれば、其の價値を輕視されるの憾なしとしない。殆んど懸崖屏立の山西省攻擊の開始されたのは九月二十日頃で、牙城太原の陷落が十一月九日であれば其の日數五十日で其の行程は約五十里內外であつた。

【支那軍に就いて】　支那軍は何故に敗れたか、かの所謂一夫道に當れば萬夫も進む能はずと云ふ天下の雙險娘子關は東方に、雁門關は北方にあり、しかも山又山、巖又巖である、其の上に萬里の長城が蜿蜒として蛇の如く險岨を縫ふてゐる。されば如何に支那軍の弱兵でも現代兵器を以て守るに於ては日本軍の豪を以てしても其の攻略は容易であるまいとは天下の認むる所であつた。然るに實際に於ては日本軍は苦戰したとは云へ、五十日を以て之を突破攻略して了つたのである。抑も何のためか。

それは支那軍の防禦は眞の防禦ではなかつたからである。防禦した支那軍を何故斯く云ふのであるか、之に就いては次のことを考察するの必要がある。

如何にも雁門關の陣地にせよ、娘子關の陣地にせよ、それは閻錫山が山西モンロー主義を取つた時代から既に堅固に構築したものである。故に支那軍が今回事變の初めから此の陣地に據り、陣地の强さと大さに相應するだけの兵力を確と配備し、前後左右、上下の指揮統制の取れるやうに占領してゐたならば山西の陣地は容易に陷落しなかつたであらう。然るに今回の支那軍はさうではなかつたのである。

彼等の初念は防禦でなく攻撃であつた、日本軍與みし易しとなして進軍したのである。乃ち娘子關を出でては京漢線に顏を出し、雁門關を出でては京綏線上に攻勢を取り北京の背後を突かうとしたのである。事實はそれを證明してゐる。故に彼等としては關門に據つて防禦しようとの考へは毛頭無かつたのである。

然るに戰運非にして連戰連敗し已むを得ず、其の既設陣地たる關門線に據つたのであるから、防禦配備を十分に整ふるの餘裕がなかつたのである。何んとなれば北京の西北方居庸關の戰に敗れて退却を開始したのは八月末頃と見るべく、此處より雁門關の陣地まで約七、八十里もあれば、其の間敗殘の兵を纒め、しかも日本軍の息をも繼がせぬ猛追擊を受け、山又山の山地を走つて、やつとのことで雁門關の新陣地に就いたものゝ、十分防禦配備を考究するの遑もなく、早や九月二十日頃には陣地の猛攻擊を受けてゐるのである。故に約十萬の兵が二十日間に七、八十里の山地を潰亂的に退却し、そして新陣地に踏み留まり新陣容を整へて有利な防禦戰鬪を爲すことは到底出來ないのである。故に雁門關の天險陣地は案外早く突破されて了つた。之は無理のないことである。防禦工事は頑丈に出來てゐても配兵其の宜しきを得ざれば陣地としての價値を十分發揮することが出來ない。支那軍の防禦は正に之であつたのだ。

娘子關の陣地も亦然りであつて、初めからの配兵でなく京漢線で敗れて已むなく此處に踏み留つたのであるから雁門關同樣十分其の效力を現はすことが出來ず、僅々二、三日の攻擊で陷落して了つたのである。

第一の關門である雁門關、娘子關が陷落せんか、既に山西省の固めに破綻を生じたものであるから、其の後方の忻口鎭や關城鎭で防戰した所で、それは一時的のものであつて、到底怒濤の如く押寄せ來る日本軍を防ぎ得ら

第一の關門である雁門關、娘子關が陷落せんか、既に山西省の固めに破綻を生じたものであるから、其の後方の忻口鎭や關城鎭で防戰した所で、それは一時的のものであつて、到底怒濤の如く押寄せ來る日本軍を防ぎ得られるものではない。殊に敗殘の兵を以て歩々防戰、しかも陣地に嚙ぢり附きの防禦では尙更のことである。

斯くして山西の核心太原は當然の運命によつて陷落したのである。即ち攻擊計畫は失敗して餘儀なき防禦と變り、爲めに其の防禦が一糸亂れざる計畫に依るでなく、俗に云ふ行き當りばつたりの配備を取つたから、從つて守り從つて敗れたのである。故に支那軍の敗れたるを以て直ちに天險恃むに足らず、陣地無價値と斷ずる譯には行かぬ。研究は須らく其の深奥にまで及ばなくてはならぬ。

【日本軍に就いて】 日本軍は雁門關、忻口鎭、娘子關、太原の四攻擊戰を行つたが何れも皆戰法の原則を應用した。

即ち雁門關及び娘子關の攻擊に在りては山地戰の原則に從ひ分進し各隊は一意其の當面の敵を擊退して以て他隊を直接間接に援助する如くして戰陣突破の效を奏した。又忻口鎭、太原の攻擊に在りては分進合擊の法を用ひそれが又何れも奇效を奏した。思ふに敵に敢然たる逆襲と云ふものがなかつたから斯くも容易に奏效したものでもあつたらう。

雁門關を突破して太原に向つた日本東軍と、娘子關を突破して太原に向つた日本東軍とは、よくも期を同うして太原攻擊に落ち合つたものである。之は最高統帥の作戰指導の妙でもあらうが、戰況の自然が斯く天佑的な發展を見せたものであらう。此の兩軍が互に敵の背後に脅威を與ふる位置を占めたので一層太原攻略を容易ならし

めた。此の作戰は一の範例として戰史の上に光を發するであらう。

要するに此の方面の日本軍が八月十二日初めて北京の北方南口の敵に向ひ攻擊の火蓋を切つて以來十一月九日太原攻略まで約三箇月、此の間寡兵を以て數倍優勢の敵に對し連戰連勝、しかも惡天候と戰ひ、山又山の險を踏破して察哈爾、綏遠、山西の敵を掃蕩したる偉大なる戰功は史上稀に見る所である。山西の側面茲に安んじて京漢、津浦方面の戰に一段の生氣を與ふるに至つた。

第四節　京漢線方面の戰（昭和十二年）

日支事變が本格的になるや、戰は京綏線、京漢線、津浦線の三線を中心とした三方面に起つた。此の中、日支兩軍の作戰の重點となつたのは、政治、軍事、經濟、地形上からして京漢線であつたことは固より當然である。

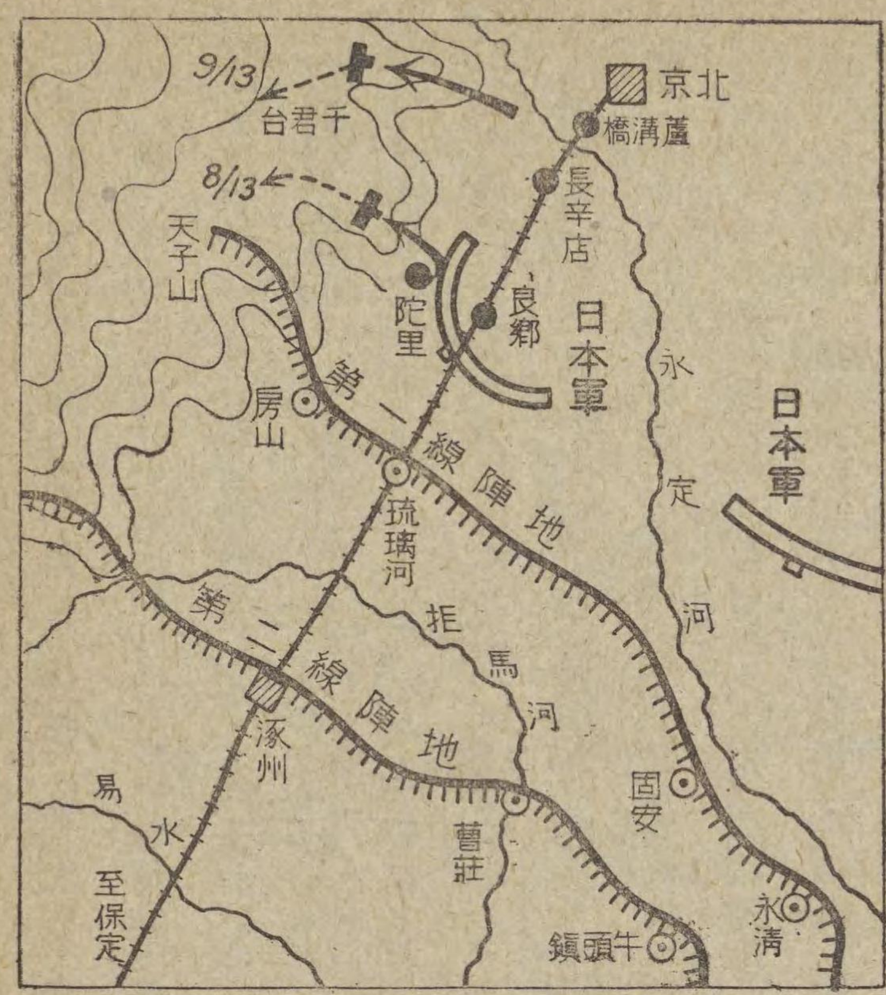
七月七日蘆溝橋事件起るや、數次交渉の結果、支那側の誠意なきを認め、日本軍は北京附近に在る支那第二十九軍を膺懲するに決し七月二十八日行動を起し、二十八、二十九の兩日を以て之を擊滅掃蕩し、二十九日には蘆溝橋（宛平）を取り翌三十日には永定河を越えて長辛店を占領し越えて八月四日には一部を以て其の前方の良鄕を略取して爾後の作戰を準備した。

其の內日本軍は內外一般の狀勢に鑑み、先づ八月十二日、北京北方の京綏線上に在る敵の攻擊を始め、而して之より約一箇月後れ九月中旬に京漢線方面の敵に對する攻擊を開始した。此の一箇月の間隔を置いた作戰に關する研究は後述することゝして、以下京漢線上に起つた戰を逐說するであらう。

其の内日本軍は内外の形勢に鑑み、八月末頃より北支北部の線を撤退し、之より約一箇月後れ九月中旬に京漢線方面の敵に對する攻撃を開始した。此の一箇月の間隔を置いた作戰に關する研究は後述することゝして、以下京漢線上に起つた戰を逐説するであらう。

其一　涿州附近の戰（昭和十二年九月十八日）

京漢、津浦兩線に依り北上中の支那軍は八月二十日頃には三十師約四十萬と號され、京漢線方面のものは孫連仲、馮占海、萬福麟の麾下にして其の兵力約十萬は既に涿州附近に來り陣地を占領し、其の右翼を永定河に托し左翼西方山地に亙る約十五里、第一線陣地線を永清、固安、琉璃河、房山、天子山の線に、第二線陣地を牛頭鎮、曹莊、涿州及び其の西北方高地の線を占領してゐる。涿州は夫れ自體堅固なる城壁なるに加へて、右には永定河、前には拒馬河の障碍を控へ、左には峨々たる山險を擁するを以て其の陣地の堅固なることは想像し得られるのである。



涿州の支那陣地
（昭和十二年）

【戰前の狀況】　日本軍の占領しある良鄉と涿州とは約八里を間してゐる。支那軍は此の良鄉

及び其の後方にある日本軍の右側背を脅威する目的を以てか、良鄉の西方陀里の高地及び千君臺の高地を占領した。其の兵力は約三箇師團と推定された。日本軍に在りては爾後の作戰上、右側に此の脅威の存在を許さず、よつて八月二十日より同三十日迄の間に於ては陀里高地の敵を、九月六日より同十三日迄の間に於ては千君臺高地の敵を攻擊掃蕩して右側背の脅威を完全に除去し、然る後、堂々と涿州の攻擊に取り懸かつたのである。

【戰鬪の經過】　日本軍は大體に於いて三方面より包圍的に攻擊を開始した、其の正面約二十里。右軍は九月十五日京漢本道方向より涿州の北方に向ひ、中軍は九月十四日永定河左岸より固定北方を突破して涿州の東方に向ひ、左軍は同日同じく永定河左岸より永清を突破し、それより涿州の背後に迫る如く行動した。折柄の豪雨、泥濘の濕地に妨げられたが此の包圍攻擊運動は容易且つ迅速に行はれた。

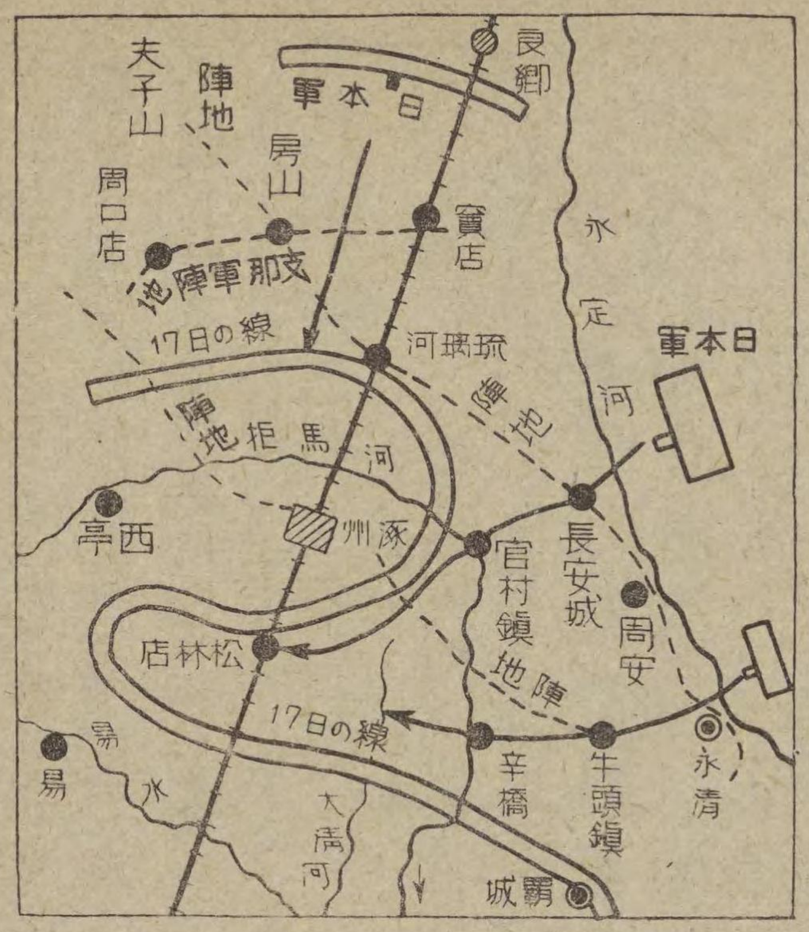
右軍は十五日房山附近の敵堅陣を拔き、十六日には周口店、竇店鎭の線に十七日には琉璃河の線に達し、十八日には早くも其の一隊は拒馬河右岸の西亭附近に進出し涿州包圍攻擊の樞軸として爾後に於ける全線の飛躍的進展を思はしめた。拒馬河の南に易水がある、一名南拒馬河とも云ふ。かの刺客荊軻が歌つた「風蕭々として易水寒し、壯士一たび去つて復還らず」の詩で有名である。蓋し此の河は戰國時代に燕と趙との境界であつて所謂燕趙悲歌の士の往來した所である。

中軍は是れ亦右軍に劣らず、十五日第一の障碍たる永定河を渡り長安城を陷れ、頑强に防戰中なる馮占海、萬福麟の敵軍を擊攘して中央突破、敵陣分斷の作戰に出で、赫々たる戰果を收めつゝ、十六日には宮村鎭に進出し更に苦心慘憺の努力を拂ひ、第二の障碍たる拒馬河を渡り西へ〳〵と敵を急追し、十七日には戰車隊の先鋒は遂

福麟の敵軍を擊攘して中央突破、敵陣分斷の作戰に出で、赫々たる戰果を收めつゝ、十六日には宮村鎭に進出し

更に苦心慘膽の努力を拂ひ、第二の障碍たる拒馬河を渡り西へ〳〵と敵を急追し、十七日には戰車隊の先鋒は遂に涿州南方三里の松林店驛に潮の如くに殺到した(松林店附近に三國志で有名な蜀の玄德の生れた村がある)。時しも朝まだき霧立罩むる平原の鐵路上に到達した將兵の意氣は正に天を衝き、萬歲の聲は四境に谺して天地を震撼し暫し其の止むのを知らなかつた。斯くて中軍は南より逆に涿州へ〳〵と突進するのであつた。

左軍は十四日敵を攻擊し同夜一擧に永定河を渡りて永清を占領し、飛行機協力の下に敵に向ひ突進し十五日夜には牛頭鎭の線を占領し、十六日拂曉該線を發し、豪雨、泥濘を物ともせず十八日には拒馬河畔の辛橋に進出し、更に大清河を渡り敵を涿州南方地區に向ひ壓迫し、一層涿州の包圍圈を擴大强化した。



涿州の陷落
(九月十八日)

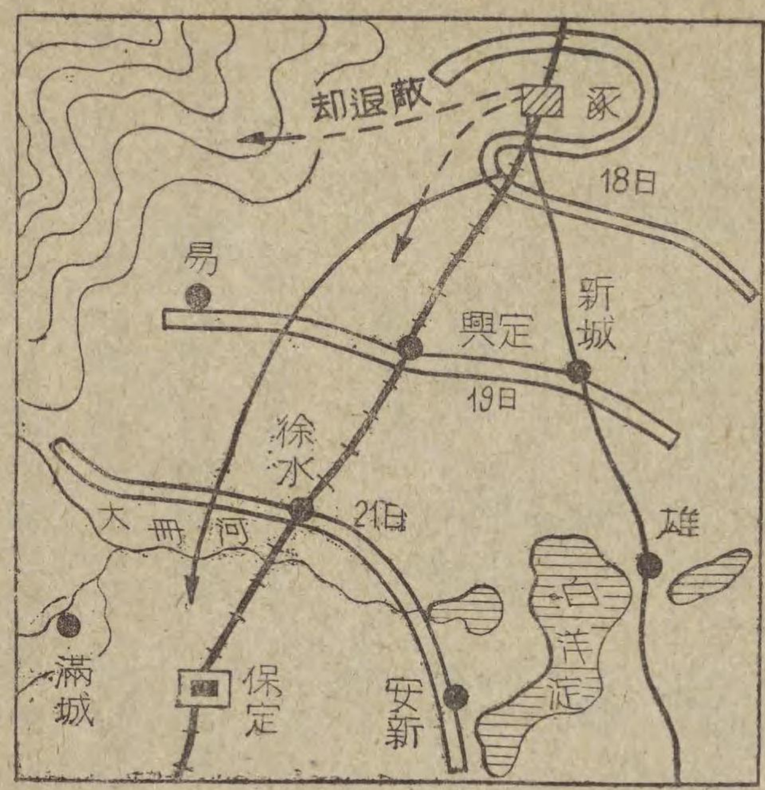
斯くの如く涿州は西南の一部を殘して包圍に陷つたので十七日夕より十八日の朝にかけて正に危機一髮の難局に直面した。進んで玉碎するか退いて瓦全するかは天下衆目の焦點となつた。浮足立つた敵は十八日日本軍の猛攻擊に會ふや、未だ決戰を交ふるに至らずして、

脆くも退却を始め涿州の天險を後に、脱兎の勢すざまじく其の主力は保定を目指して潰走した。即ち萬福麟軍は保定方向に、孫連仲軍は西南方山岳方向に、馮占海軍は易州方向に敗走した。

日本軍は敗敵を急追し、十九日には易州、定興、新城の線に、二十一日には大冊河、徐水、安新の線に進出し殘敵を驅逐しつゝ保定に向ひ追擊した。保定は前方僅かに六里の距離にあるのであつた。

此の戰に於ける支那軍の死傷は五、六千を下るまい。日本は寡兵を以てよく十數萬の大敵、しかも精鋭の聞えある中央軍を合はせ一擧に之を擊退して戰史上に其の名を貽した。其の包圍作戰の指導は理想以上に好轉したが、唯連日の豪雨、濕地の多き戰場であつたのと、もう一つは兵力の寡少の爲に、包圍殲滅戰の雄圖將に成らんとして長蛇を逸したるは千載の憾事である。されど包圍作戰の好範例たるは史上に其の光を失ふものではない。又涿州陷落の九月十八日は滿洲事變六周年記念日に當るを以て特に感慨の深きを覺ゆる。

涿州附近は古への涿鹿の野であつて黃帝が都したとも云ひ、又黃帝が指南車を作つて大霧中に蚩尤と戰ひ大勝



涿州陷落後
（昭和十二年九月）

を得た處であるとも云はれてゐる。

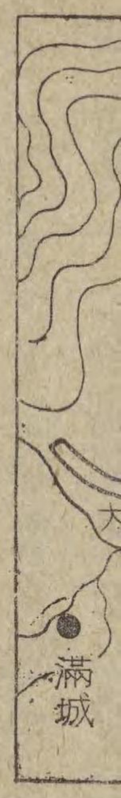
其二　保定附近の戰（昭和十二年九月二十四日）

涿州攻略後日本軍は全線を擧げて敗敵を追擊し九月二十一日頃には保定を距る約六里の大册河の線に進出した。

保定は河北省平地に於ける作戰上の要點で、保定東方地區には白洋淀其の他の湖沼を連ぬる一帶の卑濕地帶あり、冬季結氷期の外は通過不可能で南北交通上の一大障碍をなしてゐる。

尙ほ西方には通過極めて困難なる山地帶が連亙して保定は丁度此の兩者の中間にあつて一の隘路を成形してゐるので、南方に對しても北方に對しても一の戰術上の要點をなして居り、曾つて昭和六年東北軍が此の要線を占領して京漢線上を北上する石友三軍を拒止することに成功した。

保定は人口十萬、四周には煉瓦造りの高さ十五米もある立派な城壁や高塔を有し、幅二十米の水濠を周らし河北省北方平野に於ける軍事上、經濟上の重要都市で、宋時代に保塞軍を置いて政治の中心たり、明時代には保定府と稱し、清朝に入つて政治及び軍事教育の中樞となり、保定軍官學校を置き蔣介石初め現代支那の高級軍官は殆んど本校出身者で、軍隊方面に於ては隱然たる勢力を有してゐる。しかし革命後廣東に黃埔軍官學校が新設され蔣介石が校長となつて以來、陳誠以下の現代青年將校の中堅層の多くは此の新校出身であるので、保定派は秋風寂寞の觀がある。明治三十三年北清事變に際し列國兵は此の地まで進軍し來り、近年は曹錕や吳佩孚の本據で



涿州附近は古への涿鹿の野であつて黃帝が都したとも云ひ、又黃帝が指南車を作つて大霧中に蚩尤と戰ひ大勝

あつた。

保定の陣地は津浦線の滄州の陣地と共に、支那軍が對日作戰上、北方に於ける第一線陣地の據點として數年の久しきに亙り研究の上、昭和十年決定の對日作戰計畫に基き石家莊、隴海線沿線の陣地と共に多くの時日と經費を費し構築した堅陣であつて、其の線は右は濕地帶に接する劉口より漕河鎭、黃村を經て左り滿城に達し、尙ほ右翼に於て別に勾形の一線を內側に設け、十數萬の大軍を以て此處を防守してゐたのである。

【戰鬪の經過】 日本の右軍は大册河の線より進出して二十三日未明滿城を陷れ、勢に乘じ保定の西南方に突進し方順橋附近に於て京漢鐵道を占領して石家莊への退路を遮斷した。

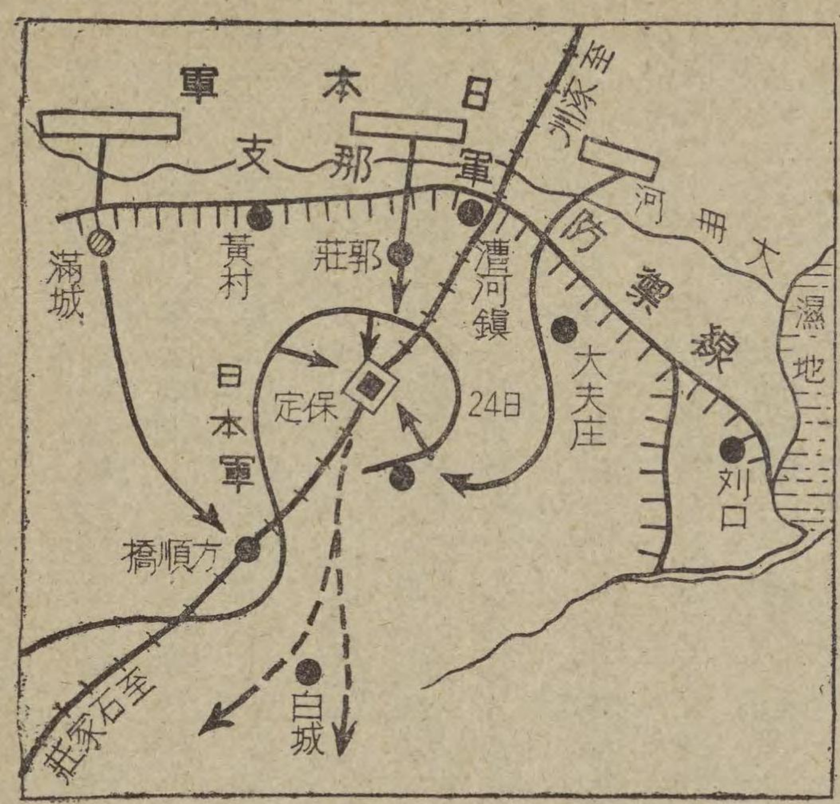
又北方より保定の正面に進擊した中軍は此の日途中敵のトーチカ陣地を攻略したる後郭莊附近の線に迫り、又左軍も同日遠く東方を迂回して東側城壁に迫りて南大園(保定東南)に進出した。斯くの如く、右、中、左の三軍が相俟つて保定を包圍するの態勢を占め得たのである。

明くれば九月二十四日早朝、北方より保定攻擊中の中軍諸隊は砲兵協力の下に、我が砲彈の爲め崩れ落ちた城壁の北突角に向つて突進し、敵迫擊砲、機關銃の猛火を冒し、鐵壁下にある幅二十米の水濠を渡り、高さ十五米の城壁に駈け上がり、手早く壁上に日章旗を打ち立てた。之に勢を得たる諸隊は頑强な敵の抵抗を排除し、午前十時頃には城の北門及び西門を確實に占領した。

此の猛烈なる攻擊により、保定城の敵は雪崩を打つて敗走し、中央軍の督戰隊は必死となつて之が阻止に當り隨所に同士打の慘劇を演じた。しかし既に鐵路を遮斷されたので唯一の逃げ場たる南門から徒步或はトラックで

此の猛烈なる攻撃により、保定城の敵は雪崩を打つて敗走し、中央軍の督戰隊は必死となつて之が阻止に當り

隨所に同士打の慘劇を演じた。しかし既に鐵路を遮斷されたので唯一の逃げ場たる南門から徒歩或はトラックで算を亂して南方白城方面に遁走し、爲めに其の方面の道路は是等敗殘兵によつて埋められた。其處に飛行機爆擊があつたので敗兵は殆んど殲滅的打擊を受けた。



保定の戰

（昭和十二年九月二十四日）

斯くして北支の一大戰略要點たる保定は、涿州陷落後僅か一週間にして陷落し、（涿州は九月十八日、保定は二十四日に陷落）、早くも此の日の午後二時四十分には赤い北支の秋陽を滿身に浴びて、隊伍堂々、日本軍の精鋭は城内支那人の打ち振る日章旗の嵐の中を肅々として入城した。

日本軍は機を失せず潰走する敵を南方及び西南方に急追し二十七日には長驅新樂を占領し、更に石家莊方面に向ひ壓迫した。

日本軍が相變はらず寡少の兵力を以て數倍優勢の敵に對し攻擊し、更に天候地形の極めて不利なる諸條件を克服し、力戰惡鬪頑强なる敵の抵抗を排除し、之を潰滅に陷らしめたことは、凡ゆる方面に重大な效果を齎らし

た。何となれば從來の戰に於ては支那軍は何れかと云へば日本軍を輕侮し、一度び實戰の經驗ある中央軍を以てせば日本軍を粉碎し得べしと自負し又斯く宣傳してゐたのである。然るに最も眞劍に戰つた保定の戰、しかも數年來堅固に構築したる陣地に據り、數倍優勢なる兵力を以てして尙ほ且つ敗れたるを顧みては彼等は自失せざるを得ず、到底日本軍に叶はないとの印象を此の保定の戰に於て特に强く感得したのである。此の觀念は支那軍に於ける將來の作戰に重大な影響を與へたものである。又日本軍は戰略要點である保定を確保し得たことは將來の作戰を益々有利ならしめた、しかも恰も之と時を同うして津浦線の要衝滄州が陷落したに至つては、正に北支に於ける作戰の優勝果を思はしめたと共に山西、山東方面に對する戰略的行動に大なる好影響を與へたものである。

其三　石家莊附近の戰（昭和十二年十月十日）

九月二十四日保定を攻略したる日本軍は急追長驅、二十七日には保定の南方約二十里なる新樂を占領し、十月六日には正定城の前面に達し、同八日砲兵、空軍協力の下に同城を攻擊して之を占領し、敗走の敵に大打擊を與へ、斯くて愈々本格的な石家莊の攻擊戰が展開されたのである。

石家莊は京漢線上保定に次ぐ大都會で人口約五萬、鐵道及び自動車交通上の要衝である。即ち西方には同市より太原に至る正太鐵道あり、又東方には滄州に至る自動車道路がある。物資の集散盛んにして石炭及び棉花は其の主なるものである。

り太原に至る正太鐵道あり、又東方には滄州に至る自動車道路がある。物資の集散盛んにして石炭及び棉花は其の主なるものである。

戰略的に見れば石家莊は西方太原に至る長隘路の咽喉を扼してゐるので同地を占領する時は京漢、正太兩線を同時に遮斷することが出來る。殊に石家莊西方獲鹿以西の隘路は地形嶮難で僅かに駄馬を以て交通し得るのみであるから、少數の兵力を以て能く山西より河北に進出せんとする敵を拒止することが出來る。

保定で敗れた支那軍は北方最後の防禦陣地として此の石家莊を死守せんと、前面に滹沱河（幅三百米）の障碍を利用し左翼は平山西北方高地より石家莊を經て藁城、安平を過ぎ右翼は深縣に亙り正面約三十里の間に堅固なる陣地を構築し、後方より兵力の增援を得て約二十萬の大兵を配し、參謀總長程潛自ら軍の指揮に任じ、十月十日は支那の祝日雙十節なるを以て此の日を期して日本軍を殲滅せんと戰線の將兵に激勵の命令を發し大いに抗日の意氣を上げた。然るに皮肉にも此の日を以て石家莊は陷落したのである。

十月八日正定を攻略した日本軍は滹沱河左岸に攻擊の態勢を整へた所、幸にも田興附近から敵の來襲があつたので此の方面に在る日本の右軍は之を擊退すると共に直ちに之に尾して滹沱河を渡りて其の對岸に地歩を占め、此の方面の後續諸隊は十日朝更に猛烈なる砲兵の射擊下に王母村附近より渡河して前岸平山附近の敵陣地を占領し、敵の左側背に迫る有利なる態勢を占むることが出來た。

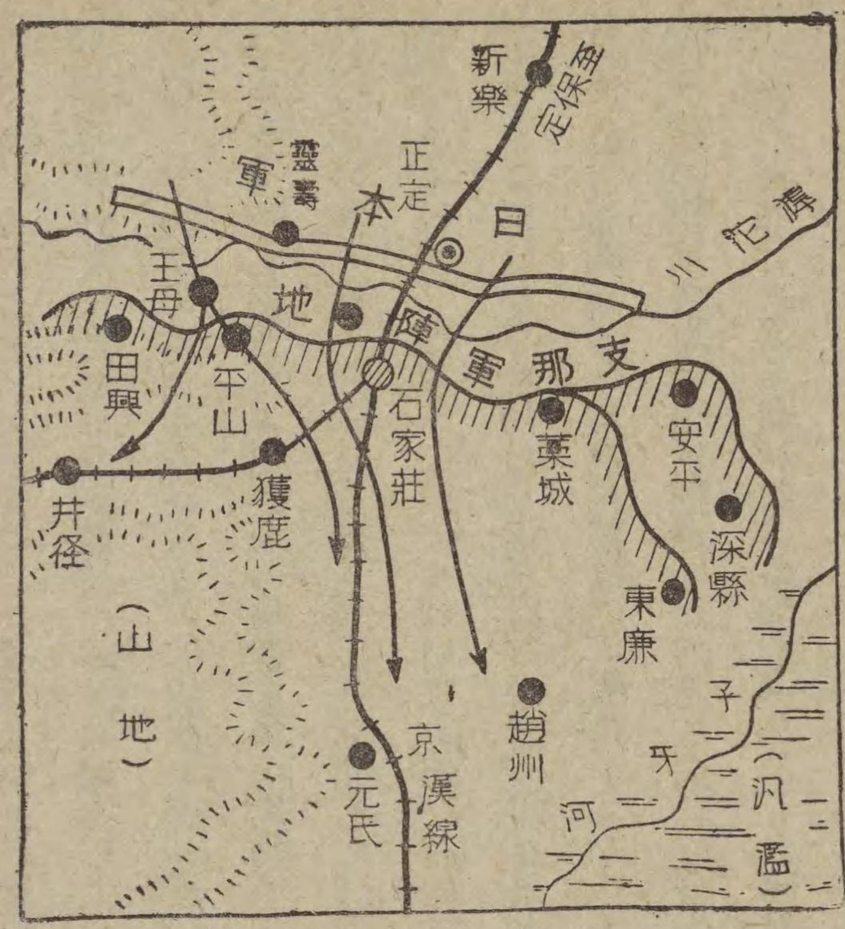
又石家莊北方にあつた日本の中軍は十日正午頃對岸の敵兵動搖の色あるに乘じ石家莊西北三里の陳村附近に於て渡河を强行して敵線を突破し其の先鋒を以て石家莊に進擊し其の一部は同市南方二里の地に進出した。

之と同じく正定南方地區にあつた日本の左軍は砲兵の猛射擊掩護の下に漕渡により敵前渡河を强行して石家莊

東方地區に進出した。

斯くして石家莊の支那軍は陣地の左翼山地方面の崩壞と共に逐次西方より崩れ、四分五裂南方に潰走するの已むなきに至つた。此の日卽ち十月十日は朝來戰場一帶雲低く、空軍の協力困難であつたが、午後に至り雲散じて快晴となり、飛行隊は隨所に退却する敵を爆擊して多大の損害を與へた。

斯くて石家莊の堅陣は陷落し、日本軍の一部は正太線に出で娘子關の險を破つて山西省の首都太原に迫り（前節參照）主力は怒濤の如く京漢線並に其の以東の地區より敵を猛烈に追擊した。



石家莊の戰
（昭和十二年十月十日）

其四　日本軍の追擊戰

（昭和十二年十—十二月）

石家莊攻擊に當つた日本軍は十月十日同地陷落と共に破竹の勢を以て追擊に移つた。此の時石家莊の攻擊に參加せんと東北方子牙河を溯航して來た部隊も亦之に伴ひ追擊に轉じた。故に此の方面に於ける當時の狀況は、二十餘萬の支那軍が支離滅裂の狀態を以て敗退するのを日本軍は各方面より競ふて之を追擊すると云ふ有樣であつて到底支那軍は其の後方適當の所に踏み止まつて日本軍と決戰する能はずして河北省から歸還されると云ふ運命となつてゐた。今其の大要を述べ

に伴ひ追擊に轉じた。故に此の方面に於ける當時の狀況は、二十餘萬の支那軍が支離滅裂の狀態を以て敗退するのを日本軍は各方面より競ふて之を追擊すると云ふ有樣であつて到底支那軍は其の後方適當の所に踏み止まつて日本軍を拒止することが出來ず一潟千里的に河北省から掃蕩されると云ふ運命となつてゐた。今其の大要を述べて見る。

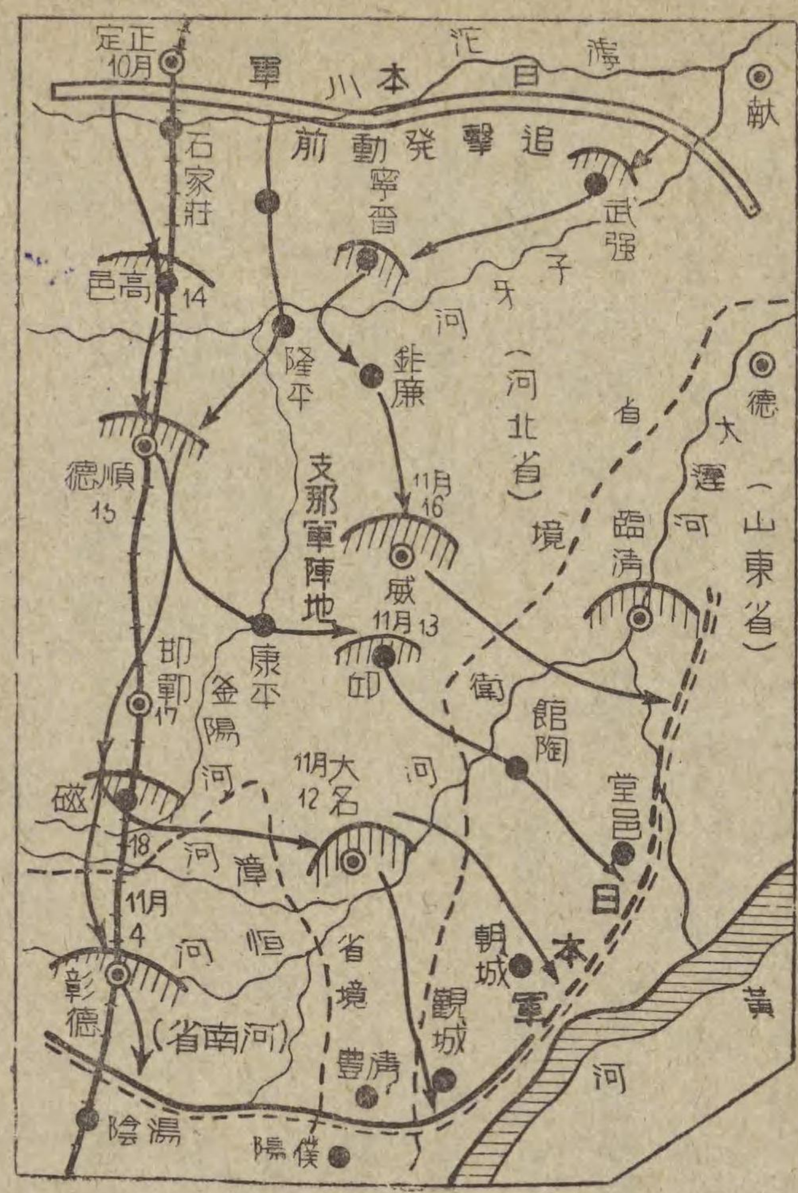
京漢線に沿ふて南下した追擊隊の本流は十月十日に石家莊を陷るや直ちに猛追擊に出で、十四日には高邑の陣地に據る敵を一蹴し、十五日には順德を拔き、全く無人の境を行くが如く、記錄的の快速度を以て十七日朝には早や邯鄲に進入した。邯鄲は戰國時代趙の都で其の附近には古戰場が多い、又「邯鄲夢の枕」でも有名である。それより驛毎に歩々抵抗する敵を掃蕩しつゝ十八日には磁州を攻略して河北、河南の省境に達した。石家莊を出でゝより八日間、戰ひ且つ追擊すること五十里、蓋し戰史に稀なる强行軍である。

省境を突破してより彰德方面に對する攻擊準備中、恒河南岸より俄然敵約二千の逆襲を受けたが、直ちに之を邀擊粉碎し尾擊して必要なる數箇の橋梁を占領した。恒河は川幅約八十米、隨所に斷崖あつて障碍を呈してゐるが、今や日本軍は恰もよく敵襲の倖運に惠まれたのである。よつて十一月四日、砲、空協力の下に彰德の攻擊を開始した。城兵約六千、裝甲列車を有して防戰したが、遂に潰敗し約五百の死體と無數の武器彈藥を遺棄して南方に走つた。

彰德は京漢線に於ける黃河以北の最後的陣地にして西は山西省に通ずる自動車道路を有し、東は大名に通ずる交通の要點で、太原方面との政治、經濟、交通の關係は石家莊に次いでの要地である。

以上の京漢線に沿ふ追撃は裝甲列車を先鋒としたから迅速であつたが、同線以東の平地にありては敗殘の兵は各地に彷徨し、各都邑に據つて不統制な抵抗を試みるのであつた。其の内にも宋哲元は支那事變の元兇であり、且つ敗戰の責を幾分でも感じたものか、威縣に陣して敗兵を糾合し抗戰の姿勢を取つた。日本軍は之を一掃し以て津浦線上の友軍と連絡を取らんと其の作戰行動に出でた。

そこで京漢線上及び子牙河を遡航した諸隊は當面の敵を攻撃し、十一月下旬迄に武强、寧晉、鉅鹿（項羽が秦軍を破つた古戰場）、威縣、邱縣、大名、臨清等の要地を悉く攻略し、然る後十二月初旬再び行動を起し更に堂邑、朝城、觀城を陷れ十六日には清豐を占領して各城頭に日章旗を翻へした。敵は彰德南方湯陰及び清豐の前面濮陽附近に止まり堅固に陣地を占領してゐた。



石家莊攻略後の行動
（昭和十二年十・十一・十二月）

以上を以て昭和十二年に於ける京漢線方面の戰は頗る有利な成績を以て終つたのである。此の時東隣津浦線方面の日本軍を顧みんか、是れ又同樣連戰連勝、既に黄河の險を越え十二月二十七日には山東省の首都濟南城を占

翻へした。商は章德南方湯陰及び清豐の前面濮陽附近に止まり堅固に陣地を占領してゐた。

以上を以て昭和十二年に於ける京漢線方面の戰は頗る有利な成績を以て終つたのである。此の時東隣津浦線方面の日本軍を顧みんか、是れ又同樣連戰連勝、既に黃河の險を越え十二月二十七日には山東省の首都濟南城を占領すると云ふ優勢であつた。

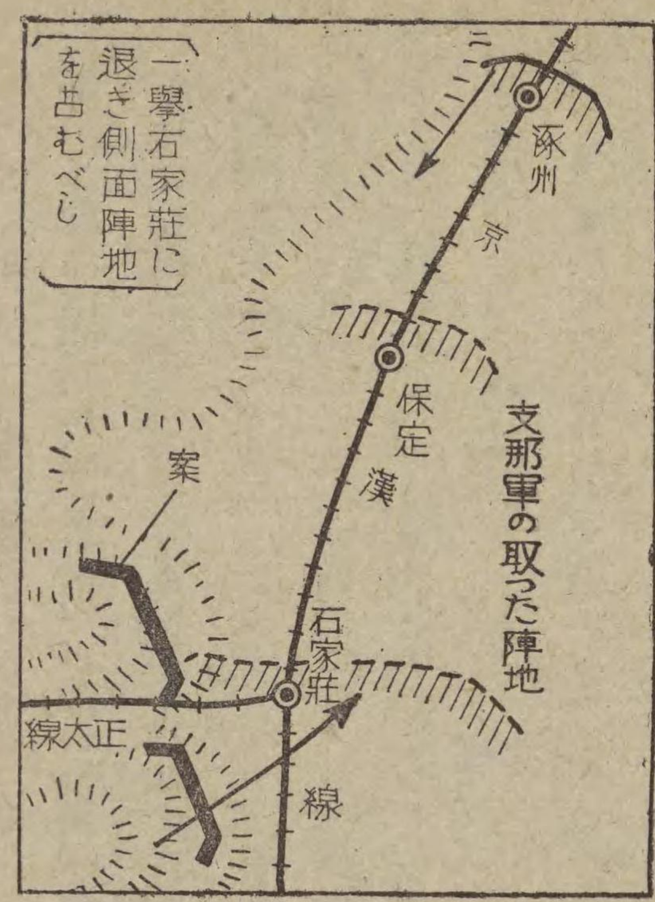
其五　評　論

京漢線作戰は津浦線作戰と唇齒不可離の關係にあるを以て其の評論は津浦線作戰の部に於て述べることゝして茲には單に京漢線上に於ける日支兩軍の作戰の大要を述べるであらう。

【支那軍に就いて】　京漢線上に於ける支那軍の作戰は最初は攻勢の目的を以て計畫されたらうが、京綏線上に於ける作戰が失敗に歸して北京附近に在る日本軍の背後を脅威することが出來なかつたのが、累を爲して京漢線上に於ける作戰を鈍らかし、九月中旬になつてから漸く活動を始めた位であつた。斯くする內に、日本軍の攻擊を受けて了つたのである。

支那人の思想には矛盾した二面がある。かの一面抗日、一面和平の如き其の著例である。此の陰陽兩端の性情は克明にも作戰の上にも現はれてゐる。それで彼等は攻擊決戰と豪語しながら、一面には守勢防禦の態勢を取つた。涿州の陣地、保定、石家莊の陣地皆然りであつた。此の三陣地は北京を距る十五里(涿州)、三十五里(保定)、六十五里(石家莊)、の地に設けられたが何れも攻勢的機能を含んだものではなく、又實際に於ても殆んど專守防禦に汲々としてゐた。此の如く支那軍の作戰は彼等の性分からして其の時の形勢次第により攻守二樣の使ひ分けをしたものである。

若しも支那軍にして陣地を占むるとせば實に理想的な側面陣地を到る處に占め得たのである。京漢線西方の高地は此の要求に適する。尤も涿州、石家莊の陣地は左翼を高地に托したが陣地全體からすれば攻勢的でなく守勢的であつた。之は連戰連敗の非運續きであつたから、自然守勢に陷るのも無理もないが。涿州で敗れた以上は僅か二十里後方の保定に止まることなく一擧に石家莊まで四十五里の退却を斷行し、此處に決戰的防禦陣を張るべきであつた。此處に側面的陣地を占めんか東北方より攻擊し來る日本軍を、其の當時氾濫期である濕地帶に壓倒し得るの公算があつたのだ。要するに支那軍は北京――彰德約百二十里の間を、優勢な兵力と有利な地形とを有しながら、初戰である涿州に敗れたるに怖氣を催し、遂に小刀細工の防禦法で一貫したのは初めの豪勢に似ず甚だ消極的な作戰であつた。



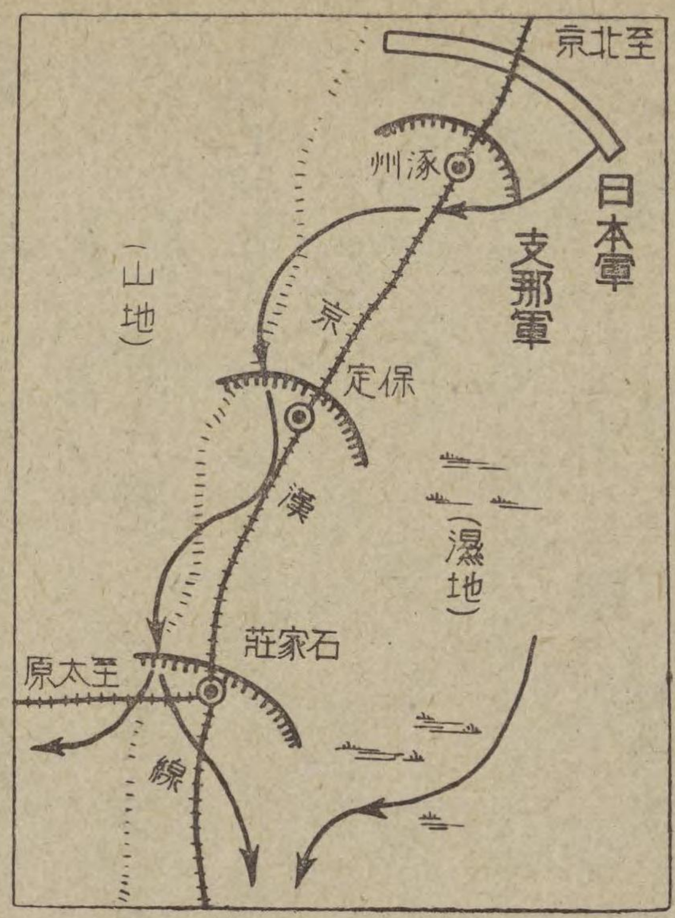
支那軍防禦案

【日本軍に就いて】　日本軍の作戰方針の詳細は不明なるも攻勢的であつたことだけは明瞭である。今茲に其の方法や計畫に就いて論ずるを避け、戰術研究の上に於て趣味のある一、二の點を述べて見る。それは敵陣地に對する主攻擊の方向である。

即ち涿州陣地の攻擊には主力を平地方面である敵の右翼に用ひ包圍的に敵の退路を遮斷して勝を占め、保定の陣地に對しては、主力を今度は敵の左翼に用ひ同じく包圍的に敵の退路を遮斷して勝を占め、最後の石家莊の陣

に對する主攻撃の方向である。

即ち涿州陣地の攻撃には主力を平地方面である敵の右翼に用ひ包圍的に敵の退路を遮斷して勝を占め、保定の陣地に對しては、主力を今度は敵の左翼に用ひ同じく包圍的に敵の退路を遮斷して勝を占め、最後の石家莊の陣地に對しては主力を山地方面である敵の左翼に用ひ此の方翼より逐次席卷の戰法を用ひて勝を占めた。最も此の時は東方子牙河より稍々有力な部隊を遡航せしめて敵の右側背に行動せしめたが、此の部隊が未だ本攻撃に直接效果的な戰鬪行爲を取らざる內に敵の敗退を見たのであるが、此の隊の遡航作戰を取つたのは正に敵の刀を奪ひ取つて戰つたものであつて、此の行動が間接的に本戰の勝利に貢獻したことは言ふを俟たない。



日本軍の追擊

京漢線上

保定にせよ、石家莊にせよ、其の東方は概して河流、湖沼の濕地帶であり軍の行動容易ならざる爲め高地方面から主攻撃を指向したのは當然であるが、河川氾濫を利用し舟筏を以て軍隊を運輸轉用するの戰法を取つたのは妙を得たものである。此の舟筏戰法こそ此の狀況に於ては支那軍の取るべきものであつたのを日本軍に其の株を優占されたのは、支那軍の失態と云はざるを得ない。

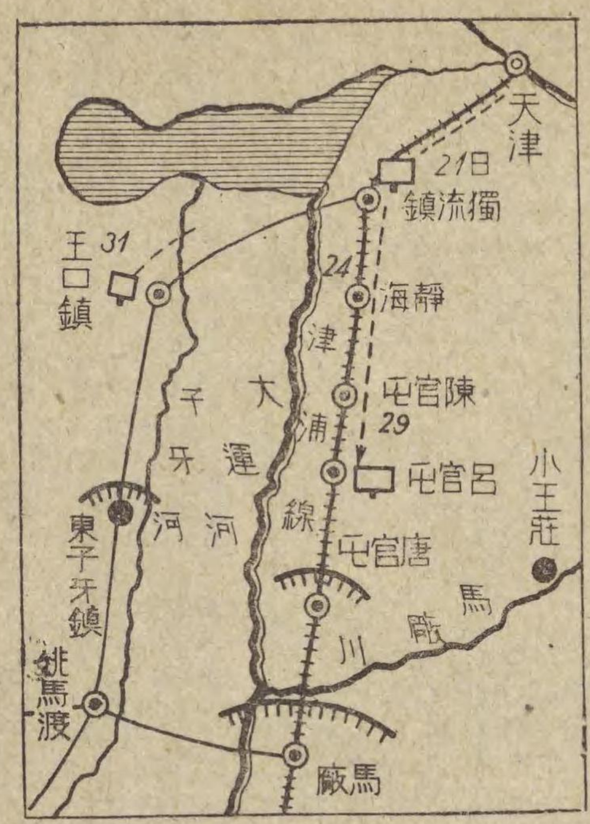
最も石家莊陣地の攻撃に在りては正太線を併せ制壓して一舉に兩方面を略取せんとする作戰であつたことは言ふまでもない。

要するに日本軍の京漢線上に於ける勝利は、支那軍の弱態であつたと云はんよりは日本軍の地形に應ずる用兵の適切なるにより贏ち得たものと云ふを至當とする。

第五節　津浦線方面の戰（昭和十二年）

昭和十二年七月下旬日本軍が京津の地に在る宋哲元の第二十九軍掃蕩の業終るや、直ちに三箇の軍を出して更に支那軍に膺懲の鐵槌を加へんとした。即ち先づ西北方の京綏線上に有力なる部隊を出して背後の煩累を除き、然る後京漢、津浦の兩線に各々一軍を出して南下せしめた。八月中旬頃には此の方面の敵は約四十萬と號された。

京漢、津浦兩線上に於ける作戰は地形上同一統帥の下に緊密なる連絡を取つて進止すべき關係に置かれてあつた。支那第二十九軍の殘敵を掃蕩した日本軍の一隊は暫く天津附近を守備し八月七日其の一部を獨流鎭に出して



日本軍の南進
（昭和十二年八月）

諸準備を整へてゐたが、八月二十一日夕出發殘敵の追擊を開始し、豪雨と戰ひ泥濘を冒して南進し、二十四日靜

諸準備を整へてゐたが、八月二十一日夕出發殘敵の追擊を開始し、豪雨と戰ひ泥濘を冒して南進し、二十四日靜海城を攻略した。敵は約一百の屍體を遺棄して潰走した。

日本軍は八月二十九日靜海を出發して南進を開始し其の南方三里の陳官屯を占領し、敗走する敵を急追して呂官屯に進出し、馬廠方面に在る第二十九軍の殘敵に對し攻擊を準備した。

其一　馬廠附近の戰（昭和十二年九月十一日）

馬廠驛は天津の西南方約七十粁なる津浦線上の要地で、其の西側の馬廠鎭は大運河の東岸に位置し、清朝光緒年間初めて軍隊を駐屯せられて以來軍事上の要點となり、逐年發達し地方經濟の一中心地となり、鐵道、道路、運河等水陸交通の要衝である。

馬廠鎭の周圍には高さ三、四米の城壁があり、其の外周は東及び南は沼地で圍まれ、西側は大運河に臨み堅固な都市である。又東北方に走る馬廠河は白河の下流に合して水運の便あり、其の兩岸堤防は堅固にして良好の陣地となり戰術上の一要線をなしてゐる。

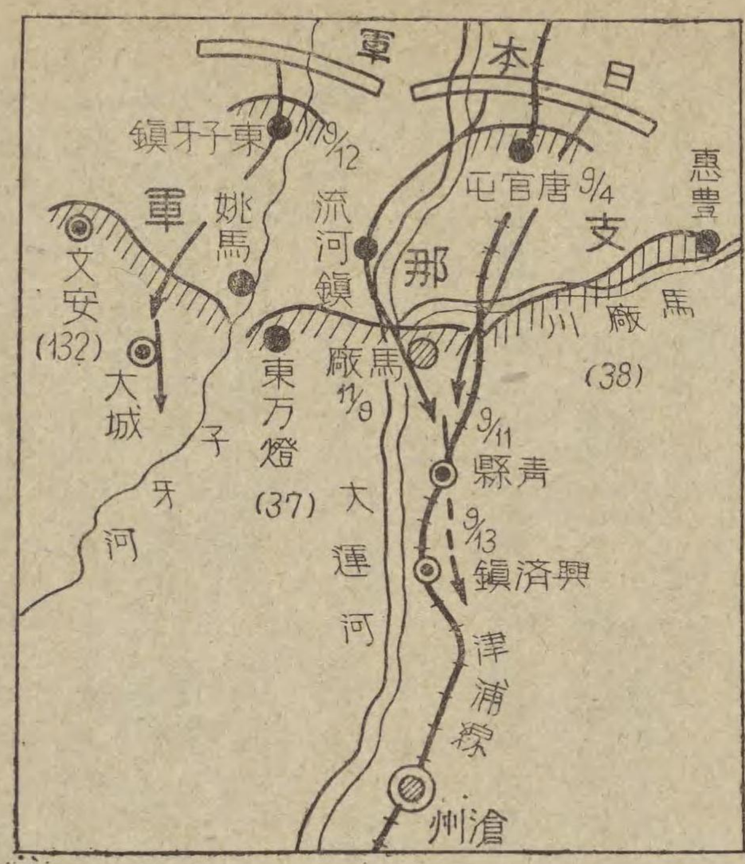
民國六年清帝復辟運動の際張勳に對し、段祺瑞は此處より師を興したことがある。又民國十九年（昭和五年）夏閻錫山が反蔣運動を起した時、山西軍は之を占領して主陣地線としたこともある。

馬廠附近を占領してゐる敵は、宋哲元に代つて馮治安（舊第三十七師長で、抗日意識旺盛である）の指揮する第二十九軍の兵力約三萬で、其の第三十八師は馬廠の東方約五里の惠豊より馬廠に亙る間に、第三十七師は馬廠

の西方約三里の東万燈に亙る間に、第百三十二師は東万燈より文安に亙る間に主陣地を占領し、其の第一線陣地を唐官屯、東子牙鎭の線に設けてあつた。

【第一線陣地の占領】　攻撃に先だち日本飛行隊は八月三十日銀翼を連ね、一部を以て小王莊附近を爆撃し、主力を以て津浦線方面に於ける敵の本據たる滄州を空襲し、洪水で水浸しになつてゐる兵營、停車場、列車及び其の他の重要施設を爆撃して敵に多大の損害を與へた。更に翌三十一日には再び滄州の停車場を爆撃すると共に構内に集結せる軍用列車三個を完全に破壞し市街及び兵營にも徹底的爆撃を加へ敵を大混亂に陷らしめた。

日本軍の他の一隊は三十一日豪雨を衝いて靜海西方約四里の王口鎭を攻撃して同夜之を占領した。此の如く日本軍は兩道並進して馬廠の陣地に向つたのである。是等の左右兩軍は九月三日頃より攻撃運動を起し泥濘を冒して敵に近迫した。時に戰場一帶雲低く垂れ降雨止まず、飛行隊は低空飛行を敢行して唐官屯附近の敵陣地を爆撃し殷々たる砲聲と相和して天地を震撼する中を



馬廠の戰
（昭和十二年九月十一日）

進撃して四日唐家屯、東子牙鎭の線を占領した。

【馬廠本陣地の攻撃】　九月四日唐家屯の敵前進陣地を攻略したる日本軍は馬廠の敵陣地に対し殺意攻撃準備を

進擊して四日唐家屯、東子牙鎭の線を占領した。

【馬廠本陣地の攻擊】 九月四日唐家屯の敵前進陣地を攻略したる日本軍は馬廠の敵陣地に對し鋭意攻擊準備を進めてゐたが、十日黎明から攻擊前進を開始した。其の第一線諸隊は腰を沒する洪水中にあつて勇戰を續け、步砲の緊密なる協同により戰況は頗る有利に進展した。飛行隊は銀翼を連ねて紺碧の秋空を縱横に飛翔し、流河鎭及び馬廠の兵營を爆擊して多大の損害を與へた。

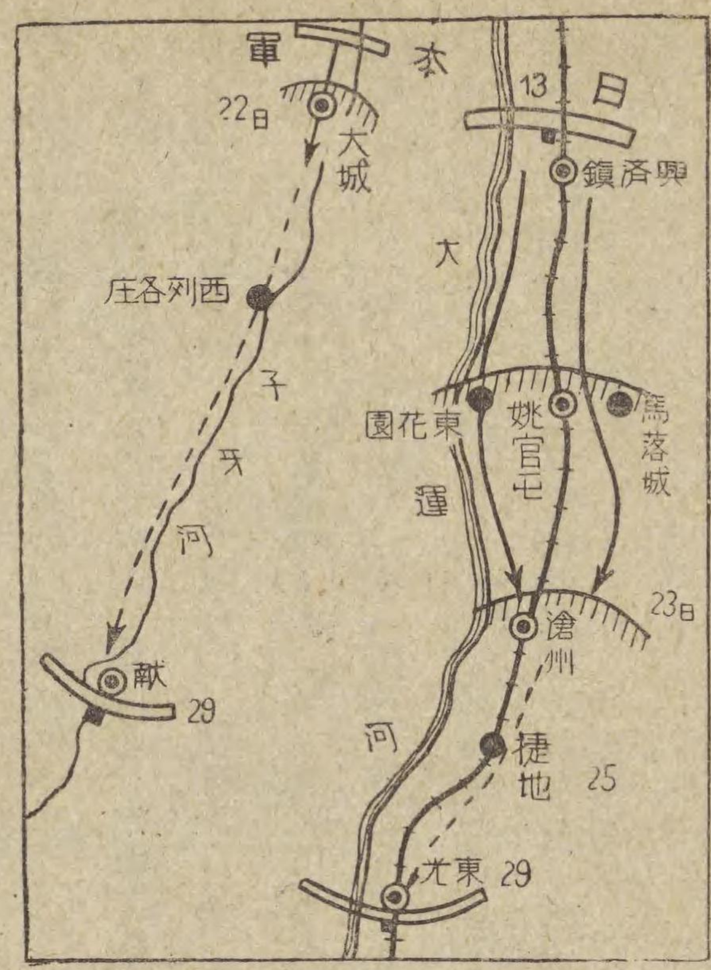
斯くて右翼隊は奮戰して流河鎭を奪取し、左翼隊は敵前渡河に成功して馬廠附近の陣地一角を奪取した。次いで翌十一日午前零時半、全線を擧げて夜襲を決行し、馬廠北方陣地に突入し激鬪の後、午前三時頃迄に堅壘を誇る馬廠一帶の陣地を完全に占領した。支那軍は多數の死傷者を出し殆んど潰亂狀態に陷り南方に退走した。

日本軍は勝に乘じ泥濘腰を沒する濁水を物ともせず破竹の勢を以て敵を急追し十一日午後馬廠の南方三里の要地青縣を占領し、十三日には更に其の南方の興濟鎭を占領した。又子牙河に沿ひ南下したる日本軍の一隊は逐次敵を壓迫して前進し十二日には姚馬渡を占領し、十四日には大城、子牙河の線に達して共に鋭意滄州城攻擊の準備に從つた。

其二　滄州附近の戰（昭和十二年九月二十四日）

滄州は保定と相俟つて津浦線上の一要點で、戰國時代には燕と齊との國境であつた。滄州より西方正定に通ずる良好なる道路あり、又山東省内に至る諸道もあつて此の附近に於ける交通の要衝を爲し、物資の集散も相當多

額に上り、其の西方河間、保定等と相俟つて一の戰略要線をなしてゐる。滄州の陣地は數多のトーチカを設けて堅固に構築し、而して其の前方二里の姚官屯附近には前進陣地を設けてあつた。



滄州の戰
（昭和十二年九月）

九月十三日馬廠の南方興濟鎮を占領した日本軍は二十一日午前二時敵の前進陣地たる姚官屯東西の線に向ひ一齊に砲門を開き茲に滄州攻撃の序幕戰が切つて落された。之に呼應して空軍も二十二日早曉敵陣地の爆撃を行ひ、地上部隊は其の敵のひるむに乘じ突撃を强行し午前九時過ぎ東花園を占領した。

此の勢に乘じ姚官屯を陷れ、馬落城を拔き、敵の前進陣地を覆滅して滄州の本陣地に近迫し翌二十三日午後五時を期し愈々本攻撃を開始し、各部隊は一齊にトーチカに對し猛攻を加へ奮戰の後日沒頃之を陷れて敵を南方に急追し、二十五日には捷地に進出した。

子牙河に沿ひ南進した日本軍の一隊は、二十二日大城附近の敵陣地に對し泥濘と濕地とを冒しつゝ攻撃を開始し午前十時頃之を占領し河北省の中原に向ひ突入した。茲に於て津浦線方面の日本軍は遠く京漢線方面の友軍と相呼應して併行的發展を見ることゝなつた。

子牙河に沿ひ南進した日本軍の一隊は、二十二日大城附近の敵陣地に對し泥濘と濕地とを冒しつゝ攻撃を開始し午前十時頃之を占領し河北省の中原に向ひ突入した。茲に於て津浦線方面の日本軍は遠く京漢線方面の友軍と相呼應して併行的發展を見ることゝなつた。

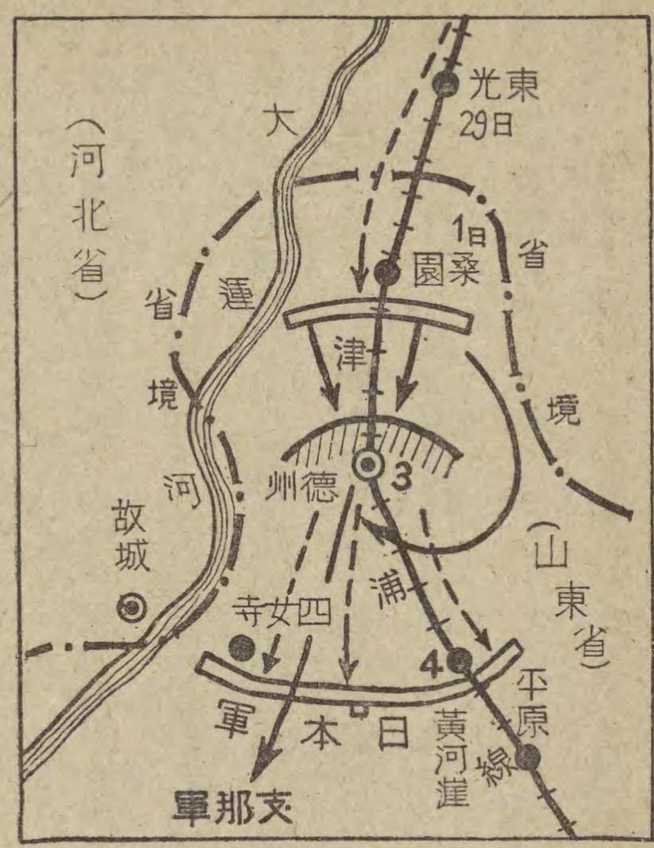
以上の如く津浦線及び子牙河に沿ひ南下の兩部隊は連繫を取つて敵を南方に追撃し九月二十九日遂に獻縣、東光の二要地を陷れ、之より愈々山東省に進入し德州城の攻撃となるのである。

其三　德州附近の戰（昭和十二年十月三日）

德州は山東省最北部の都會で政治、軍事、經濟の要衝を占めてゐる。それで同省にては數箇月以前から堅固なる陣地を構築し、之に省軍の外に中央軍及び馮治安の率ゐる第二十九軍の敗殘部隊を加へ約六萬の兵力を配布し以て日本軍を邀撃せんとした。

然るに滄州攻略以來破竹の勢を以て南下追撃中なる日本軍は九月二十九日には東光を陷れ、十月一日には早くも河北省より山東省に進入して桑園を占領し同日夕德州の北三吉米の地點に迫り、先鋒部隊は同夜直ちに德州城に向ひ攻撃を續け、二日朝來德州上空に勇姿を現はした空軍の大膽極まる爆撃と相呼應して猛攻撃を行つた。

此の時に於ける日本軍の攻撃は眞に剛膽巧緻を極め、三日早朝一隊を以て德州城の東北角より、更に他の一隊を以て西北角より敵を猛攻して牽制し、其の間に主力を擧げて敵の後方に迂回して包圍するの大膽な作戰に出でた。此の作戰は奇效を奏し牽制された城内外の敵は忽ちにして迂回せる主力軍の攻撃に全く虚を衝かれ殆んど抵抗をなし得ず大混亂裡に總崩れとなり六萬の敵は潰滅の打撃を受けて西南方に潰走し、茲に德州攻略は僅か數時間にして成就し、三日午前十一時には城頭高く日章旗の翩翻たるを見るに至つた。



德州の戰
（昭和十二年十月三日）

斯くて德州を攻陷した日本軍は直ちに敵を急追し、十月四日には四女寺、黃河涯の線に進出して此に戰線を統一し、更に平原（有名な趙の平原君の故地）を經て敵を南方黃河に向ひ壓迫し、之よりして濟南城の攻擊となるのである。

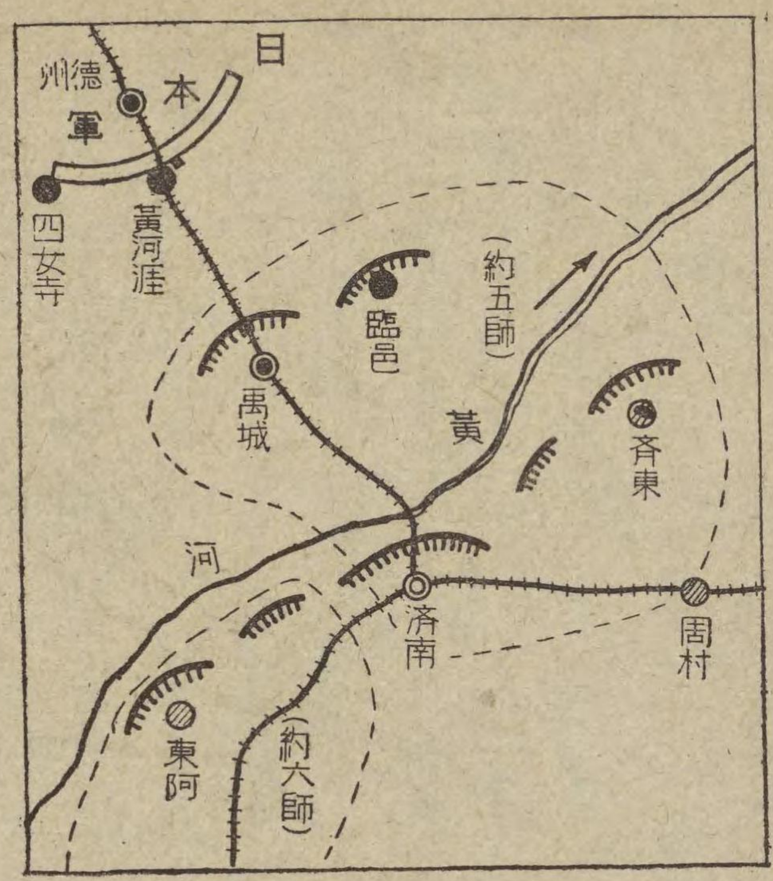
其四　濟南の陷落

（昭和十二年十二月二十七日）

【濟南攻擊前の狀況】　德州を失つた支那軍は黃河の線を固守せんと堅固なる陣地を構築し約十一箇師團の兵力を河の兩岸に配備した。即ち左岸に於ては禹城、臨邑を中心として陣地を占め、右岸に於ては濟南を中心に、上流は東河に、下流は齊東に亙る間を占領して日本軍の來攻を待つた。此の方面に於ては例の第二十九軍は既に影を潛め、之に代るに山東省長韓復榘の軍が登場し、北支戰局に重大なる新局面を示唆した。

日本軍は之に對し十月三日山東省の北門である德州城を陷るや、周到なる注意を以て其の南方の四女寺及び黃河涯の線に前衞を出し、次の準備を整へてゐたが、同十三日より行動を起し同日から十五日にかけて本道方面の諸隊は故城から恩州を經て張莊に亙る線を攻略し、他の一隊は德州の東方より進擊し途中屢々敵の反擊を擊攘しつつ二十二日陵縣を拔き、翌二十三日鳳凰店を取り十月三十日迄には窩津迄の間を占領して禹城—臨邑の線に在

河涯の線に前衛を出し、次の準備を整へてゐたが、同十三日より行動を起し同日から十五日にかけて本道方面の諸隊は故城から恩州を經て張莊に亙る線を攻略し、他の一隊は德州の東方より進擊し途中屢々敵の反擊を擊攘しつつ二十二日陵縣を拔き、翌二十三日鳳凰店を取り十月三十日迄には窩津迄の間を占領して禹城—臨邑の線に在る敵の前進部隊攻擊の態勢を整へた。此の所日本軍は從來よりも愼重なる態度を取つたのである。



濟南攻擊前の狀況
(昭和十二年十月)

此の間日本空軍は敵の要地を爆擊し、殊に西方の大名、臨淸を空襲し、大名では敵集團部隊を粉碎し、臨淸では兵營並附近運河上の運送船五十餘隻を悉く爆擊して大打擊を與へた。

今回占領した德州西方の故城は北支事變の元兇馮治安（第二十九軍長代理）の故鄕であるが、市民は至つて平穩で日本軍の入るや相爭ふて好意を寄せ信賴の誠を表した。

斯く前進の準備をなしつゝあつた日本軍は十一月十日頃から全線に亙り俄然活潑なる運動を起した。今之を左翼より云へば、滄州方面より南下せる一隊は十日慶雲附近の敵を驅逐して十二日には堂々武定（惠民）に入城、息つく暇もなく雪崩を打つて南下、同夜深更の暗を衝いて十三日朝待望の大黃河の邊に進出し、次いで濟陽城壁

に迫り激戰の後十三日夕刻之を陷れ萬歳の聲は滔々たる黃河の濁流に谺した。同城攻略の勢に乘じて西進を强行し、十四日夕には黃河鐵橋を距る東北約一里の八里庄附近に達し、十五日午後四時半には要衝鵲山を攻略して黃河を隔て濟南を一望に收むるに至つた。が黃河鐵橋はそれより一時間後卽ち十五日午後五時半支那軍に依り爆破せられた。以上は最左翼に行動せる挺進的軍隊の偉大なる成效である。

次は津浦線兩側地區より活動を始めた諸隊であるが、是等の隊は大體に於て三隊に分かれ、左方の一隊は陵縣より臨邑の西方に突進し、反轉して南方より之を攻擊し奮戰の後十一月十四日朝之を陷れて南進し、右方の一隊は恩縣より南下し十三日高唐を占領し引き續き敵を南方に急追し、中央の一隊は張莊を出發して禹城の敵を擊退し十三日倫鎭を略し、十五日には晏城を拔き十九日には黃河畔の濟河を占領した。

濟南攻擊前の行動
（昭和十二年十一月）

以上の如く日本軍は正面三十五里の間を數縱隊の分進によりて黃河畔に日章旗は進められた。津浦線上の作戰が起つてから玆に約三箇月、陣中幾度か夢に見た黃河の流れ、今や滔々として眼下に現はる、百戰の勇將猛卒皆「來たり、見たり、勝てり」の感激を浮べて新たなる濟南攻略の血を湧かした。

以上の如く日本軍は正面三十五里の間を數縱隊の分進によりて黃河畔に日章旗は進められた。津浦線上の作戰が起つてから玆に約三箇月、陣中幾度か夢に見た黃河の流れ、今や滔々として眼下に現はる、百戰の勇將猛卒皆

「來たり、見たり、勝てり」の感激を浮べて新たなる濟南攻略の血を湧かした。

【濟南の防備】 濟南は山東省政府の所在地で韓復榘が其の主席として勢力を揮つてゐた。山東省の總人口は約三千五百萬、濟南の人口は約四十四萬である。市は城內と城外の商埠地との二つに分かれ、商埠地の人口は日々增加し外人の多くも此處に居住してゐる。之は支那人中富裕なるものは革命動亂後騷擾常なき支那街に居住するよりは寧ろ商埠地の安全である事を知つて續々移住するからである。事變前の日本居留民は約二千人であつた。城內の著明な建築物として都督府、官立圖書館、天主堂があり。學校は比較的多く支那人經營のもの二十二、外人經營のもの二、日本人經營のもの醫學專門學校一がある。商業は頗る活潑で移出入品の多くは青島を通じて行はれてゐる。市の北方二里の黃河々畔に濼口（人口二萬）と稱する河港ありて水運の便あり、濟南の地は噴水地であつて市內湧水箇所百以上もあり、故に古來別名を「七十二泉の都」と云ふ、泉水は澄透飲料に適する外觀賞の池として用ひられてゐる。濟南が省都となつたのは明國以來のことである。

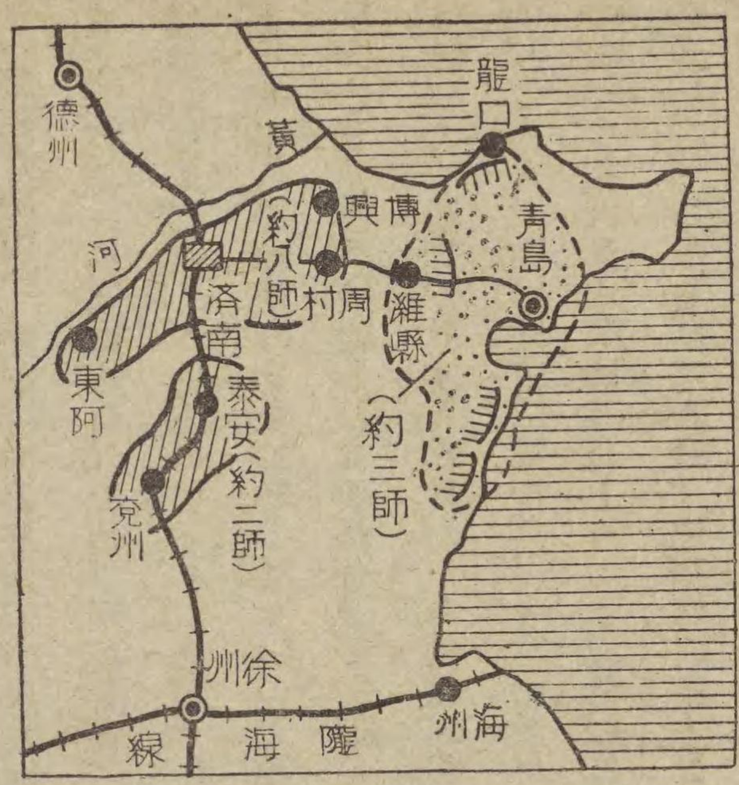
韓復榘の手兵は約五師六萬と稱せられたが、今は之に中央軍其の他の軍隊が加はり山東省全部の守備軍約十三箇師と稱せられた。其の大要は、

一　濟南を中心とする黃河々畔に　約八箇師
二　豫備として泰安、袞州に　約二箇師
三　青島附近に　約三箇師

而して濟南附近の黃河々畔は勿論のこと、山東半島の北部龍口附近及び青島並に其の南方海岸一帶に亙り堅固なる陣地を構築して海陸よりする日本軍の侵入に備へた。

之より先き支那事變の起るや、青島、濟南に在る日本居留民約一萬五千人は總引揚を行ひ、多年刻苦經營の結果築き上げた地盤と、三億圓の權益は擧げて支那當局に共の保護を委ねた。省長韓復榘及び青島市長沈鴻烈は日本軍との戰鬪を惹起せざる限り保護を保證すべきを誓つたので、日本當局は之に信賴して邦人を撤退せしめた。

而して省長韓復榘とは多年の情誼もあり且つ彼は親日派と稱せられてゐたので日本軍に在りては特に戰火を山東に波及せしめざるやう軍隊を黃河を越えて前進せしめぬ處置を講じたのである。然るに暴戾支那軍は遂に其の誓約を破棄して青島に在る日本紡績工場を破壞放火して灰燼に歸した。是に於て日本軍は斷乎山東支那軍の膺懲を決意し、十二月二十三日共の態度を聲明した。それで十一月十九日以來黃河左岸地區に集結し濟南の空を指呼の間に望み、夜を日についで構築されて行く敵陣地を眺め攻擊の意氣に燃えてゐた日本軍は勇躍黃河を渡つたので



山東軍の配備
(濟南陷落前)

ある。青島に關する情勢に就いては後章に述べることゝする。

【濟南の攻擊】　濟南方面に在る支那軍は、京漢線を始め、京綏、山西方面並上海、南京方面の戰況悉く皆悲觀

間に望み、夜を日についで構築されて行く敵陣地を眺め攻撃の意氣に燃えてゐた日本軍は勇躍黄河を渡つたので一月十九日以來黄河左岸地區に集結し濟南の空を指向

ある。青島に關する情勢に就いては後章に述べることゝする。

【濟南の攻撃】 濟南方面に在る支那軍は、京漢線を始め、京綏、山西方面並上海、南京方面の戰況悉く皆悲觀的なるを聞いて志氣頗る沮喪し、既に戰はずして日本軍に威壓せられ、山東省政府は早くも濟南より泰安附近に移動し、鐵道輪鐵材料等は南方に搬送せられ、其の兵士は各地に於て掠奪を開始した。此の掠奪は彼等の退却の前兆たるを例とする。

滿を持してゐた日本軍は十二月二十三日進撃の令下るや、渡河の準備既に成れることゝて同夜八時頃人馬肅々として濟南の下流約十五里楡林鎭附近及び約十二里曲堤(曲陽)附近なる石家圈及び鐵匠家附近に於て勇躍大黄河の漕渡河を決行した。初めは暗雲低く垂れて咫尺を辨じなかつたが、夜半に至るや雲晴れて星光瞬き、冷氣河上を渡つて勇士の頰に一段の緊張を覺えしめた。

明くれば二十四日の拂曉大凡豫定の如く其の對岸に進出し敵の抵抗を排除しつゝ前進し、同日午後には一は濟南に、一は其の東方の周村附近に向ひ追擊を開始した。

濟南に向つた一軍は小清河に沿ひ西南進し二十五日正午濟南を距る約十里の地點に迫り同夜半約四里の韓莊(韓倉)に到着し、翌二十六日朝來處々敵の抵抗を排して濟南城に肉薄し同夜十一時半一隊を以て北門を奪取し他の一隊を以て東門を占領し敵の死命を制した。斯くて濟南城は十二月二十七日を以て完全に陷落したのである。

日本飛行隊は全力を擧げて前日來濟南附近に集結せる敵を粉碎し退却中の敵に對し猛爆を加へ、又地上部隊は

城内の敗敵を掃蕩し黄河南岸の地區を西南方に向ひ追擊し、同三十日長清(東阿附近)、箇山の線に達した。支那軍は退却に當り濟南市の各所に火を放ち省政府、日本領事館、日本病院等は燒失した。

斯くて軍事的に觀れば世界軍事界が最も困難と見てゐた大黄河滔々の流も遂に日本軍を阻む鐵壁の障碍たり得なかつた。黄河を渡つて日章旗の進む所、縱令黄河の流は依然として濁るも、山東民衆の人心には明朗安堵の色が漂つたに違ひない。濟南は殆んど無流血の攻略であつた。市民は一も避難せずして親近し、湯茶を供給し道案内をなし子女は萬歲を唱へて入城を歡迎し、老婆は小流の畔で莞爾として洗濯をしてゐる有樣である。此の事實は何を語るか、韓復榘若し冷靜なる理智あらば、此の現實を觀て迷夢より覺醒するであらう。彼は親日派たるが如く又親蔣派たるが如き態度を以て濟南の戰陣に立つたのは所謂洞ケ峠の順慶流であつた。それで彼は武將の最も戒むべき「爲さざると、遲疑する」との鐵訓を冒して其の身を寂滅の運命に陷れた。

其五　日本軍の追擊戰

昭和十二年十二月二十七日濟南城は陷落した。

日本軍は同月三十日二隊に分かれ長清、箇山の線を發して追擊前進を開始し、晝は各高地に據る大小の敵を擊攘し、夜は霜凍る星明の下、滿月荒涼たる中を殘敵を掃蕩しつゝ徹夜强行軍を續け、昭和十三年一月一日右追擊隊は肥城に、左追擊隊は津浦線上の界首に達した。元旦の初光は雪を戴いて聳ゆる靈峯泰山の山肌を紅に染めて莊嚴極りなく、將士は思はず初日の出に向つて聲を限りに聖壽の萬歲を三唱した。泰山は支那五大靈山（山東省の泰山、陝西省の華山、湖南省の衡山、河北省の恒山、河南省の嵩山）の隨一で氣品に於てこそ富士の靈峯に及

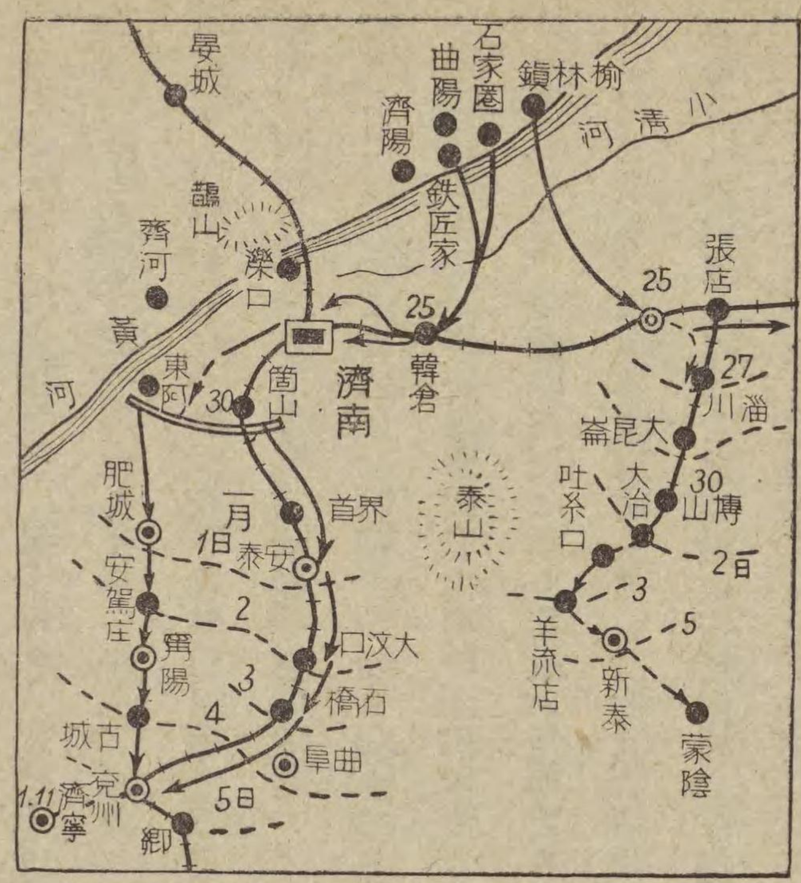
隊は肥城に、左追擊隊は津浦線上の界首に達した。元旦の初光は雪を戴いて聳ゆる靈峯泰山の山肌を紅に染めて莊嚴極りなく、將士は思はず初日の出に向つて聲を限りに聖壽の萬歲を三唱した。泰山は支那五大靈山（山東省の泰山、陝西省の華山、湖南省の衡山、河北省の恒山、河南省の嵩山）の隨一で氣品に於てこそ富士の靈峯に及ばないが山頂から眞白に雪を戴いて毅然と聳ゆる姿は無言の裡に支那四千年の興亡を物語つてゐる。「國家を泰山の安きに置く」をはじめ、孔子の「泰山に上りて天下を小とす」や、「泰山を挾んで大海を渡る」等から、果ては「泰山鳴動して鼠一疋」などのユーモア氣分なのもある。泰山に對する憧憬とも云ふべき氣分は遂に此の山を神聖化し、秦の始皇や歷代帝王の登山も屢々であり、今に到り登山者の絶ゆることがない。此の山に登つた秦の始皇が雨宿りしたと云ふ五太夫の松は「老松」と云ふ我國の長唄、常盤津の歌詞にまで引用せられてゐる。泰山に登るには頂上まで六千七百何十かの石段があり、轎子を利用して登るも一奇であつて、登山に六時間、下山に三時間を要する。泰安は泰山登山口の門前町で丁度金毘羅の琴平町の如きものである。陣中では年末も元旦もない。敵の一城、一壘の占領に湧く凱歌が屠蘇ともなり、お目出たうの祝詞ともなるのだ。

左追擊隊は一日午後敵軍司令部の所在地たる泰安（泰山南麓の門前町）を占領して日章旗を翻へし迫擊砲五門を鹵獲した。二日には右追擊隊は安駕庄に、左追擊隊は大汶口に達し、三日には大凡、寗陽、石橋の線に、四日には古城、曲阜の敵を擊攘して此處を占領した。曲阜は二千六百年前聖人孔子生誕の地であつて、其の聖廟と共に孔子の子孫が現存してゐる。日本軍は特に此の地を戰火より免れしめる爲め周到なる注意を拂つた。五日には進んで兗州及び鄒縣に、十一日には濟寧に入城した。之より翌昭和十三年の戰局に入るのである。（兗州には外國宣教師が多く、明治三十二年獨逸宣教師二名が此の地で殺されたことが青島占領の動機となつた。又鄒縣は孟

子に緣のある所である)。

大黃河を渡つて十二月二十五日周村驛を攻略したる一軍は二十七日淄川を三十日には大昆崙を取り、次いで博山を略し一月二日には吐糸口鎭を占領し、爾後山間を追擊して四日新泰に達し、次いで蒙陰を陷れた。此の猛進により青島方面にある支那軍は退路を斷たれんとするので、于學忠、沈鴻烈等は青島を脫出し一月四日諸城に到著した。

十二月二十七日淄川を占領した諸隊は青島に向ひ前進し一月八日には濰縣を占領した。又海軍は十日朝陸戰隊を以て青島を占領し次いで陸軍部隊も同市に上陸し十三日に至る迄に青島港域の全部を占領し、爾後北進して二月三日に芝罘を占領した。



濟南陷落追擊

(昭十二年十月二十・昭十二年一月三十)

其六　評論

津浦線に於ける日本軍の作戰行程は京漢線同樣頗る有效迅速なものであつた。此の線上に於ては馬廠、滄州、德州の三陣地を突破攻略して大黃河の線に達したのであるが、此の間約三箇月は不眠不休、しかも豪雨、泥濘の間を猛攻急追の連續戰であつた。此の方面の作戰に於て特筆すべき一事がある。それは京漢線の主力に先だち常に一步先きへ〳〵と攻略の地步を進めたことである。即ち京漢線上の涿州攻略に先だち此の方面では馬廠を陷れ、保定攻略に先だち滄州を陷れ、石家莊の攻略に

であるが、此の間約三箇月は不眠不休、しかも豪雨、泥濘の間を猛攻急追の連續戰であつた。此の方面の作戰に於て特筆すべき一事がある。それは京漢線の主力に先だち常に一歩先きへ〳〵と攻略の地歩を進めたことである。即ち京漢線上の涿州攻略に先だち此の方面では馬廠を陷れ、保定攻略に先だち滄州を陷れ、石家莊の攻略に先だち既に山東省に進入して德州を陷れ、而して大黃河の線に至りて濟南を指呼の間に威壓したと云ふ活躍振りであつた。

此の先行作戰が如何に京漢線上の主作戰に有利な影響を與へたかは固より言を俟たない。此のやうに津浦線上の作戰が容易に進捗したのは何に因るのか、勿論日本軍の勇敢を擧ぐべきであるが、尙ほ次のことを一考するの必要がある。それは支那軍の戰意である。

最初津浦線上に現はれた支那軍は京津の地で敗退した第二十九軍の殘兵であつたから、縱令旣設の堅陣に據つたとしても到底進攻突進の戰意ある强兵と見ることは出來ない。又其の後出現した山東軍にして見ても、首鼠兩端を持し一向煮え切らざる態度の韓復榘の軍であつて見れば堅確な戰意がなかつたやうである。爲めに世界人の凡てが困難と認めた大黃河の渡河も容易に日本軍の成功に歸せしめ、又難攻と誇る濟南の堅城も殆んど刄に屻らずして陷落したやうな譯である。要するに此の方面の支那軍は他方面のものに比して戰意が薄弱であり、それに强勇日本の猛攻に會つては退潮の如く敗走したのは當然のことである。

日本軍で大黃河の線に到著したのは十一月中旬であつた。其の後約一箇月間、此處に駐止待機の姿勢に在つたのは單に渡河準備の爲めのみでなく、玆に山東省長韓復榘に對する外交秘策の含まれてゐたことを想起すべきで

ある。戰爭と外交の關係を研究するの一史料ともなるであらう。

津浦線上の作戰に於て特に研究すべき價値ある問題は大黃河の敵前渡河の業績である。此の事に關しては他日詳細の資料による篤學者の研究に待つべきである。

其七　濟南水攻史略

戰史研究の參考として七十二泉の都、濟南城の水攻史の大要を述べるであらう。

濟南城內大明湖の西北隅に一祠あり鐵公祠と云ふ、是れ明の忠臣鐵鉉を祀る處なり、時は我が足利三代將軍義滿時代の事で、明の第二世建文帝治世の出來事である。先づ其の時の濟南城を述べて見ると、城壁の周圍約十二支里、高さ三丈二尺、四門を開く、東を齊川門と曰ひ、西を灤源門、南を歷山門、北を會波門と曰ふ。周圍に幅五丈、深さ三丈の水濠を繞らしてある。昭和三年濟南事變に小宮山工兵少尉が爆破して突入したのは此の灤源門であつた。

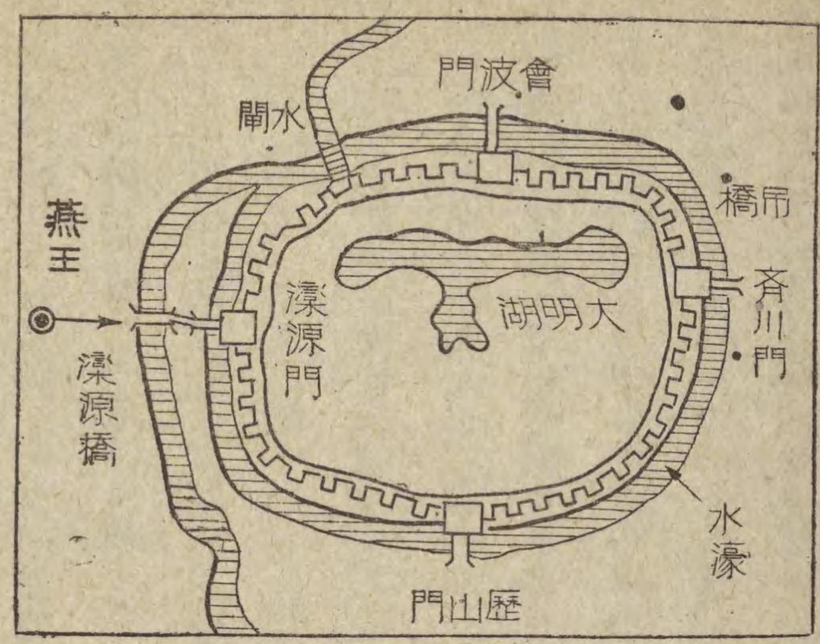
明朝第二代の建文帝幼少の身を以て帝位に卽くや、二三側近者の言を容れて諸王侯の不正なるものを肅正し且つ其の封を削りて帝威を示さんとした。此の事が早くも燕王の耳に入つた。

燕王は建文帝の叔父で夙に大望を抱き、幼帝を廢して己れ帝位に登らんと心窃かに謀る所あつた。然るに今肅正の事を聞くや、機先を制せんと北京に於て反旗を飜へした。南京（明の首府）爲めに震駭し、遽かに燕王討伐の師を起し大將李景隆をして之を討たしめた。

燕王の軍は北京を發し破竹の勢を以て南下し白溝河の戰に於て大いに官軍を破つた。李景隆は濟南に向つて逃れ走つた。當時文官で山東參議の職に在つた鐵鉉は後方兵站の任

正の事を聞くや、機先を制せんと北京に於て反旗を翻へした。南京（明の首府）爲めに震駭し、遽かに燕王討伐の師を起し大將李景隆をして之を討たしめた。

燕王の軍は北京を發し破竹の勢を以て南下し白溝河の戰に於て大いに官軍を破つた。李景隆は濟南に向つて逃れ走つた。當時文官で山東參議の職に在つた鐵鉉は後方兵站の任を負ひ濟南の北方臨邑縣城に宿泊してゐたが、官軍の大敗を聞き慷慨悲憤措く能はず、同志高巍と相擁して泣き、與に王事に盡さんと引き返して濟南城に至り此に防守せんとした。大將李景隆は尙殘兵十餘萬を有し一たびは濟南城を出でゝ戰つたが、怖ぢ氣のついた支那軍は今も昔も變りなく、又もや燕王軍に蹴散らされて四分五裂、李景隆は喪家の犬の如く單身逸走したので燕軍は急追濟南城に迫り一擧に之を屠るべく攻めかゝつた。當時城に在るものは鐵鉉の外盛庸、陳暉それに例の高巍等であつて何れも忠義鐵骨の士、心を堅うして克く防ぎ克く守つた。



濟南城概圖
（明朝初期）

燕王乃ち勸降文を作り之を矢文として城中に射込んで見たが、鐵鉉は之を引き裂いて態と城外に棄てさせたので、燕王は大いに怒り、左らば一と揉みに潰せと勢込んで見たものゝ濼源門を爆破する工兵も無ければ、城壁を崩すべき砲兵とても無い當時のことゝて高さ三丈、周圍十二支里の堅城はさう易々と踏み破る譯にも行かず、攻圍三箇月に及んだ。しかし流石は燕王である、周圍の地理を視察し城の構造を看破して水都七十二泉の姿に氣が

付くと、忽ち攻擊の手段を一變して水攻の用意を命じ、鐵鉉以下城中の將士を魚にすべく取り懸かつたのである。名將の着眼は東西其の軌を一にす、高松城を水攻めにした豊太閤にして若し此の濟南城の攻者であつたならば矢張り燕王と同じく水攻策に出でたことであらう。

七十二泉より成る水の都濟南は、城内に湧出するものは大明湖に瀰し、更に城外の水と共に小清河となつて城北を東へ流れて行くのである。大明湖は今日では土砂に塡まれ蘆葦繁茂してゐるが、明代には尙ほ洋々として鏡の如く、瀰漫際無し、水克く舟を泛べ、水克く舟を覆すと云ふやうな姿であつた。

さて何處に堤防を築き、如何に水を堰いたかは未だ詳かでないが、北の水門を閉塞すれば城内の水の出口が無くなるので城中自ら水潰となつて行くことは、日本の城と違ひ住民全部を城内に包容し且つ城其のものが一つの桶になつて居る支那の都城では、かの高松城などに比べて水攻めも容易であつたことだらう。

斯くて時日の經ると共に竈の上に蛙の鳴くやうになつて來た。城兵よりも先づ城内の住民が悲鳴をあげ出した。此の儘にして置いては内部から崩れて來る虞があるので、鐵鉉は沈思苦慮の上兎も角も告諭を下し「我に自ら良策あり、靜かにして三日間守らば敵を破るであらう」と云ふ貼札を水のまだ屆かぬ高い處の其處此處に貼らせ、之で動搖してゐた軍民の心を一先づ鎭靜させると、次いで第二の策案を立てゝ人々の思ひも寄らぬ降伏を燕王の許へ申し出でた。之は固より僞りの謀であつた。

燕王は自ら湧き起る自負心の微笑を押へて使者に對面し哀訴する降伏の申出を許し、「明日入城するであらう」との返事を與へた。鐵鉉は此の返事を得て、防備を撤し更に燕王の心を安んぜしむべく城内の父老數百人に旨を含めて燕王の營に赴かしめた。燕王は愈々其の降伏の事實なることを思ひ、父老に會するに、父老等は一齊に地

許へ申し出でた。之は固より僞りの謀であつた。

燕王は自ら湧き起る自負心の微笑を押へて使者に對面し哀訴する降伏の申出を許し、「明日入城するであらう」

との返事を與へた。鐵鉉は此の返事を得て、防備を撤し更に燕王の心を安んぜしむべく城内の父老數百人に旨を含めて燕王の營に赴かしめた。燕王は愈々其の降伏の事實なることを思ひ、父老に會するに、父老等は一齊に地に伏し涕を流して曰く、

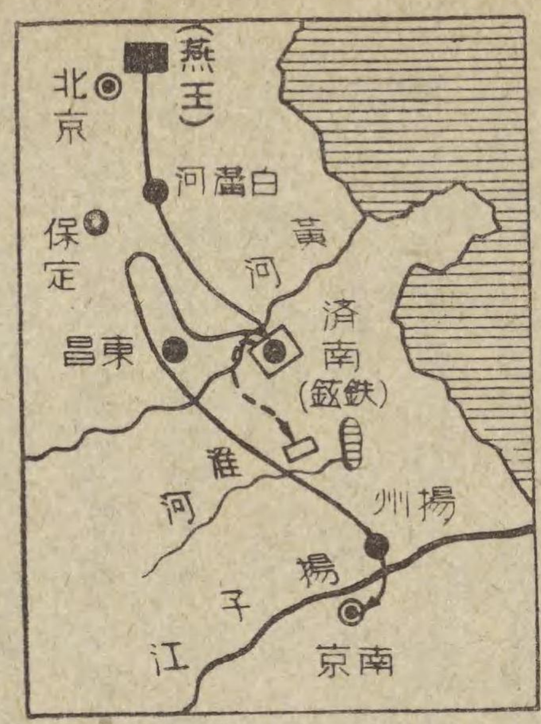
「好臣不忠にして、大王をして跋涉此に至らしめぬ、大王は第一世太祖の御子にして臣等は卽ち太祖の百姓なり、焉んぞ敢て大王の命に負かんや、但し市民は兵事に習はず、遽かに大兵の至るを見ては、未だ大王が國の爲め民の爲め苦心しあるを識らず、或は兵刃の下に屠殺されんことを恐る。大王にして眞に心より民を愛せば請ふ明日の入城の際は師を退くること十里にして單騎入城せよ、然らば全市民は當に壺漿を備へて大王を歡迎せん」と、

異口同音に陳情した。燕王は心に少しく疑はあつたらうが、將來帝王ともなる大器の材なれば溫言之を容れ是等父兄を慰撫して城に歸らしめ、次の日令して軍を退け親ら勁騎數名のみを引き連れ、馬に跨り蓋を張り、意氣揚々城の西門である濼源門に向つた。是れぞ誠に鐵鉉の思ふ壺であつた。

濼源門外一の吊橋あり警あれば紐を以て樓上に引き揚ぐるの裝置を施し、此の外に更に濼源橋がある。燕王主從は今や濼源橋を越えて更に吊橋を渡り城門へと進んで行く。城門は八文字に開かれ城内には無數の兵民俯伏して一齊に萬歲を叫ぶ。燕王の得意想ふべく、馬は將に城門内に頭を入れんとした。其の一刹那、其の間一髮、轟然たる響、捲き上る土煙。何が何やら分からぬ間に、門の上から落された數百斤の鐵板は燕王の乘馬の頭を碎い

て、馬は仆れ王は地に投委された。刎ね起きたる燕王は從士に援けられ素早く傍に在つた副馬に飛び乘るや否や鞭をあげて味方の陣へ一目散に走つた。

これ程のたくらみを行つた鐵鉉の事であれば、かねて欒源橋下に伏兵を配置されてあつて、鐵板が落つるを合圖に此の橋を切つて落す計畫が出來てゐたのであつたから、燕王としては眞に袋の鼠、到底免れ出づる途は無かつた筈であるが。帝位を踐むべき人には自ら備はる天佑があると云ふべきか、それとも單に僥倖の二字で片付けて仕舞ふべきか、何れにせよ、落した鐵板は間一髪にして馬だけを仆し、二段構への橋を切り落す計畫も、どうしたことか、いざとなると橋が落ちず、燕王の馬はあれよ〳〵と云ふ間に其の橋を躍り越えて城外遠く馳せ去つてしまつた。そこで鐵鉉追へども遂に及ばず、流星光底長蛇を逸したもの獨り機山信玄を打つた不識庵のみではなかつた。



濟南水攻前後

以上の鐵板落下は所謂宇都宮釣天井同樣の仕掛である。燕王は大いに怒り、かねてより用意した多數の大砲を城壁に近く押し出して一齊に砲火を開いた。殷々たる砲聲は城中城外に轟き亙りて物凄く、彈丸の碎くる所、物皆微塵となりて寸斷され、城内の周章狼狽は先きの水攻めよりも激しいものであつた。そこで鐵鉉は一策を案じ大工に命じて一個の神牌を造らせ、其の表に「太祖高皇帝之靈」と大書して之を城頭に揭げさせた。かくしては燕王は父の位牌に向つて大砲を打放すのは孝道に反すると云ふので砲擊を中止した。城兵は此の機を利用して大

城壁に近く押し出して一齊に砲火を開いた。殷々たる砲聲は城中城外に轟き亙りて物凄く、彈丸の碎くる所、物皆微塵となりて寸斷され、城内の周章狼狽は先きの水攻めよりも激しいものであつた。そこで鐵鉉は一策を案じ大工に命じて一個の神牌を造らせ、其の表に「太祖高皇帝之靈」と大書して之を城頭に掲げさせた。かくしては燕王は父の位牌に向つて大砲を打放すのは孝道に反すると云ふので砲擊を中止した。城兵は此の機を利用して大急ぎて土を運び石を積んで破損した箇所を修理して防禦の手配を整へた。

而して尙ほゲリラ戰術を以て燕軍の輜重を襲ひ兵站の要地を攻擊して彼等に妨害を與へた。時に燕王に軍師道衍が丁度德川家康の側に天海僧正あるやうに侍してゐた。彼は退却を勸めた、燕王之に從ひ怨を呑んで圍を解き北に向つて退却を始めた。攻城約四箇月にして空しく圍を撤したのである。其の後燕王の軍は東昌其の他の戰に於て屢々鐵鉉の軍に敗れた。然し幸運な彼は結局最後の勝を得、揚州より進んで南京を陷れた。幼帝は行衞不明となり、曾つて慘敗した李景隆は眞先に燕王を迎へて宮城に入らしめ遂に帝位に卽かしめたのである。燕王新に帝となるや、前帝の重臣等を殺戮して凄慘を極めた。曾つて鐵鉉と酒を酌んで共に勤王を誓ひ濟南守城に大いに力を致した高巍は南京落城を聞いて驛舍に縊れて死んだ。

最後まで淮河々岸に頑張つてゐた鐵鉉も軍潰え捕えられて新帝（燕王）の前に引出されたが、彼は背を向け座した儘動かず、遂に市に磔殺された。しかし帝は罪を三族に及ぼさず、鐵鉉の父母を劬はり安穩に餘生を終らせたことは、蓋し鉉の忠烈に對し感激させられた結果であつたらう。

豐太閤の高松水攻は成功したが、燕王卽ち後の成祖の濟南水攻は白面の儒生鐵鉉の詐謀に引かゝつて失敗した。しかし事の成敗を以て直ちに其の人を褒貶するは失當である。更に又此れ等水攻に對して其の城を守つた守

將は高松城の清水兄弟も濟南城の鐵鉉も共に是れ忠烈無双の人物であるが、鐵鉉は凡ゆる詐術奇謀をつくして敵手を苦しましめ遂に其の圍を解くに到らしめた點は一見清水兄弟のそれに勝るものがあるやうに思はせるが、其の最期の情景は何んと云つても清水兄弟の方が雄々しく華々しく武人らしい。

しかし鐵鉉は元來の武人ではなく一個白面の儒生である。由來支那人は言に勇にして行に怯、鐵鉉の如きは蓋し言行一致の優なるもの、其の忠魂義膽は千載不朽の鑑であつて大明湖畔に祀られたる洵に宜なる哉と謂ふべきである。今や北京郊外十三陵の長陵、燕王であつた成祖の陵邊にも日章旗が閃めき、濟南城内大明湖畔には皇軍將兵の靴音高く響いてゐる。地下に睡る世祖と鐵鉉果して如何に之を見、之を聞くであらうか。

第六節　評論

昭和十二年に於ける北支作戰地域の範圍は東西約百五十里、南北も同じく約百五十里の廣さであつて、幅員も相當廣いが作戰の規模もかなり大であり、然かも研究の價値亦鮮なしとしない。先づ支那軍から述べて見る。

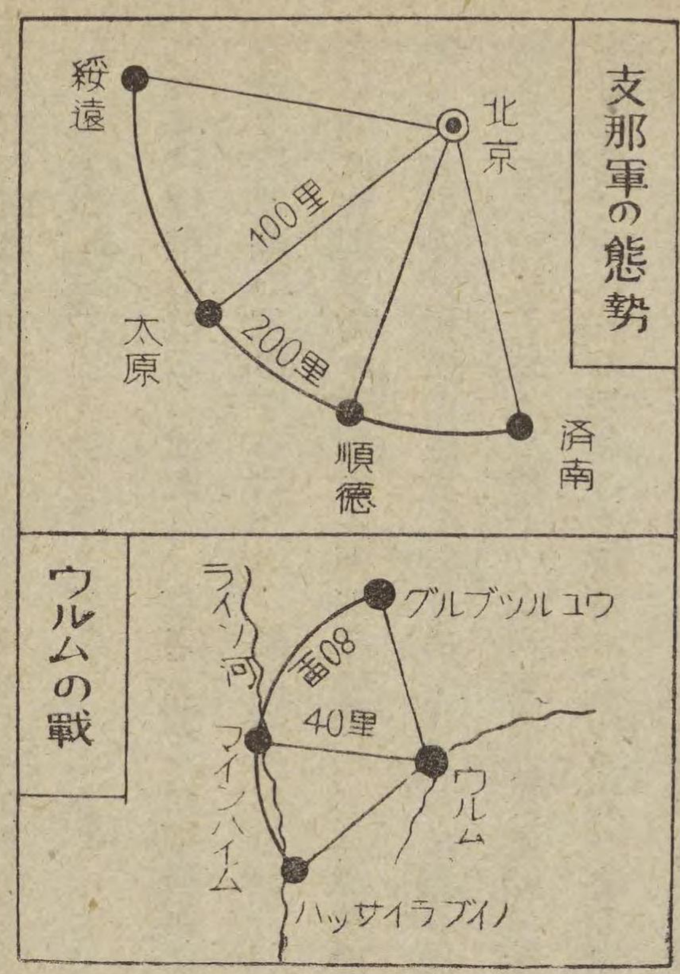
【支那軍の作戰】　支那軍は結果に於ては敗れたが、其の作戰の仕組に至つては蓋し大軍統帥の法則に合致したと云へよう。

若しも大軍の作戰に「點の作戰」と「線の作戰」との二種あるとせば支那軍の作戰は「點の作戰」で、日本軍の作戰は「線の作戰」と云ひ得るであらう。支那軍の作戰目標は京津地方に在る日本軍を攻擊殲滅するにあつた。即ち日本軍の所在を一の點と見做して作戰を指導した。此の「對點作戰」の最上の策は戰略的包圍である。そこで支那軍が此の作戰に於て包圍策を取つたから合理的な統帥だと云ふのである。

若しも大軍の作戰に一點の作戰」と一線の作戰」との二種あるとせば支那軍の作戰は一點の作戰」で日本軍の作戰は「線の作戰」と云ひ得るであらう。支那軍の作戰目標は京津地方に在る日本軍を攻擊殲滅するにあつた。即ち日本軍の所在を一の點と見做して作戰を指導した。此の「對點作戰」の最上の策は戰略的包圍である。そこで支那軍が此の作戰に於て包圍策を取つたから合理的な統帥だと云ふのである。

支那軍は津浦、京漢、山西、京綏線の四道から兵を進めた、即ち主力軍を京漢、津浦の二道から、包圍軍を京綏、山西の二道から進めたのである。之は戰理に合してゐる。此の形式は一八〇五年ウルムの戰に於ける奈破翁の試みた包圍作戰に比して必ずしも劣らず、又一八七〇年役に於ける獨將モルトケの試みた三軍分進の壯觀よりも雄大なものである。支那軍が斯くも大軍を戰法の軌道に乘せて統帥し得る迄に進歩したのは注意すべきことだ。

然し支那軍の作戰は形式は立派であるが、其の運用に於て缺陷があつた、其の一は包圍の效果を巧みに利用しなかつたこと、他の一は餘りに陣地を濫用し過ぎたことであつた。



兩戰比較

北京に在る日本軍に對する京綏線上からの包翼攻擊は確かに效果的のものであつたが、京漢線方面の支那主力軍は一向之を利用しようとはしなかつた。見よ、京綏線上の戰が八月中旬に開かれたのに、京漢線上ではそれよ

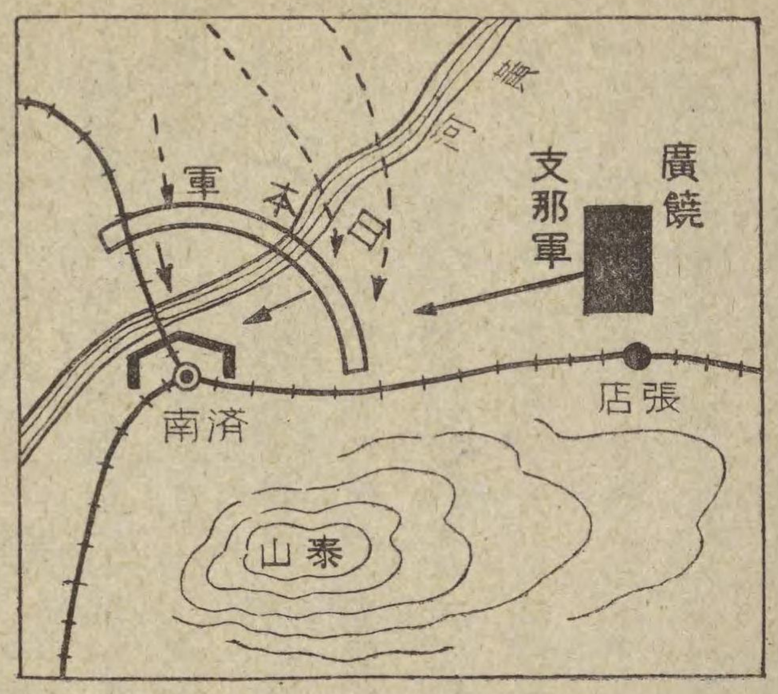
り一箇月も後れて九月中旬に漸く本格的の戰を始めたのである。彼は京綏線上の居庸關、八達嶺の天險に於て十有餘日の長き、日本軍を阻止して相當の脅威を與へたのであれば此の好機に乘じ京漢、津浦線方面から突進して日本軍を南北より挾擊すべきであつた。然るに此の邊の連絡が取れず、遂に戰機を失して包圍の價値を滅却して了つたのである。

次は陣地濫用のことである、元來支那人は城壘依存の民族であつて、彼等の居る所壘壁の存せざるなく、彼等の動く所城塞の設けざるはない。既に城壁ある以上、防禦に陷るは人情の自然である。北支戰場には既設と新設とを問はず到る所に堅固なる陣地を構築して其の數實に夥しい、故に戰ひ且つ退き、止まり且つ防ぐと云ふやり方で、其の歩々抵抗の度數を餘りにも小刻みに刻み過ぎたのである。それで悠々止つて戰ふの餘裕がなく從つて防ぎ從つて敗ると云ふ狀態で、かの有名な居庸關、雁門關、娘子關を始め保定、石家莊、滄州、德州等の陣地は事も容易に敗れたのである。涿州に敗れて其の後方僅か五六里の保定に據りたる如き、馬廠に敗れて其の後方十里の滄州に止りたる如きは餘りに其の距離の近きものである。故に一たび敗れたならば一擧に遙か後方に退きて統制ある防禦法を講じ捲土重來の防戰を決すべきであつた。

尙ほ不可解なのは支那軍の大黃河の防禦である。支那軍が眞に日本軍と一戰を賭するならば此の黃河の線は屈强の處であつたらう。然るに彼は河川に直接して防禦したやうであるが、それとても甚だ不徹底にして決然たる戰意が無かつたやうだ。是れは主將韓復榘の不決斷のため、自然斯くなつたものであつて、彼が早くも後方約二十里の泰安に退陣せる如き卽ちそれを證するものである。是等のことからして彼は間もなく罪を問はれ蔣介石の命により銃殺されたのは自ら作れる罪果の致す所である。

強の處であつたらう。然るに彼は河川に直接して防禦したやうであるが、それとても甚だ不徹底にして決然たる戰意が無かつたやうだ。是れは主將韓復榘の不決斷のため、自然斯くなつたものであつて、彼が早くも後方約二十里の泰安に退陣せる如き卽ちそれを證するものである。是等のことからして彼は間もなく罪を問はれ蔣介石の命により銃殺されたのは自ら作れる罪果の致す所である。

黃河の線は日本軍を邀擊するには恰好の位置を占めてゐる。卽ち濟南附近を左翼の持久的據點として黃河に托し、主力を其の東方廣饒、張店附近に置き以て日本軍の渡河したる側面を擊つて之を席卷するのである。斯くする時は或は後方危險の憂あるが如しと雖も、後には山東半島あり且つ泰山の東方を南に通ずる數條の道路あるを以て敢て憂ふるに足らず、況んや敵を擊滅し得るに於ては是等の心配は雲散霧消するであらう。要するに日本軍の濟南占領は意外に容易であつたが、之を以て直ちに渡河作戰を容易なるものとして輕視し其の研究を怠るべきではない。



黃河防禦案

【日本軍の作戰】 日本軍は京綏、京漢、津浦の三線上に兵力を分用した、之は交通網並に敵情の關係上自然の作戰部署であらう。而して最初の間は京漢、津浦兩方面をば持久的として先づ第一の攻擊を北方の京綏線上に指向した。是れ前門遙か遠くの虎に向ふよりも後門近く襲ひ來たつた狼を擊つのが當然だからであつた。事實北門の居庸關方面は事急を要したのである。

京綏線方面の敵を遙か張家口以西に驅逐したる後、京漢、津浦方面に本格的の攻勢を取つたのも合理的である。然し唯一つ玆に考ふべきことは八月十二日京綏線上南口の敵攻擊を始め、居庸關、八達嶺の險を突破して同二十七日懷來の平地に出るまで約二週間を要した。此の間の距離僅かに十里內外に過ぎざれば此の間に於ける戰鬪の如何に困難で苦戰であつたかを知ることが出來る。此の際此の二週間の苦戰を緩和し、直接間接に援助するの作戰處置が他に無かつたものか、どうか。此の點が考へられるのである。若しも當面の敵が尙ほ頑强で、然も之と相策應して京漢線方面の敵が北京に向ひ猛攻擊し來らば、日本軍は或は相當な困難を見たことであらう。京漢線方面の支那軍は戰略上此の如く猛攻擊に出づべきであつたことは前に述べた如くである。

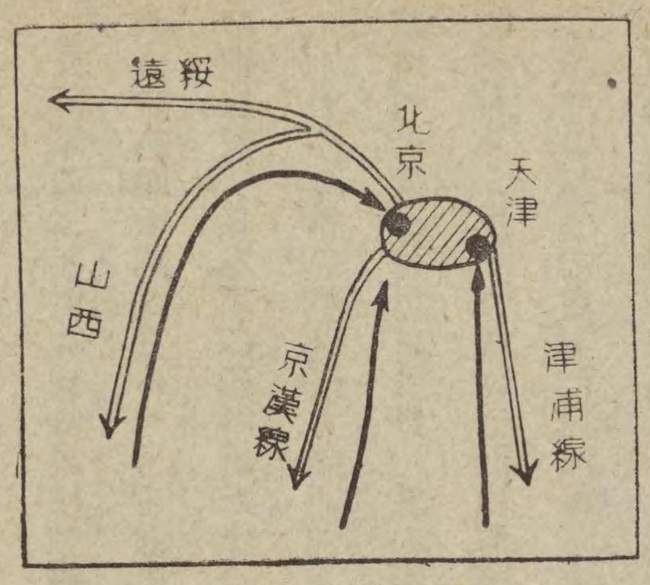
然るに京漢、津浦線方面は日支兩軍共最初の間、所謂初動の活潑を見なかつたのは勿論相當の理由があつたに相違なからう。史料不足のため其の眞相を知ることが出來ないが、此の問題は日支事變開幕時に於ける重大な作戰であり、從つて愼重な檢討を要するのであるから姑く記して他日の評に讓る。

前說に支那軍の北支作戰を「對點作戰」と稱したが之と同じ論法を以てすれば日本軍の北支作戰は線に對する作戰卽ち「對線作戰」とでも云ひ得るであらう。事實に於て北支に於ける日本軍の作戰目標は某都を占領するとか、或は某要地を略取するとか云ふのではなく大體に於て線を目標としたやうである。卽ち京津地方を扇の要(カナメ)として包頭、太原、彰德、濟南と云ふ風に末廣的に其の線は二百五十里の幅に擴大したのである。京綏線に沿ひ北進した軍は途中二つに分かれ、一は綏遠省の包頭に、一は山西省の太原に至り、京漢線を進んだ軍は彰德に、津浦線を進んだのは濟南附近に達して昭和十二年を送つたのである。

以上の作戰は、支那軍は歸納、求心的で、日本軍は演繹、遠心的であつて、一般の情勢からすれば最初支那側

して包頭、太原、彰德、濟南と云ふ風に末廣的に其の線は二百五十里の幅に擴大したのである。京綏線に沿ひ北進した軍は途中二つに分かれ、一は綏遠省の包頭に、一は山西省の太原に至り、京漢線を進んだ軍は彰德に、津浦線を進んだのは濟南附近に達して昭和十二年を送つたのである。

以上の作戰は、支那軍は歸納、求心的で、日本軍は演繹、遠心的であつて、一般の情勢からすれば最初支那側は外線の姿勢に在り、日本側は內線の態勢に在つたのである。故に單なる理論からすれば支那軍は戰略的に有利の姿勢にあつたとも云へる。然るに其の結果は日本軍の連戰連勝となつた。それは日本軍が戰術的に勝利を得たからである。戰爭の勝敗は戰略上の有利なる姿勢によつて得ることよりも戰術上の優勝によつて得ることの方が多いのである。支那軍の方はたとひ戰略上の形式はよくとも戰術的に負けたから總體の敗となり、日本軍の方は戰術上の優勝により戰略上有利に發展し得たと見るべきである。



日支兩軍の兩極

日本軍作戰の跡を見るに、先づ後方を固めると云ふ點に考慮を拂はれたやうだ。即ち京漢、津浦の河北平野に南進する前には其の後方の京綏線上の居庸關、張家口附近を攻略し、又山西省の中部に進む前には其の後方の平地泉、綏遠、包頭附近を占領したるが如き即ち是れである。斯く後方を固めて進む所に各軍分進の安全性がある譯だ。

以上のやうに日本軍は四本の手を綏遠、山西、京漢、津浦の四方面に出した有樣は恰も「人手」の如く、又「蛸

の足」の如くであれば、一に之を蛸式作戰と稱して戰史研究に例用するも興味があらう。

【總果】　北支に於ける支那軍の兵力は明瞭でないが、昭和十二年末黃河以北約五十萬と見られた。（山東方面約十個師、京漢線方面約二十五個師、山西方面約三十七個師と稱せられるが一個師の兵力は區々にして一定せず）之に對すろ日本軍の兵力も不明であるが、支那軍の約三分の一乃至四分の一と見るべきであらう。

支那軍の本年度北支に於ける損害の概數は、遺棄したる屍體約七萬五千、其の他の死傷見込約三十萬、俘虜約九千合計約四十萬と見るべきである。戰利品は小銃約一萬挺、火砲約二百門、特種砲約四百門、機關銃約五百挺其の他無數。日本軍の死者約五千八百人である。

八月中旬本格的活動を始めてより年末まで約四箇月半、此の間日本軍は連戰連勝、今や其の例の蛸足の一本は綏遠省の包頭附近に及び、其の距離北京より約二百里、其の次は山西省の太原附近に及び、北京より張家口を經て約百三十里、京漢線方面は河南省の彰德附近まで約百二十五里、津浦線方面は山東省の袞州附近まで約百二十五里であつて、右翼の包頭から左翼袞州の東まで約二百八十里に亙る廣大なる正面である。而して其の占領地域は北支五省に亙りて人口約八千五百萬を包擁し、日本々州と北海道とを合したる幅員に相當する廣さである。此の廣大なる地域と正面とを守備警戒し、然も來るべき新春の活躍に更に歷史的壯擧を演ずべく日本の將士は近く敵を前にして劍を磨いてゐる。

敵を前にして劍を磨いてゐる。

昭和十二年　北支方面戰局史略

月日	京綏線方面	山西方面	京漢線方面	津浦線方面
八、一二	南口攻擊開始			
二〇			良鄉附近の戰	
二一				行動開始
二三	居庸關占據			
二七	懷來占據			
二七	張家口占據			
二八	宣化占據			
九、一一				馬廠占據
一三	大同占據			
一八		涿州占據		
二〇		靈邱占據		

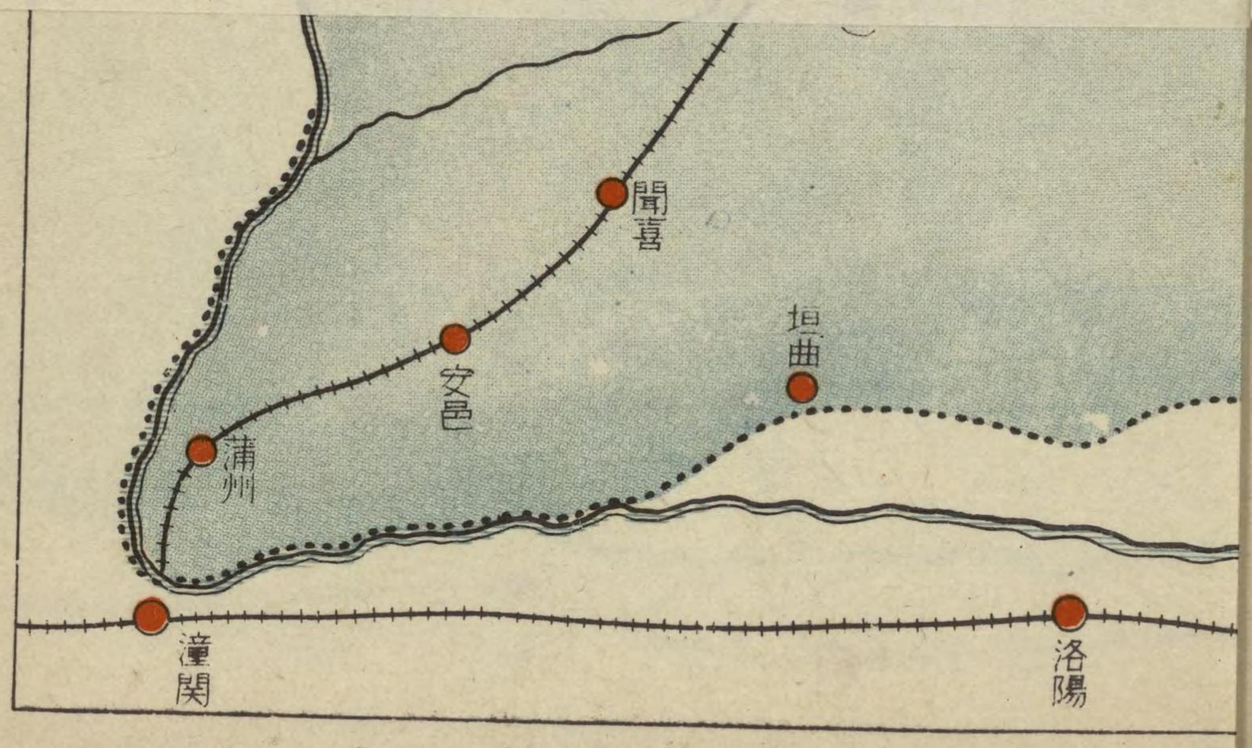
九、二三	涼城占據			
二四	平地泉占據	平荆關占據	保定占據	滄州占據
二八		朔縣占據		
二九		繁峙、雁門關占據		献州占據
三〇	百靈廟占據	代州、寧武占據		
一〇、三				德州占據
一〇			石家莊占據	
一四	綏遠占據			
一五			順德占據	
一七	包頭占據		邯鄲占據	
一八		崞縣占據		
二六		娘子關占據		
二九		平定占據		
一一、二		壽陽占據		
一一、三		忻口鎭占據	彰德占據	
四				

一一、三	忻口鎭占據		
四		彰德占據	
五	楡次占據		
九	太原及び汾陽占據		
一一			慶雲占據
一二		大名占據	武定占據
一三		廣平占據	禹城、濟陽占據
一四			臨邑占據
一五			鵲山占據
一六		威縣占據	
一九			齊東占據
一二、五		臨淸占據	
八		觀城占據	
一六		淸豐占據	

二一、二五	周村占據						
二七	濟南占據						
三〇	博山占據						
十三年一、一	泰安占據						
四	曲阜占據						
五	袞州、新泰占據	八月二十一日より十二月二十七日まで(濟南)	約百二十日 百二十五里	九月八日より(涿州)十一月四日まで(彰德)	約六十日 百二十里	九月二十日より十一月九日まで	五十日 五十里
備考						八月十二日より十月十七日まで	六十五日 二百里

一、京綏、山西方面は峻險なる山地にして軍隊の行動頗る困難を極め、京漢、津浦線方面は豪雨、泥濘、濕地の爲め運動の難澁其の極に達した。

一、京綏、山西方面は峻險なる山地にして軍隊の行動頗る困難を極め、京漢、津浦線方面は豪雨、泥濘、濕地の爲め運動の難澁其の極に達した。



北支戰況（昭和二十年）

附圖第二

考

一、京綏、山西方面は峻險なる山地に津浦線方面は豪雨、泥濘、濕地の

考

一、京綏、山西方面は峻險なる山地にして軍隊の行動頗る困難を極め、津浦線方面は豪雨、泥濘、濕地の爲め運動の難澁其の極に達した。京漢、

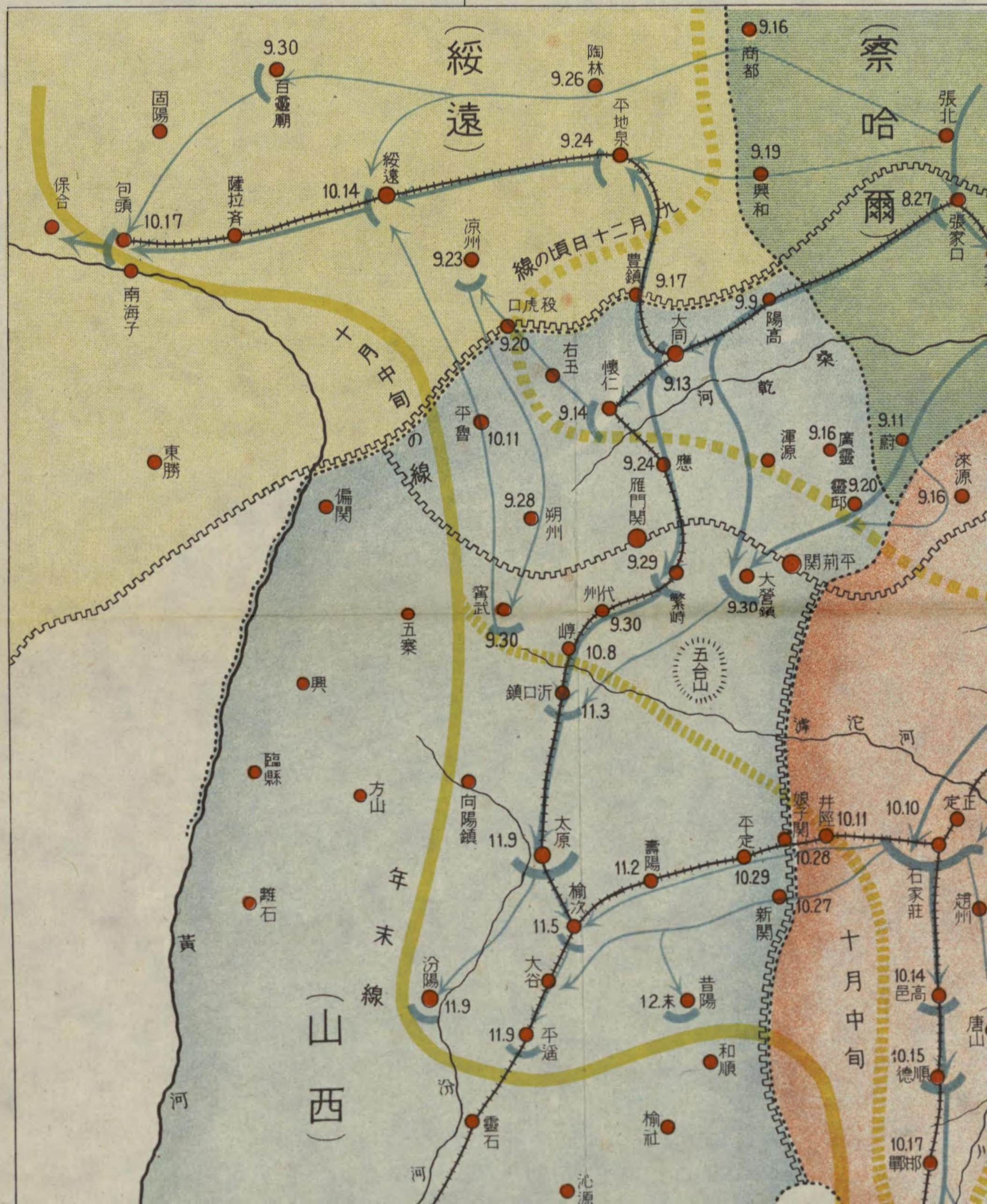
北支戰局參照圖（昭和二十年）

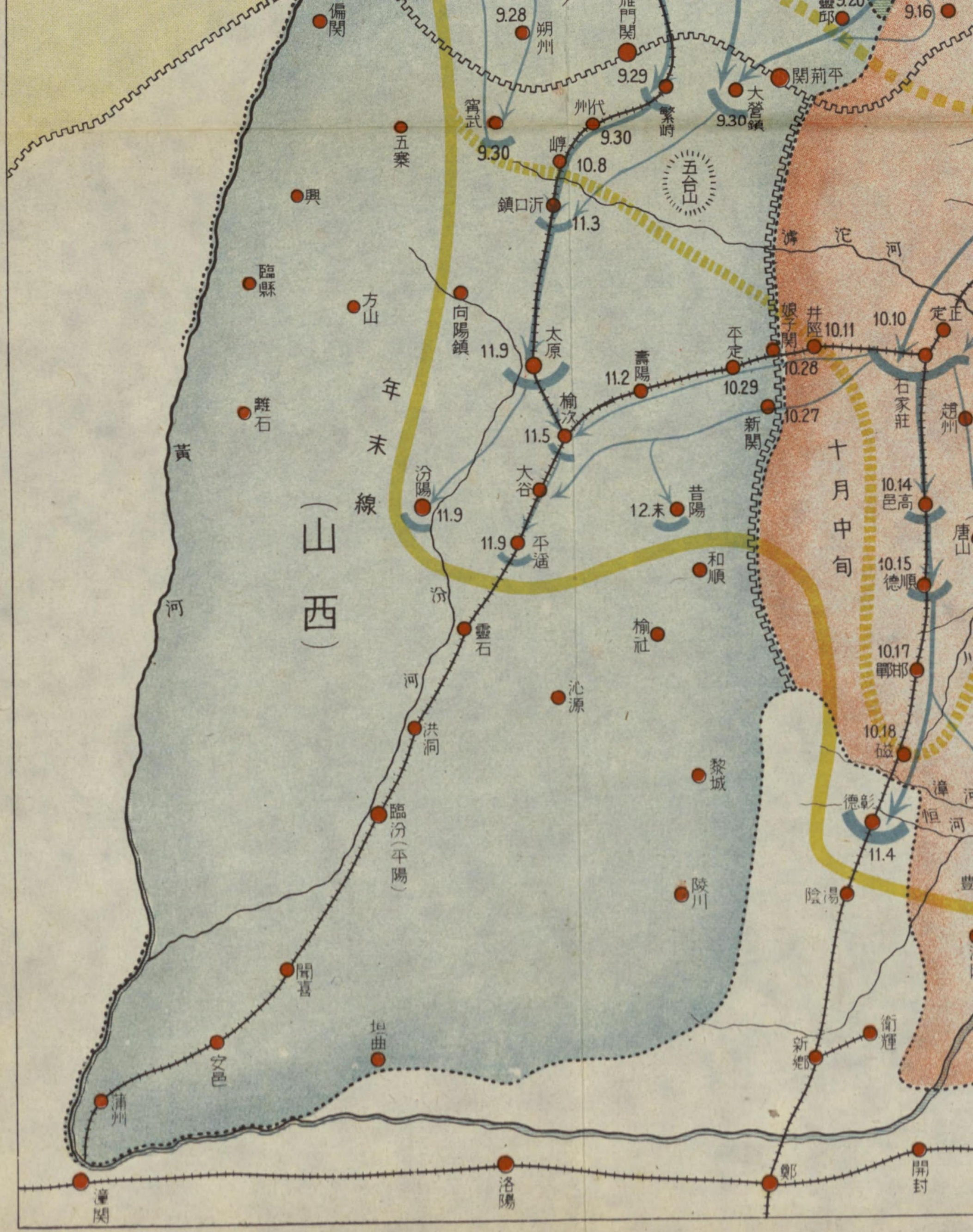
（第一年戰爭）

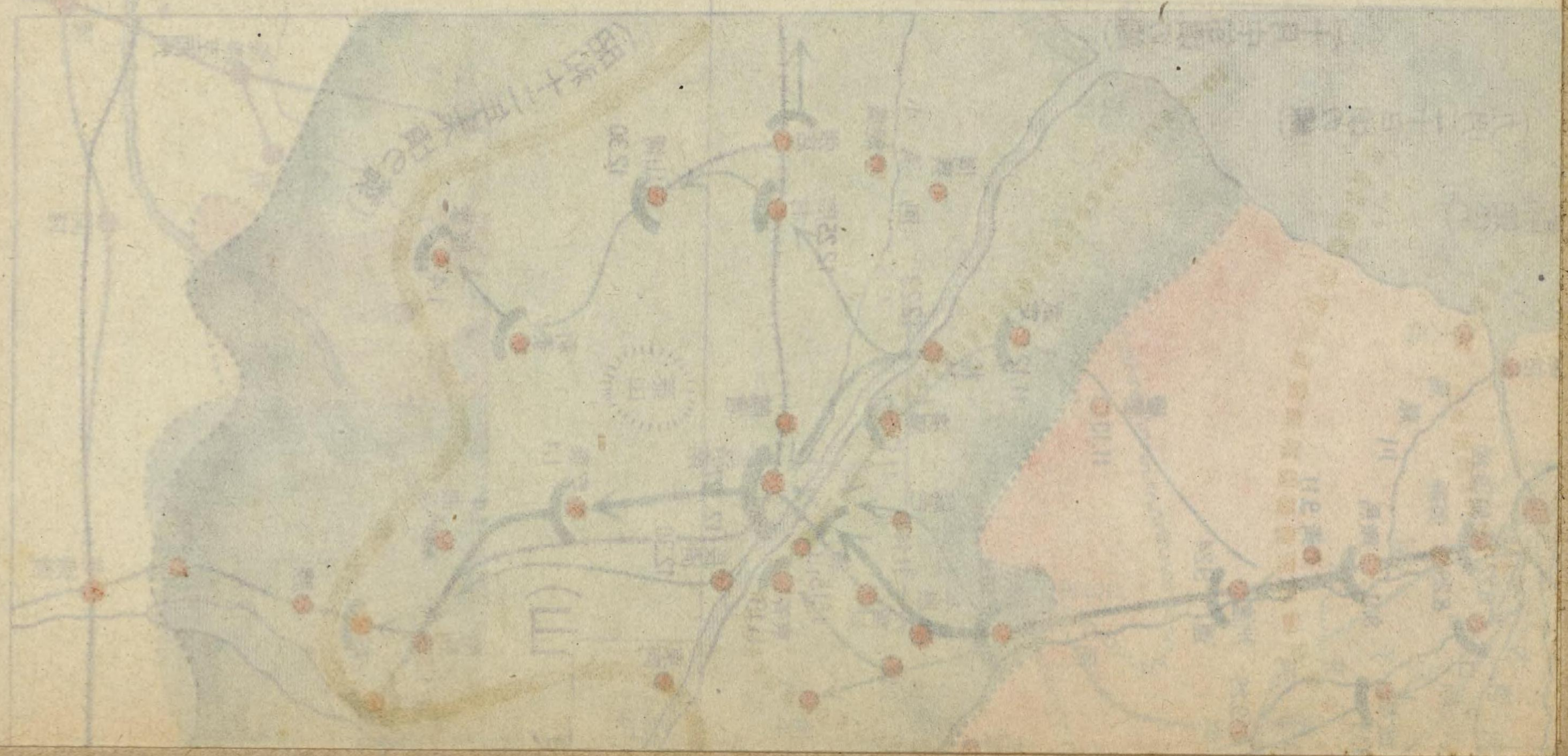
九月二十日頃の線
十月中旬
（綏遠）
（察哈爾）
（北河）
日本軍根據
五台山
0 10 20 30里
9.16 商都
9.26 陶林
9.24 平地泉
9.19 興和
8.27 張家口
8.28 宣化
8.29 下花園
8.27 懷來
8.23 關廟居
8.12 南口
8.21 橋溝
8.22 津
8.29 海靜
9.11 廠馬
9.13 城大
9.24 州滄
9.29 獻
9.18 州涿
9.24 保定
9.11 蔚
9.16 廣靈
9.20 靈邱
9.16 淶源
9.30 大營鎮
9.29 關荊平
9.24 應
9.28 朔州
9.30 寧武
9.30 州代
10.8 崞
11.3 鎮口沂
9.23 涼州
9.20 右玉
9.14 懷仁
9.13 大同
9.17 豐鎮
9.9 陽高
10.11 平魯
11.9 向陽鎮
11.2 壽陽
10.29 平定
10.28 娘子關
10.27 新關
11.5 榆次
11.9 太原
11.9 大谷
11.9 平遥
12.末 昔陽
和順
榆社
靈石
10.11 井陘
10.10 定正
石家莊
10.14 邑高
10.15 德順
10.17 邯鄲
趙州
冀城
安平
深
寧晉
唐山
釜湯川
威
臨清
邱
故城
武城
清平
恩州
禹城
鵲山
東齊
11.19
11.20
11.16
11.15
11.14
11.13
11.12
11.10
12.23
州德
10.3
平原
臨邑
濟陽
武定
榆林
慶雲
韓倉
塘沽
大沽
馬廠川
獨流鎮
王口鎮
大清河
子牙河
白河
永定河
大易水
拒馬河
滹沱河
汾河
桑乾河
通州
北京
昌平
古北口
延慶
八達嶺
康莊
懷來
新保安
下花園
張北
張家口
宣化
豐鎮
虎口
大同
陽高
渾源
廣靈
蔚
淶源
雁門關
繁峙
崞
州代
鎮口沂
新樂
高陽
河間
青
固安
永清
霸
郎坊
鄉良
山房
保定
新樂
井陘
娘子關
獻
武強
州滄
運
慶雲
武定
榆林
臨邑
濟陽
恩州
禹城
鵲山
東齊
韓倉
塘沽
大沽
馬廠川
獨流鎮
海靜
廠馬
青
州德
平原
故城
武城
清平
臨清
威
邱
唐山
釜湯川
趙州
冀城
安平
深
寧晉
武強
獻

日本軍根據
北京
通州
橋溝蘆
8.21
郷良
山房
拒馬河
州涿
9.18
固安
永定河
郎坊
白河
津天
塘沽
大清河
王口鎮
8.22
鎮流獨
8.29
海靜
馬廠川
大沽
永清
霸州
9.24
保定
易水
大冊河
高陽
新樂
城大
9.13
子牙河
河間
9.11
廠馬
青
9.11
州滄
9.24
運
9.29
献
武強
安平
深
(北河)
沽河
定正
10.10
井陘
10.11
娘子關
10.28
平定
10.29
壽陽
11.2
太原
11.9
榆次
11.5
新關
10.27
石家莊
趙州
藁城
寧晉
唐山
10.14
邑高
10.15
德順
10.17
鄲邯
10.18
磁
11.12
大名
德彰
11.4
樂南
豐滿
12.16
濮陽
陰湯
衛輝
新鄉
鄭
開封
婦德
徐州
十月中旬
故城
州德
10.3
平原
臨邑
11.14
恩州
禹城
鵲山
11.15
武城
清平
臨清
11.20
東齊
11.19
威
11.16
邱
衛河
冠
堂邑
莘
觀城
12.8
黃
(東山)
東阿
長清
12.30
12.27
濟南
韓倉
泰山
安泰
1.1
新泰
1.4
曲阜
寿州
濟寧
1.5
郗
1.11
滕
莊韓
慶雲
11.10
武定
11.12
榆林
12.23
濟陽
11.13
臨邑
11.14
汾河
12.末
昔陽
11.9
平遥
和順
靈石
榆社
沁源
洪洞
黎城
陵川
向陽鎮
11.9
汾陽
大谷
11.9
平定
繁峙
州代
9.30
崞
10.8
鎮口沂
11.3
五台山
寧武
9.30
大營鎮
9.30
關荊平
繁峙
9.29
雁門關
9.24
應
9.28
朔州
渾源
9.16
廣靈
9.20
靈邱
9.16
淶源
9.11
蔚
10.11
曾

戰局參照圖（年一第爭戰）


綏遠
察哈爾
山西
十月中旬の線
十二月日頃の線
年末線
十月中旬
五台山
黃河
滹沱河
桑乾河
汾河
9.16 商都
9.19 興和
8.27 張家口
張北
9.30 百靈廟
固陽
9.26 陶林
9.24 平地泉
綏遠 10.14
薩拉齊
包頭 10.17
保合
南海子
東勝
偏關
五寨
興
臨縣
方山
離石
向陽鎮
太原
榆次
汾陽
大谷
平遥
靈石
沁源
榆社
和順
昔陽
壽陽
平定
娘子關
井陘
石家莊
新關
定正
趙州
唐山
邑高
德順
邯鄲
9.23 涼州
9.17 豐鎮
9.9 陽高
大同
9.20 右玉
懷仁
9.13
9.14
平魯 10.11
9.28 朔州
9.24 應
雁門關
9.29
繁峙
9.30 大營鎮
平荊關
9.16 廣靈
9.20 靈邱
渾源
9.11 蔚
淶源
寧武 9.30
州代 9.30
崞 10.8
鎮口沂 11.3
虎口 9.20
10.11
10.10
10.28
10.29
10.27
11.9
11.2
11.5
12.末
11.9
11.9
10.14
10.15
10.17


偏關
9.28
朔州
雁門關
9.29
靈邱
9.20
9.16
平型關
大營鎮
9.30
繁峙
代州
9.30
崞
10.8
寧武
9.30
五寨
五台山
興
鎮口沂
11.3
滹沱河
臨縣
方山
向陽鎮
11.9
太原
娘子關
井陘
10.11
10.10
定正
平定
10.28
壽陽
11.2
10.29
榆次
11.5
新關
10.27
石家莊
趙州
難石
黃
河
年末線
汾陽
11.9
大谷
12.末
昔陽
11.9
平遥
和順
汾
靈石
榆社
河
沁源
洪洞
黎城
臨汾(平陽)
陵川
聞喜
垣曲
安邑
蒲州
潼關
洛陽
鄭
開封
新鄉
衛輝
陰湯
德彰
11.4
漳河
恒河
豐
唐山
10.14
邑高
10.15
德順
10.17
鄲邯
10.18
磁
十月中旬
(山西)



乙　中支作戰

第一節　上海方面の戰

上海は國際都市であり、支那の大商港であり、從つて政治的陰謀を企つるに便宜であるので、兎角に事件の多い所である。昭和六年（西暦一九三一年）滿洲事變起るや、次いで上海事變なるものが起り、日支の開戰となつたのであるが、それが日本の勝利となり、翌昭和七年（一九三二年）五月五日上海停戰協定が出來、其の後表面では平穩で經過して來たが、昭和十二年（一九三七年）七月七日蘆溝橋事件の勃發するや上海一帶の對日情勢は頓に激化し、何時如何なる事件の起るやも計り難き狀態となつた。之は南京の支那政府及び各抗日團體が此の機會を利用して、一層排日を煽つた爲めである。各地に排日示威運動が行はれ、日本人と取引する支那商人は奸漢と稱して迫害せられ、日本人に使傭せらるゝ支那人も脅迫を受けて姿を隱し、果ては日本人の婦女子供に石を投げ日本人に食糧を賣らない迄に惡化した。

加ふるに支那保安隊五千人のものが一萬人に增加され、是等の保安隊又は軍隊は日本人の居住する租界地域の周圍に塹壕を掘り、鐵條網を張り、土囊を積み上げて攻擊威嚇の態度を取つた。此のやうに一帶の空氣は危機を孕み、爆發點に達して居つた所へ、俄然「大山中尉虐殺事件」が突發して愈々事態の激化を來たしたのである。

●大山中尉事件とは――上海には日本人經營の多數紡績工場がある。形勢不穩なので在上海日本海軍陸戰隊から該工場護衛の爲め大山中尉の指揮する部隊を派遣して置いたのである。同中尉は八月九日夕刻陸戰隊の自動車に乘り助手の水兵に運轉させ、分遣所から陸戰隊本部へ向ふ途中、虹橋支那飛行場東方の道路に於て不法にも多數の保安隊に包圍され、小銃、機關銃の亂射を受け無殘にも即死した。此の附近の道路は各國人の通行の自由である所であるに拘はらず、最近支那側は以前の停戰協定を無視し、兵力を以て勝手に通行を禁止し、通行人に一々ピストルを突き付けて身體檢査するなど、外人に對する侮辱であり又抗日の公然たる挑戰行爲である。

日本側に於ては嚴重な抗議をなせど、支那側には固より誠意のあらう筈がなく、日本が時局の不擴大の方針を堅持すれば、する程、日本を輕視して挑戰的となり、遂には八月十二日軍隊の大部が公然と停戰區域以内に侵入して上海北停車場に下車し、翌十三日西洋人の最も嫌ひな十三日の金曜日を以て閘北より日本海軍陸戰隊に向ひ不意に民家より襲擊を加へた。陸戰隊は之に應戰し、斯くして全面的戰鬪の開始となつたのである。八月十五日日本政府に於ては聲明を發し且つ陸軍部隊の派兵を決するに至つた。

其一　日本陸戰隊の奮鬪

支那側は事變前より日本の勢力を上海より一掃せんと企て豫め軍隊を部署する所あつた。即ち日本租界周圍を包圍し、正規軍を以て吳淞を固め、南京―上海間の鐵道は旅客輸送を停止して軍用にのみ供し而して盛んに便衣隊を市内各所に放ち日本陸戰隊を殲滅するのみならず、日本居留地をも砲擊するの計畫であつた。而して最初の兵力約十萬と認められた。

之に對し日本陸戰隊の兵力は約二千名に過ぎなかつたが、日本の不擴大方針と、當時列國大使から日支兩國に

隊を市内各所に放ち日本陸戰隊を殲滅するのみならず、日本居留地をも砲擊するの計畫であつた。而して最初の

兵力約十萬と認められた。

之に對し日本陸戰隊の兵力は約二千名に過ぎなかつたが、日本の不擴大方針と、當時列國大使から日支兩國に對し調停の申出もあつたので愼重の態度を取り、不法なる支那兵の射擊に對し單に防禦に止め、支那飛行機の租界內低空飛行に對しても特に攻擊を加へなかつたのである。然るに支那軍は之を見て日本軍與し易しと考へたものゝ如く翌八月十四日に至るや十數機の飛行機を以て日本艦船、陸戰隊本部、總領事館等に爆擊を加へ、上海歡樂街の中心地其の他を盲爆して阿鼻叫喚の修羅場を現出せしめた。

是れに於て日本海軍は遂に意を決し、同日最後の手段を執るべき旨を聲明して疾風迅雷的に行動を開始した。僅か數十百の陸戰隊を以て數萬の支那軍を引き受け、間斷なく押し寄せ來る敵を支へて一歩も進ませず、勇戰奮鬪、汗まみれ、泥まみれになつて不眠不休其の使命を全うした。

支那軍は日本から援軍の到著する前に、上海から日本陸戰隊を一掃して上海を完全に占領せんと、兵力を增加し猛烈に攻擊して來るので、流石の陸戰隊も、果して其の陣地を維持し得るや否や、一時危ぶまれた位であつたが善く防ぎ、能く守り、八月十八日には新鋭の陸戰隊が上陸增加して勢ひを得、同二十三日には待望の日本陸軍が上海に上陸したので、爾來上海戰は陸軍を主とする本格的の戰爭となつたのである。

日本陸軍の上陸により、陸戰隊は一應其の任務を果したと云ふべきであるが、多年上海方面にあつて現地の情況を熟知し且つ市街戰に慣れてゐるので虹口より楊樹浦に亙る地區は陸軍の到著後も陸戰隊が其の守備に任じ最

後の勝利に至る迄戰鬪に參加した。

此の如く日本陸戰隊は僅か二千乃至三千の寡兵を以て十萬餘の敵に對し約十日間市街戰によりて之を拒止し一歩も退かざるのみならず、時々肉彈突擊を以て敵の心膽を寒からしめた壯烈極まる奮鬪は環視の外人をして驚嘆せしめたものである。

八月十四日支那飛行機の投下した爆彈は日本の艦船、領事館等に一發も命中しなかつた。日本側にては最初軍艦の艦載機數機を出動せしめたに過ぎなかつたが、其の後海軍航空部隊は內地の基地より荒天豪雨を冒し海を渡りて長驅上海其の他中、南支一帶に雄姿を現はし、玆に史上未だ見ざる空中戰を展開した。

其二　第一期の戰況（八月下旬—九月中旬）

日本陸戰隊は前記の通り寡兵を以て大軍を引き受け、よく陣地を死守して陸軍の來援を待つたが、其の待望の陸軍は八月二十三日上海に到著、陸海兩軍の緊密なる協同の下に羅店鎭の方面揚子江沿岸及び其の下流吳淞鎭附近に上陸した。

敵は海岸に鹿砦、鐵條網を張り其の後方に堅固なる陣地を構築し、大砲、機關銃の筒先を並べて、一兵も上陸させじと待ち構へた。之に對し日本軍艦及び航空部隊は先づ全力を擧げて猛烈な射擊を加へ、其の間に陸軍の將兵は總て決死の覺悟を以て敵前上陸を敢行したのである。

【支那軍の情況並に地形】　上海附近に於ける支那軍の兵力は急激に增加し七月下旬約一萬であつたのが、八月中旬に至るや上海周邊のみにても約十箇師十萬と號され、其の後續々增加して日本陸軍の上陸時期に至つては約二十萬と算せられた。

兵は總て決死の覺悟を以て敵前上陸を敢行したのである。

【支那軍の情況並に地形】　上海附近に於ける支那軍の兵力は急激に增加し七月下旬約一萬であつたのが、八月中旬に至るや上海周邊のみにても約十箇師十萬と號され、其の後續々增加して日本陸軍の上陸時期に至つては約二十萬と算せられた。

上海附近は大小各湖水及び河川の間を連絡するクリーク（溝渠）が、揚子江の吐き出した砂質粘土の平原を縱横に通ずる所謂クリーク地帶であり、近きは百五十米、遠きは三百米も行けば直ちに之に遭遇する狀態であつて眞に網の目の如き有樣である。中にも吳淞クリークの如きは其の幅二百米にも達し洋々たる水を湛へて居る、其の小なるものと雖も幅四、五米深さ一、二米に達して跳越乃至徒涉は頗る困難であり、已むなく敵彈下に於て何等かの渡河設備を爲すに非ざれば進み得ざる狀態である。橋の如きは皆無と云ふ有樣で辛うじて家畜を通ずる程度のものが、一里も離れてあるに過ぎない。それで軍隊の行動は多大の制肘を受け戰鬪の進捗は迅速を期し難い。此の事に就いては昭和七年の上海戰に於て日本軍は苦き經驗を嘗めたのである。

上海方面は蔣政權の爲めには心臟部に値する重要方面であるので昭和十年九月南京政府は對日防禦計畫を策定して、之に基き今日まで其の工事を急ぎ、今次事變前迄に揚子江々岸の線、劉河鎭、羅店鎭、劉河行、廟行鎭、江灣鎭の線及び嘉定、南翔、大場鎭の線には既に掩蓋機關銃座並にトーチカ陣地の設備を骨幹とする近代的な一聯の陣地帶を形成し、機關銃の如き五乃至十米間隔に配置しありて、小銃の射擊設備の如きは殆んど之を見ざる有樣であつた。

以上陣地帶に含まれてゐる市街は煉瓦より成る城壁を有し攀登不可能なると共に野砲彈に對する抗力は頗る堅

固である。村落は殆んど全體的の圍壁を有してゐないが往々水濠を廻らし、村落内に在りては同族の數家族が相集團して圍壁を設け、團每に水濠を掘り夜に橋梁を脫する等の自衞手段を講じてゐるので防者に取つては屈强の據點を成形してゐる。

加ふるに此の方面の重要性に鑑み、之が守備に任ずる支那軍隊は其の訓練に於ても將た其の裝備に於ても優秀を誇る蔣介石直系の所謂中央軍であり、殊に其の陣地の一翼に國際都市たる上海の大市街を控えてゐることなれば日本軍としては作戰上多大の制肘を受くるの已むを得ざる窮境に立つてゐるのである。此の如く上海方面の戰線は靱强性を有するを以て北支と同一の思想を以て之を論ずる譯には行かぬ、つまり特種の性質を有する戰場と見るべきである。

【沿岸占領】　船よりする日本軍は難攻不落の稱ある上海附近の敵、しかも數倍優勢なる敵を攻擊するには大膽にして冒險なる上陸を斷行すると共に速かに沿岸に立脚地を占め、此處を足溜りとして戰線を擴大せねばならぬ、之が爲めには上陸點の選定と、上陸してからの作戰を如何に指導すべきかは重大な問題である。若も之が失敗すると、如何に勇敢無比の日本陸軍と雖も水上に在りては其の本領を發揮することは出來ない。茲に日本統帥部の苦心があつたのだ。松井大將は陸軍の最高司令官として上海派遣軍を指揮した。

八月二十三日上海沖に到著した日本軍は大體に於て二つに分かれ敵前上陸を敢行した。上流のものは羅店鎭方面、下流のものは吳淞鎭方面であつた。

其一　羅店鎭方面　奇襲的に此の方面に上陸した日本陸軍は、軍艦並に飛行機の協力を得約四十時間に亙る激戰の後、沿岸の敵線を突破して猛進し、二十八日正午羅店鎭を完全に占領した。同地は敵陣地左翼の據點にして

面、下流のものは吳淞鎭方面であつた。

其一　羅店鎭方面　奇襲的に此の方面に上陸した日本陸軍は、軍艦並に飛行機の協力を得約四十時間に亙る激戰の後、沿岸の敵線を突破して猛進し、二十八日正午羅店鎭を完全に占領した。同地は敵陣地左翼の據點にして日本軍の之を得たるは爾後に於ける日本軍の行動に多大の聲援を與へたものであつた。

此の方向に上陸した一部隊は鋒を東南方に轉じ九月一日奮戰の後、獅子林砲臺を攻略し潰走する敵を追擊して寶山城方面に進み周家宅附近に至り、吳淞方面から進出せる部隊と相俟つて寶山城に在る敵に對し包圍挾擊の態勢を占めた。

其二　吳淞鎭方面　此の方面に向つた日本軍は八月二十三日未明海軍の緊密適切且つ果敢なる協同動作の下に先づ一部隊を以て江岸に陣地を占領せる敵を擊破して吳淞鎭南方に上陸し、南進して二十七日朝殷行鎭を攻擊占領し以て上海の北端楊樹浦及び閘北方面に頑據せる敵の背後を脅威するの態勢を占めた。

之に次ぎ三十一日他の一部隊は江上からする砲擊と空中からする爆擊とに掩護せられつゝ血煙の中を吳淞鎭北側地區に上陸を强行し、又一部を以て吳淞クリーク鐵橋方面から之に策應し、塹壕、家屋等に據る優勢頑强の敵に對し血戰約一時間の後之を驅逐し、此の日の內に右翼商船學校から左翼李家宅に亙る線に達し、息をも繼かずに戰果を擴張し九月二日朝吳淞砲臺を陷れて敗敵を急追して寶山城に向つた。

此の隊は九月三日續いて上陸した部隊と合して西進し、四日寶山城南側より尹家宅を經て泗塘クリークの線に展開して攻擊を開始した。然るに敵は堅固なる城壁及びクリーク等を利用して頑强に抵抗して敢て屈せず激戰夜

に入り、又屢々逆襲して來たが凡て之を擊退し、明けて五日に至り更に砲兵の火力を最高度に發揚して攻擊を續行し、而して先きに獅子林砲臺方面より南進し來れる友軍部隊と協力して包圍的に敵を攻擊し六日遂に寶山城を占領し城頭高く日章旗を飜へした。斯くて吳淞方面に上陸した部隊と羅店鎭方面に上陸した部隊とは玆に相連絡することが出來た。吳淞、羅店鎭間の距離は約五里である。

續いて九月二日吳淞鎭北側地區に上陸したる新たな部隊は直ちに揚行鎭方面の攻擊に前進した。此のやうに日本軍は冒險なる上陸作戰によつて右翼羅店鎭より獅子林砲臺、泗塘クリーク、吳淞鎭を經て左翼殷行鎭に至る間を占領し狹い乍らも爾後の作戰に有力なる根據を得た。之が約一週間內に於ける戰蹟である。

【戰果擴張】　沿岸に立脚地を得たならば、次は戰線の推進、戰果の擴張である。其の向ふ方面は此の時期に於ては先づ羅店鎭、劉家行、江灣鎭の三目標であつた。

其一　羅店鎭方面　八月二十八日逸早く羅店鎭を占領した部隊は其の後鋭意攻擊を準備し周邊に戰線を擴大して後續友軍の進展を待つてゐた。

そこで九月六日寶山城を攻略した部隊の一半は此の方面に前進することゝなり、十日には月浦鎭を陷れ十二日には沈家宅附近を略し、更に十五日頃には羅店鎭の東南方約一里の金家宅附近の線にまで前進し爾後前項の諸隊と共に前面一帶の敵陣地に向ひ力攻是れ努めたが、陣地極めて堅牢にして容易に攻略することが出來ず近く相對峙して對壕作業を開始せねばならぬ狀態となつた。

其二　劉家行方面　九月二日吳淞鎭北方地區に上陸した一隊は他方面に關せず直ちに揚行鎭の攻擊に向つた。敵陣地は中々堅固にして十日、十一日の兩日に亙る力攻に之を拔くを得ず、翌十二日更に猛烈なる砲火と海軍航

と共に前面一帶の敵陣地に向ひ力攻是れ努めたが、陣地極めて堅牢にして容易に攻略することが出來ず近く相對峙して對壕作業を開始せねばならぬ狀態となつた。

其二　劉家行方面　九月二日吳淞鎭北方地區に上陸した一隊は他方面に關せず直ちに揚行鎭の攻擊に向つた。敵陣地は中々堅固にして十日、十一日の兩日に亙る力攻に之を拔くを得ず、翌十二日更に猛烈なる砲火と海軍航空隊の密接なる協力の下に激戰奮鬪の後漸く之を攻略し、敗敵を急追しつゝ劉家行、顧家宅東側の陣地に對し、十三日早朝より攻擊を開始し正午頃敵前概ね五、六百米の火燒場、南王宅の線に進出したが、是れ亦陣地極めて堅固なるにより對壕作業を開始するの已むなきに至つた。

其三　江灣鎭方面　此の方面の重要な點は上海に於て苦戰奮鬪中の海軍陸戰隊と吳淞方面に上陸した陸軍との連絡である。然るに此の間約三里の地は敵兵充滿且つトーチカ陣地の堅固なるものありて其の突破中々容易とは見られなかつた。

そこで日本軍にては九月三日步砲連合の一部隊を上海共同租界に上陸せしめ北進すると共に、吳淞方面からも二隊を出し一隊は鐵道線路を、他隊は軍工路を南進せしめて連絡を取らんとした。此の計畫は相當の苦戰もあつたが成功した。

上海方面からの北進部隊は九月三日上陸を終るや直ちに前進し五日滬江大學附近に於て攻擊を準備し、六日陸海軍の砲擊及び海軍航空隊の爆擊と相俟つて攻擊を開始し恰も此の日虹江碼頭に敵前上陸した一隊と相協力し頑强なる敵の抵抗を排除しつゝ九日界濱江クリークの線に蟠居せる數箇のトーチカ陣地を突破して沈家巷鎭を占領し、然る後左翼に續進せる海軍陸戰隊の一部と附近の敵を掃蕩中、十三日恰もよく吳淞方面より軍工路を南進せ

る友軍と會して連絡することが出來た。

吳淞方面からの南進部隊は鐵道線路と軍工路の二道を分進し途中殷行鎭附近に在る友軍を合して南進した。軍工路方面の隊は前記の如く十三日上海より北上せる隊と連絡したるを以て、共に其の正面を西に向け退却する敵を追擊し市政府附近の敵陣地を突破し、鐵道線路を南下せる友軍と連繫して十四日江灣鎭の北側及び東側附近の敵を攻擊したが、頑强に抵抗する敵の防戰により、陸家橋、盛家宅、齊家宅の線に停止するの狀態となつた。

以上の如くであつて九月十五日頃に於ける戰線は右翼羅店鎭北方附近より劉家行東方火燒場、南三宅を經、廟行鎭の東北方陸家橋を過ぎ江灣鎭の東方を廻はりて上海市街の共同租界に達し、玆に戰線は統一せらるゝに至つた。此の戰線は江岸を距る約一里乃至二里、長さ約十里に及んでゐる。

其三　第二期の戰況（九月中旬―十月中旬）

上海の支那軍が意外に頑强なので其の後更に日本內地より增援軍が派遣せられ、揚子江下流に上陸を完了し爾後の攻擊を準備中の所十九日以來劉河鎭東南方地區に進出し、右翼方面を强化すると共に敵の左翼を脅威するの有利なる態勢を占むるに至つた。

九月十五日以來比較的變化なかりし戰線は、今や有力なる新鋭部隊の來著と共に益々陣容を一新し、二十一日上海全線に亙り猛烈なる攻擊の火蓋を切り、朝來の豪雨を物ともせず、砲兵隊の釣瓶打ちの猛射の掩護下に各戰線共各處に壯烈なる白兵戰を展開し、群がる敵に大打擊を與へ、前進又前進を續け各戰線共に漸次敵を西方に壓迫し九月三十日頃には都宅、沈家橋、金家宅、王殷宅、胡家宅を經て江灣鎭の東方に亙る線に進出した。此の間に於て最も頑强に抵抗したのは羅店鎭南方の白壁兵營及び劉家行東方の無電臺陣地に在る敵であつた。

線共各處に壯烈なる白兵戰を展開し、群がる敵に大打擊を與へ、前進又前進を續け各戰線共に漸次敵を西方に壓

迫し九月三十日頃には都宅、沈家橋、金家宅、王殷宅、胡家宅を經て江灣鎭の東方に亙る線に進出した。此の間に於て最も頑强に抵抗したのは羅店鎭南方の白壁兵營及び劉家行東方の無電臺陣地に在る敵であつた。

【白壁兵營の戰況】 羅店鎭南方の白壁兵營は百米四方、高さ三丈餘の白壁で圍まれ、我が第一線と僅か七十米を隔てゝ對峙し、無數の銃眼を此方に向け機關銃數十挺を据えて一歩も近づく能はざらしめ、尙ほ其の間には約四米幅のクリークが横に流れて部隊の前進を阻み、之が突破に有名な和知部隊は二十六日間、連日連夜血みどろの惡戰苦鬪を續けて來たのである。

工兵隊は九月十九日以來窃かに我が陣地より白壁兵營に向け、クリークの底を潛つて坑道を掘りつゝあつたが九月二十三日秋季皇靈祭當日には敵前約三十五米に達した。

和知部隊長は秋季皇靈祭當日を期し、愈々全力を擧げて此の堅陣の突破を決意し、午後二時敵陣に炸裂する我が砲火をきつかけに、我が果敢なる爆擊により敵に打擊を與へ、一方坑道よりは決死隊をもぐり込ませた。此のもぐら戰術に勇躍した爆破決死隊は坑道を匍匐して進み、坑道盡くるや其處より地上の敵正面に躍り出て約二十米を疾驅して白壁を見事爆破した。他方戰車隊は先陣を承り敵猛火の中を突進し、工兵隊の決死の敵前架橋に依る假橋を、下半身水に浸りながらクリークを渡り、白壁兵營の背後に廻り猛火を敵に浴びせた。

右のもぐら戰術、戰車襲擊に加へ砲擊、空爆を以て敵營を破壞し此の機を逸せず歩兵隊は敵陣に突擊し殆んど敵兵を殲滅して遂に白壁兵營を占領した。時に午後四時半である。歩兵隊は更に同兵營後方の赤煉瓦の兵營をも

一擧に突破して羅店鎭――上海道を遮斷し勝に乘じ更に前方敵陣地に向ひ進擊した。

【無線臺陣地の戰況】　劉家行の東方に無電臺の陣地ありて頑强なる防禦據點を成形してゐた。日本軍は九月二十日朝來優勢なる砲兵並に空軍の威力を加へ劉家行、王丸房の線に對し攻擊を開始し、二十二日石井部隊は無電臺陣地の敵に向つたが、敵の抵抗頑强にして肉彈戰を敢行しても尙ほ之を拔くことが出來なかつた、是れ王丸房附近の敵陣地より猛烈なる側射を受けるからであつた。

此の時細見部隊の一部は石井部隊に協力すべく王丸房の敵側防陣地に向ひ其の銃眼を目がけて勇敢にも手榴彈を投げ付けて之を踏み潰し敵陣地を縱橫無盡に蹂躪した。此の好機を逸せず石井部隊は一齊に突進して無電臺の敵陣地を確實に占領した。此の勢ひに乘じ逐次附近の陣地を奪取しつゝ三十日迄に概ね劉家行、顧家宅の線に進出した。

以上の如く白壁兵營、無電臺陣地の攻略に伴ひ全線の士氣は一段と振起して目覺ましき前進を續け十月二日頃には左しも堅固なる劉家行、顧家宅の陣地を占領し四日頃には閘北戰線の陸戰隊も奮戰して鐵道線以東にある敵を掃蕩して北四川路一帶を確保した。故に十月七日頃に於ける戰線は右翼劉河鎭南方より羅店鎭西方を經て劉家行南方に到り、それより廟行鎭北方より江灣鎭東方を繞りて閘北戰線に及んだ。

日本海軍は開戰直後支那沿岸航行遮斷の旨を宣言すると共に航空隊を以て空爆を强行し南京を始め、各地飛行場、工廠、停車場、艦船等を爆擊して連日中支の天地を震駭した。開戰前第一線に活動し得る支那飛行機の數は約四百と推算されたが十月上旬までに其の約三百五十機を擊破して制空權を獲得し、又支那海軍の旗艦寧海（二千四百噸）以下十八隻を擊沈して殆んど全滅に歸せしめた。

日本海軍は開戰直後支那沿岸航行遮斷の旨を宣言すると共に航空隊を以て空爆を強行し南京を始め、各地飛行場、工廠、停車場、艦船等を爆擊して連日中支の天地を震駭した。開戰前第一線に活動し得る支那飛行機の數は約四百と推算されたが十月上旬までに其の約三百五十機を擊破して制空權を獲得し、又支那海軍の旗艦寧海（二千四百噸）以下十八隻を擊沈して殆んど全滅に歸せしめた。

斯くて松井最高軍司令官は十月八日聲明書を發して、近き將來に於て決戰的行動に出づるの決意を示して支那側の反省を促し、同時に支那人民に對しては日本軍に信賴し安んじて業に復すべきを勸告した、然るに之に對し支那側は何等の誠意を示すことなく益々抗戰の態度に出づるので日本軍は愈々十月二十三日を以て總攻擊を敢行することゝなつたのである。

其四　總攻擊（十月下旬）

日本國民は北支方面の我軍は連戰連勝、一瀉千里の勢ひを以て進行してゐるのに、上海方面はそれに反して、戰局の發展遲々たるに焦躁してゐた折柄、松井軍司令官の聲明があつたので、今度こそは一大快報に接せんと一日千秋の思ひを以て一週間、十日と待ち遠い日を過したが、遂に待望の日が來て、十月二十三日の總攻擊が開始された。

上海方面は陣地戰の最も執拗なるものであつて同じ陣地攻擊でも北支のそれとは其の趣きを異にした頑性的なものである。世界戰史の中で最も珍らしきクリークの網の目の中での攻擊、しかも數倍優勢の敵に對するのであれば朝に一城、夕に一壘を屠るやうな電擊的の戰果を擧げることは中々六かしい。此の頃判明した敵の兵力は第一線だけで約四十五萬、第二線のものを合すれば約七十萬乃至八十萬と稱せらるゝ大軍であつた。

敵の陣地は數線に作られてゐるが、上海直接の防禦陣地として最も堅固なるものは、大場鎭、江灣鎭の陣地で

あるので十月二十三日是等の陣地に對する總攻擊が始まつた。

【大場鎭の攻略】　大場鎭は上海の西北約一里に位する人口三、四萬の都市で軍事上最重要地點として上海北門の要害であり、又上海、南京を通ずる鐵道を掩護すべき極めて重要な地點である。されば敵は事變が始まると早くも南翔、江灣鎭を連ねる線に堅固なる數線の陣地を構築し飽くまで抵抗するの準備を整へてゐた。其の前面の陣地は深さ實に五吉米に亙り全部壕を掘り廻らし、しかも鐵道のレールを以て掩つた頑强極まるものであつた。

之を攻略するには先づ前方に在る廟行鎭の陣地を奪取せねばならぬ。廟行鎭は過ぐる上海事變に彼の爆彈三勇士を出して日本軍の精華を全世界に輝かした有名な古戰場で、二百戸ばかりの農家の密集部落で大きな關羽の廟があり、附近には無數の小クリークがあり、又塚が多い。守るには中々都合のよい地形で、前の上海戰の時も吳淞から上陸した下元旅團が苦戰した。其の後支那軍は多數のトチーカ、堅固な塹壕を掘りて大いに防備を强化した。

日本軍は此の廟行鎭の攻擊を續行すること既に三十七時間の長きに及び、十月二十五日の夜猛烈なる襲擊を行ひ奮戰激鬪の末之を陷れ潮の如く前進して大場鎭の陣地に向ひ、東側、中央、西側の三方面より、爆彈、砲擊、飛行機、戰車の協力を得て肉彈攻擊を强行した。此の勇戰奮鬪は鬼神をも哭かしむるものであつたが、之に對する敵の抵抗振りも亦全く死物狂ひにて、眞先に突入した日本軍戰車に敵の決死隊が駈け上り携へた手榴彈を投げつけて自分も爆死して了ふなど敵乍ら蠻勇を揮つたものであつた。されど二十六日、此の堅固なる大場鎭も遂に日本軍の陷る所となり、萬歲の聲江南の天地を震撼した。

【江灣鎭の攻略】　江灣鎭は既に吳淞及び上海の兩方面から進擊せる日本軍によつて北、東、南三方面を包圍的

つけて自分も爆死して了ふなど敵乍ら蠻勇を揮つたものであつた。されど二十六日、此の堅固なる大場鎭も遂に

日本軍の陷る所となり、萬歳の聲江南の天地を震撼した。

【江灣鎭の攻略】　江灣鎭は既に吳淞及び上海の兩方面から進擊せる日本軍によつて北、東、南三方面を包圍的に攻擊されてゐたのであるが、頑强に抵抗して未だ陷落しなかつたのである。

そこで十月二十三日總攻擊の始まるや、日本軍は例の如く飛行機の協力を以て戰車を先頭に遮二無二進擊し二十四日には江灣鎭東方に在る復旦大學を占領した。此の大學は支那有數の大學で校舍の規模の廣大と施設の完備を誇つてゐる。李鴻章の創立に係るものであるが、近來は上海學生の抗日運動の中心であり今次の事變にも同大學の男女學生は多數志願兵として軍隊に加はり又便衣隊として各處に活動したものである。

翌二十五日には江灣鎭南方の商科大學を奪取し續いて北面して攻擊を施し、二十六日早朝には先づ競馬場を占領し勢ひに乘じ各隊四方より江灣鎭に突入して遂に之を奪取し敗走する敵を西方及び西南方に追擊して附近を掃蕩した。

大場鎭、江灣鎭の陣地は支那軍が所謂ヒンデンブルグ線と誇稱し、たとへ焦土と化するも大場鎭は日本軍に渡さずと豪語してゐたのであるが、今や其の陷落を見るに至つては上海作戰に大轉機を劃するものである。此の堅陣の奪取に勢ひを得た日本軍は右翼劉河鎭中央廣福鎭方面に於て戰線を推進し、左翼閘北方面に在りては海軍陸戰隊が奮戰して十月二十七日閘北の大半を掃蕩し北停車場を占領し、此處に屋上高く軍艦旗を揭げ、此の方面に進擊して來た陸軍部隊と握手した。

扇の要が壞はれると扇體がバラ〳〵になると同樣、一と度び大場鎭の防禦據點の破るゝや支那軍は支離滅裂となり或は西方に或は南方に走りて統制を缺くの狀態に陷つたのは自然の勢ひである。之に乘じ日本軍は一歩も强壓の歩を弛めず全線を擧げて突進し十月三十日頃には右は劉河鎭東側地區より、中央廣福鎭附近を經て左翼は一大躍進して蘇州河の北岸に迄達した。此の戰績は偉大なものである。卽ち大場鎭方面は七日間約四里の進出であつて、之は吳淞附近に上陸以後約二箇月間の進出距離よりも多いのである。之により上海戰の勝利は確定的となり、日本國民は此に始めて會心の萬歳を唱へた。

其五　上海の占領（十一月中旬）

日本軍は十月二十三日の總攻擊に成功して大場鎭、江灣鎭の堅陣を陷れ怒濤の如く三十日蘇州河の線に達するや、一刻の猶豫も與へず直ちに河を隔てゝ對岸の敵に對し陸海空軍の共同攻擊を行ひ、翌三十一日には敵前上陸を强行して北新涇附近に地歩を獲得し、それより各隊も續いて渡河を敢行し、頑强に抵抗する敵を逐次南方に壓迫した。此の頃密雲閉ぢ籠り冷氣肌を刺し、且つ前日の雨により道路も泥濘となり、陸空諸部隊の行動、連絡は極めて困難であつたが、各隊の士氣は頗る旺盛で勇猛果敢、是等の障碍を克服して輝く成功を收めて南進し遂には滬杭甬鐵道を砲の射程內に制して上海と南京との唯一の聯絡路を遮斷せんとした。

【上海の包圍】　支那軍は滬杭甬鐵道を維持せんと、十萬の大軍を蘇州河の南岸に集中して日本軍を拒支せんとした。故に日本軍は十一月三日菊花の香る明治の佳日に上海を完全に包圍して死命を制せんとしたが、此の大軍に阻まれて思ふやうに行かなかつた。

此の時天來の福音が電擊的に傳はつた。それは十一月五日日本軍の杭州灣上陸のことである。

「日軍百萬上陸杭州北岸」

【上海の包圍】 支那軍は滬杭甬鐵道を維持せんと、十萬の大軍を蘇州河の南岸に集中して日本軍を拒支せんとした。故に日本軍は十一月三日菊花の香る明治の佳日に上海を完全に包圍して死命を制せんとしたが、此の大軍に阻まれて思ふやうに行かなかつた。

此の時天來の福音が電擊的に傳はつた。それは十一月五日日本軍の杭州灣上陸のことである。

「日軍百萬上陸杭州北岸」

と大書した氣球廣告が上海の上空に打揚げられた。之を見て支那軍は驚天駭魄し、日本軍は拍手喝采した。殺氣立てる陣中に於て此の思ひ掛けない處置は彼我の士氣に大なる影響を與ふるものである。しかもそれは虚報でも風聲鶴唳でもなく事實であつから益々戰線に變化を來たし支那軍は逐次退却して南市方向に入り日本軍は士氣益益旺盛となりて戰況は有利に進展し十一月九日には今次上海事變直接の導火線となつた大山大尉遭難事件の虹橋飛行場を奪取し、正門屋上高く日章旗を揭げ感激の萬歳を唱へた。又同日他の一隊は龍華鎭を占領し玆に大上海の包圍を完成した。八月二十三日吳淞上陸以來奮戰實に八十餘日である。

上海は斯くの如く包圍に陷りたるを以て日本軍の大部は反轉して上海西方地區に北上し嘉定、太倉方面の敵に向ひ殘餘の部隊は前面の敵を追つて南市に進んだ。

【上海南市の攻略】 南市は佛租界の東南方に接續せる地域で列國の反日陰謀の源泉であり國際資本主義の根據地である。從つて金融財政は勿論通商航運等あらゆる支那經濟の動力は此に集つてゐる。そこで南京政府は飽くまで此の地を死守しようとしたのである。

數萬の支那兵は猶ほ南市に立籠つて頑强に抵抗を試みた。日本軍は之を完全に封鎖し正に咽喉を扼して一氣に

葬らんばかりの態勢にあるが、城内無辜の民を戰禍より救はんが爲め暫く其の進擊を中止し、市中に傳單を撒布して警告するの外、戰車隊を南市の一部に突進せしめて威を示す等凡ゆる方法を以て南市の平和的明け渡し方法を講じた。

然し一部の支那兵が强硬である爲め已むなく、一擧掃蕩すべく十一月十一日斷乎攻擊を開始し飛行機、重砲の協力により市街戰を演じつゝ舊城内に進みて各要地を占領し、翌十二日市内の殘敵を掃蕩した。敵は例の如くに各處に放火し炎々と燃ゆる中を、日本軍は軍艦の援助の下に狹い街路を縫ひつゝ逐次前進し最後に堅固な建物に立て籠る頑敵を全滅して、午後四時半南市全部を占領し終つた。

上海の對岸浦東には以前より張發奎の麾下約二萬の兵ありて日本軍の背後を脅かしてゐたが、それに今回の敗兵が加はつたので、十一月十一日、日本軍の一隊は海軍陸戰隊と協力して之が掃蕩に任じた。浦東上陸は上海開戰以來最初のことであつたが、之により久しい間日本人居留地區を惱ました浦東の敵は一兵も殘さず、此に驅逐されたのである。

【黃浦江の啓開】 黃浦江は事變發生と共に支那軍が日清汽船會社の所有船其の他を沈めて航行を遮斷したのであつたが、十一月十二日日本海軍の勇敢なる行動により啓開作業が行はれ、引續き敵機雷も清掃され翌十三日には杭州灣に上陸した軍の一部に對し彈藥糧食を補給する爲め軍艦數隻が補給船數隻を嚮導して黃浦江を遡航した。

黃浦江の開通したのは支那側が閉塞して以來三箇月振りで、又日本軍艦が同江上流に遡航したるは今回が最初であつて其の意義は重大である。尙ほ其の上流に於て十一月十三日敵砲艦數隻を捕獲した。

は杭州灣に上陸した軍の一部に對し彈藥糧食を補給する爲め軍艦數隻が補給船數隻を嚮導して黃浦江を遡航した。

黃浦江の開通したのは支那側が閉塞して以來三箇月振りで、又日本軍艦が同江上流に遡航したるは今回が最初であつて其の意義は重大である。尙ほ其の上流に於て十一月十三日敵砲艦數隻を捕獲した。

以上により上海は陸上及び水上共に全く日本軍の手に歸し、南京の中央政府より離れて孤立の運命に陷つたのである。

支那が如何に上海を重視してゐたかは、其の附近に約八十師七十萬以上の兵力、就中最も精鋭なる中央直系軍を主とし、空軍亦其の主力を當方面に使用し、且つ陣地は豫め最も堅固に構築した事に徵しても察せられる。之を勇敢なる日本軍は寡兵克く八十餘日を以て攻略したのである。

此の上海戰の勝利は居留民救援の目的達成は固より支那軍に與へたる鐵鎚的打擊によりて彼等が如何に大軍を集中し、如何に堅陣に據るとも到底日本軍の猛攻には抗し能はざることを如實に立證せるもので、彼等の戰意を破碎するに與つて效果あるべく、又南京政府より經濟活動の心臟である上海を分斷したることは彼等の運命に大なる影響を及ぼしたことも否定し得まい。勿論支那としては南京上海間の交通遮斷に處する覺悟と準備とは講じてあつたらうが、彼等が危險と困難に暴露せることは決して昨日の比ではない。つまり上海の喪失は片腕を失つたものとも云へよう。之に反し日本としては上海の奪取は北方太原の陷落（十一月九日）と相俟つて支那膺懲の戰を本格的軌道に進めたと云ふことが出來よう。

八月下旬日本陸軍の上陸以來十一月中旬迄に於ける兩軍の損害は支那軍にありては遺棄死體約八萬、死傷概數

約三十萬、俘虜一千、小銃一萬四千、各種砲九十、機關銃二千三百其の他多數、日本軍の戰死約一萬であつた。

日本軍が大場鎭の陣地を突破して蘇州河を渡るや二つに分かれ、一は前述の如く上海南市の攻略に任じ一は上海の西方に敵を追擊し右からすれば劉河鎭、太倉、嘉定、南翔、諸翟鎭等を占領し、杭州灣に上陸したる新軍とは十一月十日諸翟鎭、泗涇鎭附近に於て連絡し然る後協力して追擊に任じた。

其六　評　論

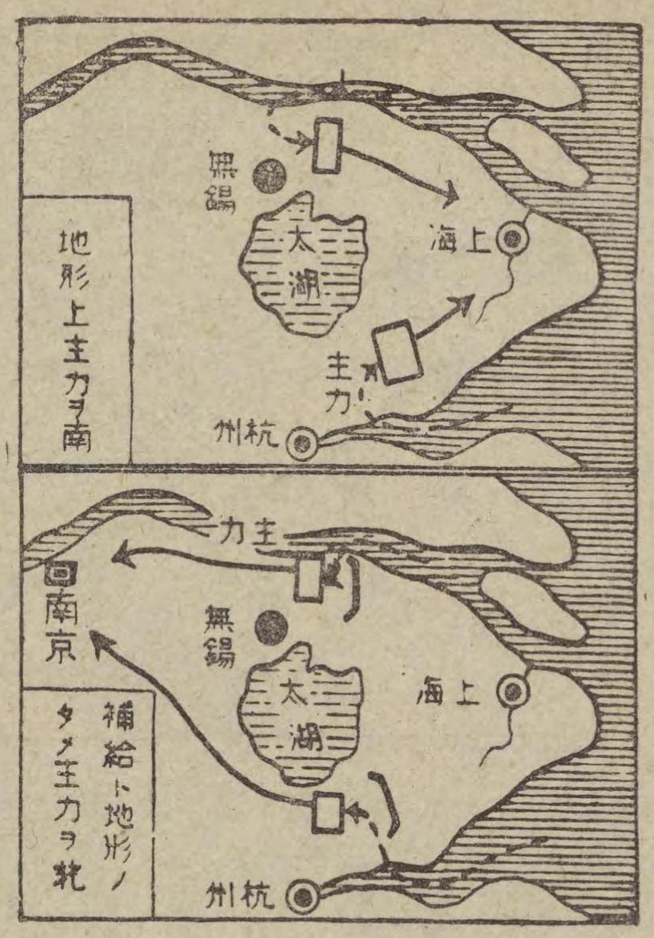
【日本軍に就いて】上海に於ける損傷は支那軍の約三十萬に對し日本の戰死者約一萬であれば、あの位堅固の陣地の攻擊による犧牲としては必ずしも過大とは云はれない。然し作戰に就いては色々の意見があるであらう。

單に上海を攻略しようと云ふ戰略論からすれば固より色々の案があるに相違ない。然し今回に於ける日本軍の上海攻擊は或る條件に制限されたものであつた。即ち上海に在る三萬の居留民同胞を早く救援せねばならぬと云ふことである。故に戰略の法則を十分に善用して攻擊作戰を指導する譯には行かなかつたであらう。

故に少しは無理でも速戰速決主義を取り、上海に近い吳淞附近に敵前上陸を强行して遮二無二、平押し的の攻擊の一手を用ひたものであらう。斯く限定された範圍に於ては軍隊をアノ手、コノ手と運用するの餘地がなく唯唯直面した鐵壁陣地に向つて肉彈攻擊を敢行するより外に手段がなかつたのである。それが亦日本軍の豫期した所のものであつたらう。

若しも以上のやうな特別の拘束なく、單に上海を攻略しようとせば、次の如き作戰は蓋し亦有力なものでもあらう。即ち一軍を揚子江より太湖の北方地區に上陸せしめ、主力軍を以て杭州灣に上陸し、太湖の南北より上海を包圍的に攻擊し一擧に敵を江中に陷擠覆滅しようと云ふのである。又も一つは太湖の南北に要點を占めて上海

若しも以上のやうな特別の拘束なく、單に上海を攻略しようとせば、次の如き作戰は蓋し亦有力なものでもあらう。卽ち一軍を揚子江より太湖の北方地區に上陸せしめ、主力軍を以て杭州灣に上陸し、太湖の南北より上海を包圍的に攻擊し一擧に敵を江中に陷擠覆滅しようと云ふのである。又も一つは太湖の南北に要點を占めて上海に備へ、補給便を顧慮し主力を以て北方より南京を衝くの案である。此の際若しも上海の敵軍が出擊し來らばそれは寧ろ我の望む所で敢て怖るゝに足らぬ。要するに太湖は上海に對する作戰を策する上に於て有利な存在たると共に此の邊の地形は兵略の研究に趣味の在る所である。

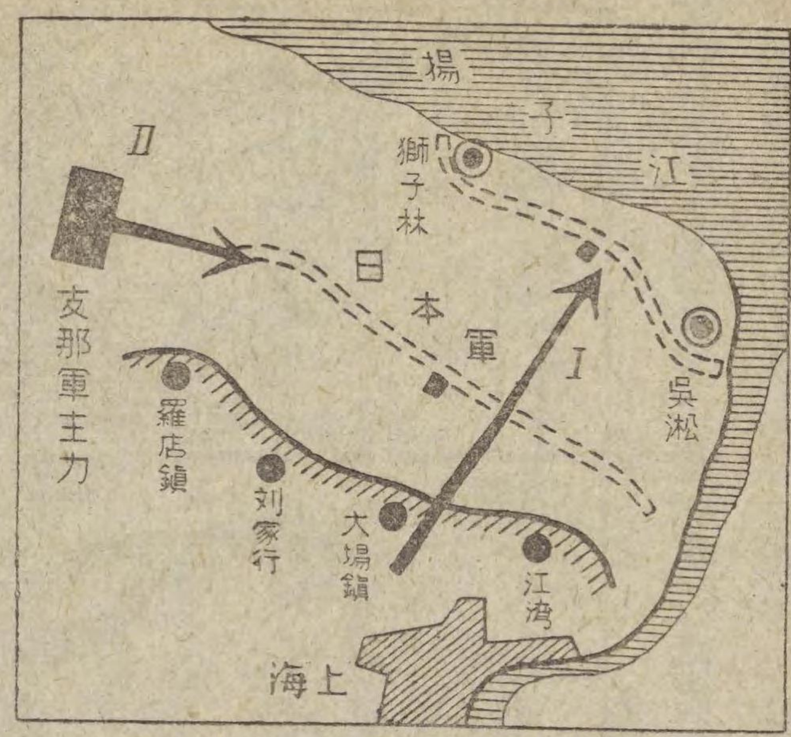


對上海作戰案

【支那軍に就いて】 支那軍の陣地は日本軍に向つて大逆襲に出づべく理想的に出來てゐる。しかるに彼等は堅陣をのみ恃みて之に立て籠り、一回だも眞面目の出擊をなさなかつた。此の前にも述べた如く支那人は防禦民族であるやうだ。南支那人は殊更さうである。支那の歷史を見ても南人は防勢を取り北人は攻勢に出で、其の結果北人天下となつたことが多い。曾つて蔣介石の北伐が成功したのは例外と見るべきである。一體支那は城壁の國で、從つて防禦に墮するは自然でもある。

今回の大戰に於て彼等は數倍優勢であるに拘はらず、逆襲に出でなかつたのは何の爲めか、最も局部的には小

逆襲を行つたやうであるが、それは後方にある督戰隊に强制されたまでのことであつて眞劍なものではなかつた。



對日逆襲案

支那軍の攻勢に出づべき時機は大凡二つの場合があつたらう。其の一は日本軍が揚子江岸に上陸して未だ其の隊勢の整はざるに乘じ、江灣鎭、大場鎭、劉家行、羅店鎭の陣地より一齊に突進することであり、他の一は日本軍が如上の陣地前に迫まつた時南翔、嘉定、劉河鎭方向から主力を以て突進し横なぐりに日本軍の右翼から席捲することであつた。以上の二案は戰略的には何れも成功の見込があるのである。然るに彼等は强大なる軍を督戰隊として使用し、陣地によつて日本軍を消耗殲滅せんとしたのは戰略を無視したると共に督戰隊の使用をも誤つたものである。督戰隊には中央軍の精鋭を以て任じたやうであるが之は宜しく逆襲隊の中堅として使用すべきものであつたらう。

が之は宜しく逆襲隊の中堅として使用すべきものであつたらう。

ものである。督戰隊には中央軍の

が之は宜しく逆襲隊の中堅として使用すべきものであつたらう。

ものである。督戰隊には中央軍の精鋭を以て任じたやうである

滬攻略戰概圖

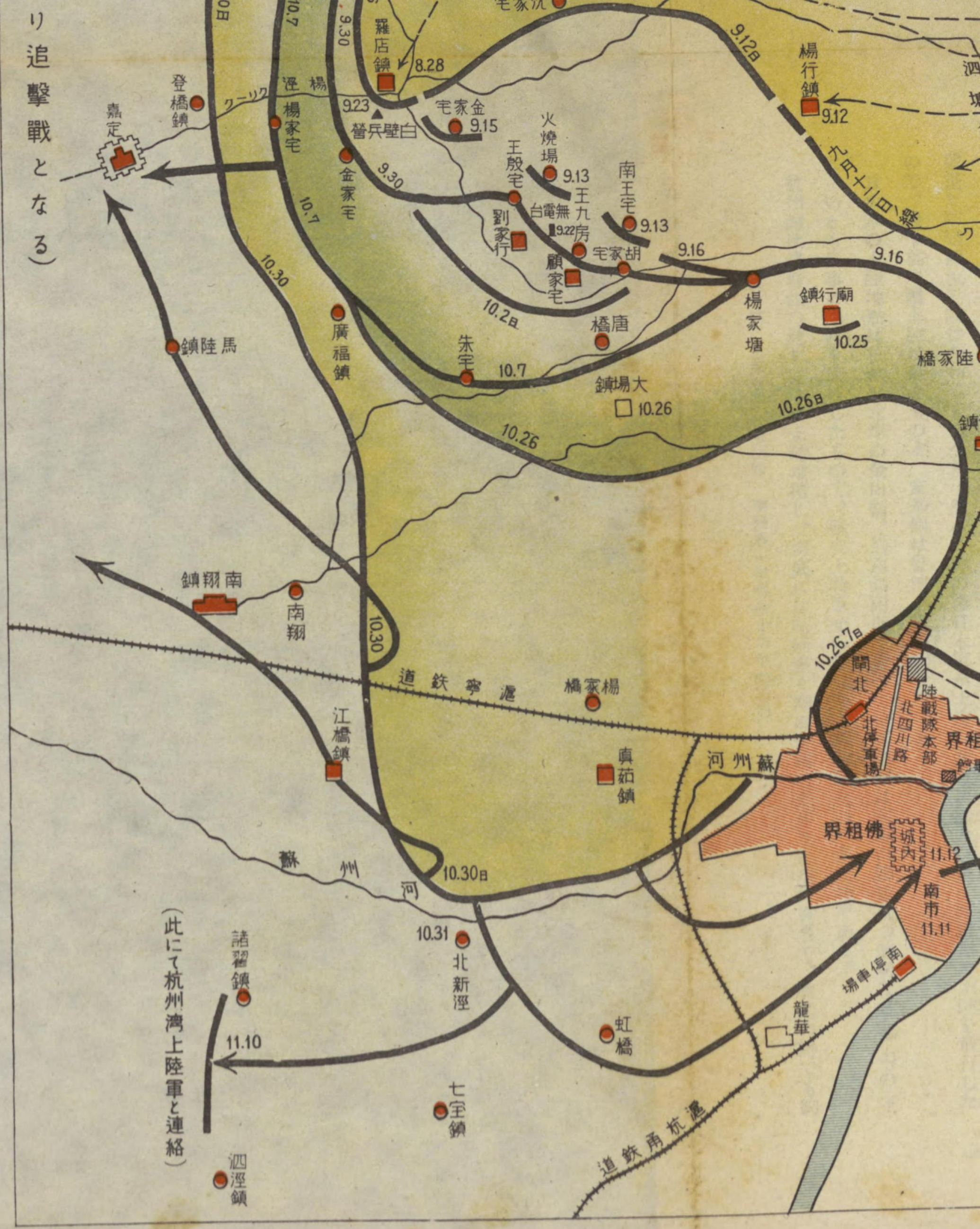
昭和十二年

揚

劉家鎮
新鎮
都宅
8.23
9.30
橋家沈
宅家樊
荻涇クリーク
9.1
台砲林子廟
施陸宅
鎮浦月
9.10
宅家沈
9.12
宅家周
10.30日
10.7
9.30
9.16
羅店鎮
8.28
9.12日
楊行鎮
9.12
登橋鎮
涇楊クリーク
9.23
宅家金
9.15
嘉定
楊家宅
營兵壁白
火燒場
9.13
王殷宅
金家宅
9.30
王九房
台電無
9.22
南王宅
9.13
劉家行
宅家胡
9.16
9.16
顧家宅
10.7
10.30
10.2日
楊家塘
鎮行廟
10.25
廣福鎮
橋唐
朱宅
10.7
鎮陸馬
鎮場大
10.26
10.26日
10.26
南翔鎮
南翔
10.30
10.26.7日
閘北
陸戰隊本部
北停車場
北四川路
滬寧鐵道
楊家橋
江橋鎮
蘇州河
眞茹鎮
佛租界
城
界

（之より追擊戰となる）

り追擊戰となる）



（此にて杭州灣上陸軍と連絡）

第二節　上海戰の追擊（昭和十二年十月—十二月）

第二節　上海戰の追擊（昭和十二年十月—十二月）

支那人の難攻不落と誇つた上海の堅陣も遂には崩潰して十一月九日日本軍の爲め上海市は包圍され、其の敗れたる支那軍の大部は上海西方に走り、一部は上海市の南市に遁れて此處に立て籠つた。日本軍は十一月十一、十二日を以て此の南市の敵を掃蕩したので此に陣容を新たにし全力を擧げて敵を西方に追擊することゝなつた。是れに於てか上海より南京に至る約八十里の猛追擊戰が起つたのである。此の追擊は松井大將の統帥に基き上海攻擊軍と新たに杭州灣に上陸した軍との協力によつて行はれた。先づ杭州灣上陸軍のことを述べよう。

其一　杭州灣上陸（十一月五日）

上海戰の酣なる十一月五日未明、突然數個師團の日本軍が杭州灣の北岸に上陸した。

日本軍が或は杭州灣に上陸すべしとの噂は上海事變勃發の始めから專らで、支那側では其の積りで此の方面に嚴重な防禦陣地を設けた如くであつた。然るに其の後日本軍が上海の北方吳淞及び揚子江沿岸に上陸を敢行したので、最早杭州灣上陸は無きものと、支那側は警戒を緩めたやうである。

日本軍の上陸地點は杭州灣北岸の金山衞、漕涇鎭附近であつて陸軍部隊は海軍の密接且つ適切なる協力の下に、いとも見事に上陸を完成したもので、戰史上特筆せらるべき大軍輸送上の一大成功である。

杭州灣は錢塘江の流を受けて土砂堆積し、海底には暗礁多く潮の干滿の差多きを以て有名で、普通の時でも約

四米に及び、潮流の速度早く、大潮の時には暴漲激湍が渦卷き、船著場としては最も不便な處である。輸送上陸は此の困難を冒して行はれたのであるが、當日は海上稀に見る濃霧で視界は極めて不良であつた。之は一方船舶の航行には大なる困難を與へたが、他方天與の幸運で全く敵に悟られず、目的地に到著することが出來た。輸送船が投錨するや陸軍部隊は多數の小艇に分乘し折柄の濃霧を突いて沿岸に殺到し轟々たる掩護射擊の下に上陸を完成した。

此の上陸の成功は前述の如く陸海軍の共力一致と、秘密の完全なる實施と、用意周到の準備と、何時も乍らの天佑神惠に依つたのである。出發より到著まで全然敵に悟られなかつたのは周到なる注意によること勿論であるが、又所謂天佑であつたと言はなければならぬ。上陸軍が周到の準備を整へたと云ふことは、上陸前一箇月餘に亙り某地點に於て盛に上陸の豫行演習を行つた事實によつても其の一斑を知ることが出來る。

上陸當日たる十一月五日の未明は防禦に當つた支那兵は恰も交代の時機であつたので新舊守備兵が互に責任を轉嫁し十分の防戰が出來なかつたと云はれた。それで敵は抵抗らしい抵抗もせず潰走したので、日本軍は上陸までに戰死一名負傷一名といふ僅少の損害を受けたに過ぎなかつた。之に反し支那軍の遺棄死體は約一千であつた。

【北進部隊】　上陸部隊は二つに岐れ、一方は眞直に北進し一方は西に進んだ。前者の北進部隊は驚異的速力を以て前進し困難を豫期せられた黃浦江の渡河の如きは、豫ねての準備により附近より無數のジャンクを集めて無雜作に完了せられ、其の一部は十一月七日早くも松江西方に於て滬杭甬鐵道を遮斷し、他の一部は同九日松江を占領し、同十日には泗涇鎭附近に進出して上海方面より南下せる友軍部隊と連絡することが出來た。

松江は人口三萬、周圍約一里半の城廓を繞らしあり、江南地方で最も早く開け、春秋戰國時代には吳と越との

占領し、同十日には泗涇鎭附近に進出して上海方面より南下せる友軍部隊と連絡することが出來た。

松江は人口三萬、周圍約一里半の城廓を繞らしあり、江南地方で最も早く開け、春秋戰國時代には吳と越との武力的交渉地帶で、吳王闔閭の築いた城も此の近邊にあつたと云はれ、元の末期には明との爭覇戰が行はれ、明代には八幡船（倭寇）の荒掠最も甚だしく、長髮賊の亂には官賊兩軍の攻防を反復した古戰場である。

此のやうに上海より唯一の敵退路、滬杭甬鐵道を遮斷し且つ友軍相連絡したる以上は爾後は一意敵を急追するの一あるのみであつた。そこで松江方面に進出した北進部隊の主力は松江西北方に彷徨する敗敵を驅逐して北進し、同十日青浦を攻擊して之を占領するや息つく暇もなく北進、又北進十一日夕頃には白鶴巷鎭附近に於て蘇州河を渡河し安亭鎭の線に進出し、茲に再び京滬線を遮斷し、更に敗敵を急追し、十三日夕早くも崑山南方約一里の青陽港を奪取し其の西側のクリークを渡河し、翌十四日より崑山の攻擊を開始し夜に至るも攻擊を續行し、十五日朝遂に崑山を占領して城頭高く日章旗を翻へし續いて敗敵を西方に急追した。

崑山は人口約一萬、周圍約二里の城廓を繞らしあり、古の三國時代は吳の孫權の勢力下にあり、東晉時代には石勒軍が海上より此の地を攻略し、唐時代には、淮南の將秦裴の猛攻により陷落し、明時代には八幡船の侵入路となつて被害の甚大な荒掠を蒙つた所である。

以上は杭州灣上陸軍の內北進した部隊の所謂電擊的行動であつて十一月五日上陸してより十一月十五日崑山占領まで十日間、其の行程約三十里、此の間黃浦江と蘇州河の二河を橫斷し、戰ひ且つ進みて此の偉大な戰果を收

めたのである。崑山攻略後の追擊行動に就いては後述する。上海攻略の頃から崑山陷落時迄の戰を特に湖東會戰と呼稱せられた。

先に十一月十日青浦を攻陷した部隊の一部は工兵隊協力の下に舟、筏を利用し水路作戰を敢行して西進し、クリークを渡り澱山湖を横斷し、十一月十四日早朝蘇州南方の平望鎭に達し、蘇州より嘉興に通ずる鐵道を中斷し更に蘇州に向ひ前進した。

日本軍の水路作戰に就き少しく挿說する。今回の支那事變以來、日本軍は北支に於ては子牙河を利用して水上作戰を試み、今又澱山湖横斷の壯擧を敢てし、其の他黃河の大河を渡つては濟南城を陷れ、揚子江を溯りては敵前上陸を敢行し、杭州灣に上陸しては上海の背後を脅す等々の戰蹟に徵するに海國民族の特長を發露したものであつて、日本人は水を恐れざる民族である。之に反し支那民族は一概に斷定も出來ないが、日本人の如く此の水を利用するの作戰に迂なるが如し、昔し赤壁の舟戰の如き有名なものもあるが、概して陸戰民族のやうである。日本人が陸にも強く海にも强いのは其の天與の地形の然らしむる所で、此の强陸、强海の兩性具全は卽ち日本國土の國防を磐石たらしめる一大素因であつて玆にも日本は天佑の存する神國たりと感銘せずにはゐられないのである。

【西進部隊】　一方杭州灣上陸後西方に向ひ進擊した部隊は上陸後直ちに北上亭林鎭を拔きて黃浦江南岸に達し爾後進路を西に向け、十一月十日滬杭甬鐵道に沿ふ楓涇鎭を陷れ、續いて太湖南方に向ひ前進したのであるが、

此のことに就いては後述する。

要するに上海の背後を脅威すべき杭州灣上陸軍は上海の陷落を見るや、二つに分かれて直ちに追擊の新作戰に